

スーパーロボット大戦 狂機戦争

ダス・ライヒ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

光と闇、それは未来永劫、終わることのない戦い！

陰陽の如く、光あれば影、即ち闇も存在する！

その戦いはどちらが勝利し、どちらかが敗北しても円環の如く続く

！

そんな不運な戦いの舞台となったのは囚人惑星イマガワ。そこに、

光と闇の戦士が集う！

ついて来られる者だけついてこい！

参戦作品

鉄人28号

ザンボット3

レッドマン

北斗の拳

機動武闘伝Gガンダム

ジャイアントロボ THE ANIMATION —地球が静止

する日

真！ゲッターロボ世界最後の日

新ゲッターロボ

真マジンガー衝撃Z編！

デッドプール

戦姫絶唱シンフォギア（男キャラのみ）

目次

その名は今川竜騎（いまがわりゆうき）！ ゲッターに選ばれた男！	1
惑星イマガワ 降り立つ死の使者たち！	10
目覚めろ、ゲッター！	20
二人目の狂人、レン・クー！	32
第三の男、マ・ドソク！	44
一番槍の男とサイボーグ若頭！	57
マジンガーと覆面ガンダムファイター	63
赤いあいつとウルトラマンに憧れる星人	69
竜馬と人類に絶望した男	75
光に目覚めた超越者と奇怪な女！	86
少女のような少年と大人風鳴弦十郎（かざなりげんじゅうろう）	97
ロボットに変形する戦艦とコーウエン&ステインガー	107
流竜馬対流竜馬！	115
第四の壁を破壊する男、デッドプール！	125
決戦、インベーター！！	135
最終決戦！ 前編	147
最終決戦！ 後編	159
終わりになき戦いへ	175

その名は今川竜騎（いまがわりゆうき）！ ゲッター
に選ばれた男！

とある世界の光と闇の決戦にて、闇の首領の男が光の戦士に斃され
た。

「なにい!? ぐあああ!」

光の戦士が放った穏やかなる光の必殺技を受け、闇の首領は吹き飛
ばされて落下していく。

「おのれ! だが、この我はまだ負けてなどいない! 光ある限り影、
即ち闇は生まれ続ける! 光と闇の戦いは永遠なる円環なのだ!
全てを無にせぬ限り、未来永劫続く物なのだ! 故に我は何度でも蘇
る! 光を闇に覆い尽くすまで、我は決して死ぬことは無いのだ!!」

落下する闇の首領であるが、彼は光ある限り影、即ち闇は生まれ続
けるので光と闇の戦いは永遠に続く物であると、負け惜しみのような
台詞を吐く。

同時に光ある限り自分は何度でも蘇り、光の戦士が疲れ果てるまで
戦ってやると、自分を吹き飛ばした光の戦士に宣告する。

そんな彼の真下に、鉄塊の様な大剣を持つ全身がボロボロの大男の
剣士が姿を見せる。その剣士を見た闇の首領は驚愕する。この戦い
の前に、斃したと思っていた剣士であるからだ。

「き、貴様! あの状態で生きていたのか!? 我が一撃を受けても尚、
立ち上がれると言うのか!」

驚愕する闇の首領に対し、意識が朦朧としている剣士は答えること
なく、鉄塊の様な大剣を落下する男に向けて突き刺した。

「グアアア! お、おのれ! 死にぞこないの分際で!」

背中を貫かれた闇の首領は吐血したが、死に至らずにまだ息のある
剣士を睨み付ける。

「魔剣スレイブで我を貫いたくらいで、我は死なんぞ! 今の勝利
は貴様ら光にくれてやる。だが、次こそは我ら闇が勝利する! 束
の間の平和を、精々楽しみが良い!」

大剣で胸まで貫かれた闇の首領は、次こそは勝利して見せると宣言して今は息絶えた。

光と闇の戦いは未来永劫であり、闇の首領の言う通り全てを無にせぬ限り戦いは何処までも果てしなく続く。今は勝利しても、またいずれか戦うことになる。どちらかが疲れ果てるまで…。

「けっ…：だったら、俺は…無駄死にじゃねえか…！ 畜生が…」

そんな永遠に続く無数にある虚しい勝利の為、剣士は自分の死が無駄死にであったことを知ってか、絶望の余り力尽きてしまう。

だが、彼は前のめりに倒れることなく、立ったまま息絶えた。奇妙な死に方であるが、彼の身体は急激に石化してしまい、やがては等身大の石像と化してしまった。

この保存とも言えるやり方、気が遠くなるような年月を得て意味を見出すこととなる…。

あれから数千年か一万年、時は流れ、あの光と闇の決戦場は惑星イマガワへと姿を変えていた。

大男の剣士は大剣諸とも石造のままであり、ずっとその場で立っている。周りは原形を留めぬほどに変わり果てたと言うのに、石像だけはあの時のままだった。

数えるのも馬鹿らしい年月で惑星イマガワは入植者たちによって輝かしい発展を遂げたが、その発展は無限に続くことなく今は衰退期を迎え、やがて罪人たちを収監する囚人惑星と化してしまった。前の入植者たちは近くの星に移住しており、そこに居るのは問題のある人物ばかりだ。

その中の一人、今川竜騎いまがわ・りゆうきは十七歳と言う年齢にも関わらず、この惑星イマガワに収監された。

罪状は殺人と傷害。竜騎は近くの星の住人であり、札付きの不良であった。そんな彼が一人の男を殺害した。

だが、一人の殺人でもはや地獄が生温いとも言えるイマガワに収監される理由は、殺害した男が星の統治者の長男であったからだ。

星の統治者たる長男は出自の如く上級国民と揶揄される特権階級

出身であり、数々の犯罪行為を働き、それを親の権力を使って揉み消してきた。彼に泣かされ、泣き寝入りを余儀なくされた女性たちの数も計り知れない。長男は出自の特権を使い、気紛れに星の住人たちを苦しめ続けた。

その彼の振る舞いと碌に対処しない政府機関い人々が黙っているわけでは無く、ある政権打倒勢力が武装蜂起し、それを力尽くで政府は制圧戦としたために星の治安は悪化する。

ここでも長男と政府関係者のご子息たちの振る舞いに、一部の過激派たちに共産主義者を目覚めさせ、連日の如く特権階級を狙った共産テロが相次いだ。

話を戻し、なぜ竜騎はその長男を殺害したか、その一部始終をご覧いただこう。

「うげあああ!? い、痛い! 痛いイイイ!!」

「男が喚くんじやねえ! てめえ、杏子がそう叫んだ時も、何とも思わなかったのか!？」

ある空き地にて、長男とその一味たちを竜騎は卓越した身体能力と年齢に合わない数々踏んできた場数で打ち倒し、最後に残った長男の胸倉を掴んで顔を何度も利き手の右手で怒り任せに殴っていた。

何度も殴った所為か長男のやや整っていた顔面は変形し、あざと腫れで悲惨な物となっている。彼を殴る竜騎の右手も返り血か皮膚が切れてか、血で真っ赤だ。

なぜ竜騎がこの長男を殴るかは、目前の殴っている男が自分の彼女を陵辱して殺したからだ。殴られて同然の蛮行を働いた長男は竜騎を怒らせ、復讐鬼の彼の前で取り巻きたちを倒され、今こうして殴られている。

長男を殴り続ける竜騎は、彼が屈辱して殺した彼女が唯一自分を思ってくれる女性だと、殴り続けながら訴える。

「あいつはな、あいつはこんな、どうしようもねえ俺を気遣ってくれる迷惑でお節介な女だったんだぞ!? そんな女を、そんな優しい女を：!
! テメエの身勝手な都合で傷付けて! レイプした拳句に殺しや

がって！ テメエはクソだ！ どうしようもないクズだ！ 何が国家主席の息子だ!? 上に立つ奴なら、下の奴を思いやりやがれえ!!」殴りながら訴える竜騎であるが、殴られている長男は自分を恐怖の目で見続け、許しを請うだけだ。

そんな竜騎も右手が擦り切れるくらいまで殴り続けて疲れ果てたのか、殴るのを止めて胸倉を掴む左手を離し、両膝を地面に着き、幾ら殴っても彼女が返って来ることは無いことを知る。

「畜生が…！ 幾ら殴っても、そいつを殺しても、あいつが返って来る訳が無いのに…！ クソ、クソ…！」

その真実を知った竜騎は地面を両手で叩いて苛立ちをぶつける。こ相手を完膚なきまでに殴り倒しても、気持ちいが晴れる訳が無かった。殺害すると言う選択肢もあつたが、よく考えればそれであるの女性に戻って来る訳が無い上、一生、獄中で過ごすこととなる。例え目前の男を殺害したところで、人を殺したと言う罪悪感が残るだけだ。

泣き崩れて冷静となつた竜騎は顔を上げ、自分が半殺しにした目前の男に向け、自首するように説得する。

「おい、自首するぞ。お前がやったこと全部サツに言うんだ。俺も一緒に自首してやる。償うんだ」

立ち上がって一緒に自首するように長男を説得する竜騎であつたが、当の本人は自首する気も無ければ罪を償う気も更々なかつた。

「自首、自首だと…？ この俺が、お前みたいなゴミと一緒に警察に自首すると…？ ふざけるなよ…！」

竜騎が共に自首すると言ってきたことに、長男は怒りを覚えた。

この星の統治者の息子で、選ばれし人間たる自分が、なぜ目前のゴミである竜騎と共に警察に自首しなければならぬのか？

自分はこの星で何をしても許される存在。罪を認めて警察に自首しろだと？ ふざけるのも大概にしろ。ゴミと一緒に自首などするか。自分は選ばれし存在なのだ。自分が何をしようが無罪なのだ。そう、物を盗もうが、人を車で撥ねようが、殺そうが、女を犯そうが無罪なのだ。

そんな絶対的存在である自分を半殺しにし、拳句に自首を勧めた目の餓鬼こそが有罪。そう、自分こそ絶対であり、法そのものなのだ！

「お前だけが、お前だけが有罪なんだよこの餓鬼が!!」

自分に自首を勧めて罪を償えなどと戯言吐いた餓鬼である竜騎に向け、長男は懐にあつた自動拳銃を取り出し、安全装置を外して狙いを定めて発射した。

撃たれた竜騎は相手が拳銃を持っていたことに驚き、その場で立ち尽くした。相手が飛び道具を持っていた事を知らなかったらしい。

こんな餓鬼相手に拳銃を使うつもりは無かった長男であるが、あの餓鬼にしてやられ、拳句に自首を勧められたので怒りの余り抜いてしまった。迂闊に動けないでいる竜騎に向け、自分は何をしても許される存在だと改めて強調する。

「良いか餓鬼、俺は何をしても許されるんだよ！俺が殺した理由は簡単だ、この俺を怒らせるか、楯突いた身体！俺に犯された女どもは、この俺が目を掛けてやったのに、期待に答えるどころか、拳句に苛立たせたからだ！気を遣つただと？フン、俺の癩に障りやがって！俺の言うことを聞いてれば酷い目に遭わずに済んだ物を！どいつもこいつも！俺の思い通りにならねえ奴ばかりだ！イラつくぜ！誰のおかげで暮らせると思つてんだ!?!」

彼にとっては自分が傷付けられたからと言う物だったが、竜騎から見れば呆れるほどの理由だった。

同時にこの男を野放しにしていれば、この星の住人にとって更なる害となろう。

そんな考えが、竜騎の脳裏を走った。最初は殺す気でやったが、彼に屈辱された拳句に殺された思いの女性の事を思い、共に罪を償おうと自首を勧めた。

だが、結果はどうだ？親の権力で怪物と化した目前の男は償う気持ちも無ければ、反省する気も無い。

この星に住む全ての人々の安全の為、竜騎は目前の男を殺さなくてはならないと判断した。

「自首するだとう？ ああ、良いとも。自首しよう。ただし、お前は有罪で俺は無罪だ！ 身分を弁えろ！ このゴミが!!」

「…分かったよ。お前は、俺がどうなるうとも、殺さなくちゃならねえ怪物だつてことを…!」

「あつ？ てめえ、何を言つてんだ？ 俺を殺すだあ？ てめえ、こつちにはハジキがあんだぞお!! 実包だぞ！ 分かるかあ!!」

もう怪物である長男に、竜騎はこれから殺すと宣言した。

これに長男は圧倒的不利な状況にも関わらず、殺意を込めた目付きで睨み付ける竜騎の足元に向けて撃つ。威嚇射撃で並の人間なら怯むが、覚悟を決めた竜騎には何の意味も無かった。

こちらが拳銃を持つているのに、怯えるどころかこちらを睨み付けながら向かってくる竜騎に、逆に怯え始めた長男は拳銃を両手で握り、狙いを安定させようとするが、左手も震えて全く定まらない。

逆に竜騎は拳銃を向けられ、撃たれているのに恐怖を感じない自分に驚いていた。

「(なんだこりやあ？ ピストルを向けられてるのに怖くねえし、今は何でも出来そうな気分だ。いや、考えるな。今はこいつを殺すことだけに集中だ)」

竜騎が思う通り、自分は異常な状態だ。だが、考えて一度足を止めてしまえば、一気に恐怖で支配されてしまう。今は目の前の男を殺すことだけに集中し、強く地面を蹴って走った。

長男は拳銃を撃ち続けているが、恐怖の余りに手が震えて碌に狙いが定まらず、引き金を撃つたびに放たれる弾丸は全てあらゆる方向へ飛んでいる。たまに発射された弾丸が頬を掠めるが、今の竜騎には痛覚も感じなければ恐怖も感じない。

「来るな！ 来るなああ!!」

「うっ!!」

恐怖の余り拳銃を乱射する長男が放った一発が竜騎の左太腿に命中してしまった。考えないようにしていた事態が発生し、痛みを感じたことと思わず恐怖を感じた竜騎は足を止めそうになったが、その恐怖に負けずに一気に殺人対象へ駆け寄る。

「来るな！ 来る…あれ!? た、弾が…!?!」

「今だあつ！ ぬりやああ!!」

一発は命中したが、無駄に撃ち過ぎた所為で自動拳銃に装填された弾倉の中身は無くなってしまった。弾切れになったところで、竜騎は出血する左太腿の痛みを顧みず、疾走して勢いを込めた右拳を長男の顔面に打ち込む。その拳の威力は疾走の勢いが加わっており、そんな拳で殴られた長男は吹き飛んだ。

「いべあ!?!」

吹き飛ばされた長男は思わず拳銃を手放し、地面に叩き付けられる。仰向けになって倒れたところで、竜騎は相手が起き上がる前に走りながら飛び、対象の顔面に向けて右足を突き刺す。

これで殺せるかどうか竜騎には分からないが、今はやるしかない。そう思った竜騎は長男の顔面に向けて全力の飛び蹴りを見舞った。その狙いは、長男が持つ拳銃よりも正確であった。

「ま、待て！ 自首する…!?! 自首するかばつ!?!」

今頃になって自首すると言った長男であるが、もう既に遅く、竜騎の蹴りの爪先が口に突っ込まれ、後頭部が地面に叩き付けられた後であった。

助走をつけた蹴りでしかも竜騎の体重が合わさり、長男の頭部は口から上下半分に取り引き千切れてしまう。竜騎の蹴りは骨まで粉碎してしまつたようだ。下部から引き千切れた上部は近くにまで飛んでいき、残された下部の根元から噴水の如く血が噴き出る。その勢いは竜騎の右足を瞬く間に赤く染め上げる程だ。

相手を殺すことに成功した竜騎は、これまで以上に抑え込んでいた物が一気に噴き出て震え始める。恐怖もかなり抑え込んでいたように、失禁のみならず、脱糞までしていた。

「お、俺は…!?! 俺は人を、人を殺しちゃつたのか…!?! で、でも…!?! こいつを、こいつを殺さなきゃ…この星のみんなが、この星のみんなが…!?!」

血塗れの地面に尻もちを着き、罪悪感も加わつた竜騎は混乱して過呼吸まで起こしていた。

「こいつは、こいつは殺さなきゃ……！ 殺さなきゃ……」

その後、竜騎は余りの混乱の所為で鼻血まで出し、拳句に気絶してしまった。

これが竜騎が惑星イマガワに収監された理由だ。

人を一人殺しても、最悪でも無期懲役に処される。二人以上なら死刑に処されてしまう。

竜騎は未成年であり、この星の法律に少年法があるので、彼は数年以上少年院に拘留されるはずである。惑星イマガワに収監されるほどの罪人ではない。しかし、この星は政体は全体主義だ。統治者の意向によって法律も変わる……！

「被告人、今川竜騎は無期懲役刑。惑星イマガワに収監とする……！」

「な、なにっ！ 無期懲役刑!? しよ、少年法はどうなってんだ!? 俺は未成年だぞ!？」

「少年法? 少年法はたった今廃止された。未成年でも、成人と同じ刑が処せるように法律は改正された。全てはお前の様なゴミが、統治者のご長男を殺害したからだ」

「確かに俺は人を殺した! だが、あいつを野放したら、惑星中の人間が殺し尽くされていた所だぞ! それに俺はピストルで撃たれた! 正当防衛だ! だけでも殺した罪は償う! 更生させてくれ!」

裁判、否、これは裁判とは言わない。

竜騎には弁護士すら着かず、ただこの全体主義の星で新たに改正された法律の判断が下された。この改正は逮捕後に直ぐに言うか、昨日のうちに Rowe られており、この場で知らぬのは竜騎だけだった。

これに竜騎は正当防衛を主張し、殺した罪も償うと言ったが、裁判官は聞き入れるはずが無い。養豚所の豚を見るような目で、竜騎を睨み付け、刑務官らに連れて行くように伝える。

「煩い餓鬼だ。イマガワの奴らに可愛がってもらうんだな」

「離せ! なんだこの裁判は!? 裁判じゃねえだろうが! ふざけるなあ!!」

裁判官の指示を受けた二人の刑務官に連れて行かれる竜騎は、こん

な物は裁判では無いと訴えるが、この場には裁判官と二人の刑務官、竜騎の四人しかいない。傍聴者など誰一人いなかった。ただ被告人に判決を下すだけの間なのだ。

こうして、今川竜騎は囚人惑星イマガワに収監された。

だが、これはイマガワの奥底に眠る生命の進化を促す怪物エネルギー体、ゲッター線による導きであった…！

今の竜騎は知らない。この性質の悪いエネルギー体選ばれてしまった不運な男であることを。そして、これから未来永劫、光と闇の終わりになき戦いの渦に呑み込まれることを…！

惑星イマガワ 降り立つ死の使者たち！

「よし、そろそろ大掃除の時だな」

竜騎が惑星イマガワに収監された頃、衛星軌道上にある宇宙ステーション内で、長官はイマガワに収監された囚人たちの抹殺を行おうとしていた。

「そのためにお前を呼び出したのだ。素晴らしきヒイツツカラルド」

「ええ、^ぐ指名を受けたのなら期待通りの働きをしてみせよう」

長官に呼び出された瞳孔の無い白眼とステキライン、赤髪のカニ頭が特徴的なスーツ姿の男、素晴らしきヒイツツカラルドは期待に応えろと言って部屋を出た。

ヒイツツカラルドが部屋を退室した後、長官は笑みを浮かべながらリモコンを操作して画面を天井から出し、その映像に映る惑星イマガワの様子を見る。

「フッフ、楽しいショーになりそうだな」

これからヒイツツカラルドが行う殺戮劇を楽しみにしながら、長官は期待を込めた瞳で画面を見た。

一方、惑星イマガワに収監された今川竜騎は、収監されていた囚人たちによる歓迎を受けていた。

「死ねえー！」

歓迎会の一人、囚人服を纏ったモヒカン男が伸ばしに伸ばした鋭利な爪で竜騎を殺害しようと飛び掛かったが、アッパーカットで顎を強く打たれて吹き飛ばされる。

「うでぶっ！？」

「この餓鬼い！ おっばー！」

「けっ、十傑高校の方が難敵だったぜー！」

次々と襲い掛かる歓迎委員会のモヒカンたちを倒す竜騎は、徒党を組んで乗り込んだ高校に通う不良たちの方が強かったと豪語する。

そんな暴力染みた歓迎会が行われ、黙ってみている看守たちが驚く中、イマガワの極長たる大男が姿を現す。

「ほう、中々の苦しみめ甲斐がある餓鬼では無いか」

「おつ、ウイグル獄長！ こ、これは…」

現れたウイグル獄長と呼ばれる大男に対し、看守たちは頭を下げて竜騎に行く歓迎会の言い訳をしようとしたが、獄長は無言で手を翳す。

「いや、続けさせい。久方ぶりの骨のある奴よ。丁度、気分が良いわ！

あれをやらせい！」

数十人相手に息を切らさず、冷静に対処して戦う竜騎に、ただの小僧では無く、ウイグル獄長は久方ぶりに見た骨のある男と見ていた。

全員を伸したところで、ウイグル獄長は竜騎を見ながら高台より、ある条件を果たせば釈放すると告げる。

「貴様か！ 今川竜騎とか言う小僧は!?!」

「そうだ！ 何だテメエらは、ちゃんと仕事してんのか?! 襲われたぞ！」

「フン、それでも十数人の相手に一人で立ち回り、ものの見事に倒したことはあつぱれよ！ そんなお前に条件がある！ 達成できれば、釈放してやらんこともないぞ！」

「なに、釈放だと…!?! 聞かせろお!!」

案の定、釈放と言う文字をチラつかせれば食い付いた竜騎に、ウイグル獄長はある石像、それもこの惑星が開拓し始めた頃からよりも前にある剣士の石像を指差しながら条件を告げる。

「あの石像を、見事破壊して見せればこの惑星より釈放してやろう！

ただし、破壊して見せればだ！ 道具も使ってもいいぞ！ 爆薬もある！ やってみせい!!」

釈放の条件は剣士の石像の破壊であった。

だが、看守たちは驚愕するどころか笑っていた。ウイグル獄長も同様で、絶対に出来ないことだと言っている。石像を破壊する道具ままで、用意しているにも関わらず。

これに竜騎は不審に思っていたが、吠え面をかかせてやろうと思いい、剣士の石像の前に立った。

「石像をぶつ壊す道具は揃ってる。爆弾もあるじゃねえか。なんでみ

んな、出来ないって面をしてんだ？」

剣士の石像を見た竜騎は、この惑星イマガワに居る全員が、自分が石像を破壊できないと確信していることを不審に思っていた。

裏返せば、自分を釈放してくれるために用意した善意なのではない、ハンマーを使って石像を破壊しようとした。だが、思いつ切り力を込めた強打に石像はびくともせず、逆にハンマーが壊れてしまった。

「な、なにいい!？」

ハンマーが壊れてしまったことに驚く竜騎を見て、ウイグル獄長を含める看守や囚人たちは笑い始める。

「フツハツハツ！ どうしたア？ そんなへっぴり腰じゃ、石像の一体や二体、ぶっ壊せんぞ！」

「野郎、この石像になに仕込んでやがんだ!! 今度は爆弾で吹っ飛ばしてやる！」

自分を嘲笑うウイグル獄長たちに、苛立つ竜騎は爆薬で石像を吹き飛ばすことにしたが、これも失敗してしまう。

「な、何故だ!? なぜ石像は壊れん!？」

これでも、ウイグル獄長たちの意味が分からなかった竜騎は、何をやっても石像が壊れないことに驚く。

そんな慌てふためく彼に、ウイグル獄長は石像がなぜ壊れないのかを説明する。

「なぜ壊れんことに驚いているようだな、小僧！ 教えてやろう、その剣士の石像はどんな物でも壊せない材質で出来ておるのだ！ 我々にもなんで出来てるか分からん！ その石像は我々がこのイマガワに足を踏み入れる前からあり、重機で潰そうとすれば、逆に重機が壊れる始末！ 大砲で撃つても傷一つ付かず、ミサイルでも同様なこと。拳銃にビームですら効かん！ 隕石が落ちようが、核が落ちようが、あの通りに傷一つなく聳え立つとる！ もうどうすることも出来ん神の如くの石像よ！」

あの剣士の石像は何をやっても壊れない物であると言えば、竜騎は騙されたと判断して抗議した。

「て、テンメエ！ 汚ねえぞ！！ 何をやってもぶっ壊れねえ石像をぶっ壊せば、釈放だなんて抜かしやがって！」

「馬鹿め、釈放など端からする気は無いわ！ お前の様な暴れん坊を抑え込むための儀式よ！」

「クソが！ これでも食らいやがれ！」

「奴が爆弾を投げたぞ！ 離れろお！！」

最初から仕組まれた事と分かれば、竜騎は残っていた爆薬をウイグル獄長に向けて投げた。

周りの看守たちが逃げ出す中、ウイグル獄長は自分の兜に仕込まれた千条鞭を引き抜き、投げ付けられた爆弾を無数の鞭で破壊した。

「な、なんだと!?!」

「馬鹿な小僧よ！ このわしに、そんなちやちな爆弾など通じるか！

たいざんりゆうせんじょうべん
泰山流千条鞭！」

「ぬわあーっ!」

爆弾を鞭で破壊されたことに驚く竜騎に対し、ウイグル獄長は必殺技を叫びながら得物の千条鞭を彼に叩き付ける。この無数の鞭を受けた流石の竜騎も無事では済まず、一秒に何百発も打たれた感触を覚えて地面に倒れた。

「フン、この程度で伸びるとは。張り合いの無い小僧よ！ 牢にぶち込めえ！」

自分の必殺技を受けるだけで気絶した竜騎に、ウイグル獄長は張り合いが無いと言って部下たちに彼を牢に入れ込むように指示を出したが、看守の一人がある報告をする。

「獄長、獄長殿！」

「なんだ騒がしい！ 言ってみろ！」

「妙なスーツの男がこのイマガワの宇宙港を襲撃しております！」

「なんだと!?!」

それは、素晴らしきヒイツカラルドによる襲撃の報であった。

その頃、長官からの命を受け、惑星イマガワの掃除を開始したヒイツカラルドは、先に脱出手段を奪おうと宇宙港を襲撃してい

た。

彼は踊りながら指を鳴らせば、指を鳴らした方向に居た物体は真っ二つに割れる。彼は鳴らした指から真空刃を放っているのだ。例え人間であろうと、指を鳴らした瞬間に放たれた真空刃によって一瞬にして真っ二つにされる。

「ひでばっ!」

「ぶへっ!」

ヒイツツカラルドが指を鳴らした方向にあつた人や物体は次々と切断されて行く。

そんな指を鳴らして踊りながら破壊と殺戮を行うヒイツツカラルドに、頭にターバンを纏つて三日月刀を持った数名が襲い掛かる。

「おのれえ、名を名乗れい!!」

「私か」

名を名乗れと告げる三日月刀を振るおうとした剣士に、ヒイツツカラルドは顔面に指を鳴らす瞬間の左手を向け、名乗り始める。

「私は素晴らしきヒイツツカラルド。諸君らの掃除を命じられた者だ」

「ぞ、掃除…?」

名乗り終えた後、ヒイツツカラルドは剣士に向けた左手の指を鳴らして真っ二つにする。

自分らが掃除、それも抹殺されると分かった惑星イマガワの者たちはなぜ抹殺されるのかとヒイツツカラルドに問う。

「な、何故だ!? なぜ我々が抹殺されねばならない!」

「理解が速くて助かる。どうやら収容しきれない程に囚人が溢れているらしくてな、一度、掃除して新しいのを入れたいようだ。要するに、植え替えだ」

問うてきた剣士に対し、ヒイツツカラルドは植え替えに例えて指を鳴らして再び殺戮を始める。

何百人も指を鳴らして殺し続ければ、自分よりも大量に破壊している者は現れる。その方向を見れば、ガンダムがイマガワの者たちを殺戮していた。

そのガンダムの名はネロスガンダム。モビルスーツでは無くモビルファイターと呼ばれる格闘技用のガンダムであり、搭乗者はミケロ・チャリオットである。

『ヒヤッハッー！ 虹色の足いいい!!』

「うわあああ!!」

現れた機動兵器を、ミケロは自分のガンダムで次々とスクラップにしていた。

「ミケロ・チャリオットか。あのジジイめ、余計な奴を入れるとは」

ヒイツツカラルドは長官が掃除にミケロを投入したことを知らなかったらしく、余計に暴れ回る彼を見て眉をひそめた。

「まあ良い、ここは奴に任せ、私は收容施設へ向かうか」

広すぎる宇宙港の破壊をミケロに任せ、ヒイツツカラルドは竜騎が収監されているウイグル獄長が収める收容所へと、両腕を組みながら前傾姿勢を取り、足を高速で動かしてステップを踏みつつ向かった。

「おらあ！ さっさと牢に入らんかいボケ共ツ!!」

ヒイツツカラルドがこの收容所に接近していることを知らず、ウイグル獄長らは竜騎を含める囚人たちを牢に收容させていた。だが、ヒイツツカラルドの進行速度は予想を遥かに上回っており、門番が彼を目視した頃には既に指を鳴らされた後であった。

「な、なんだあいつは?!」

『あべしー!』

その言葉を最期に、二人の門番はヒイツツカラルドが指を鳴らして放った真空刃に切り裂かれていた。

走りながらヒイツツカラルドは門を破壊し、内部に侵入して目に付く物全てに真空刃を放って收容所で破壊と殺戮を再開する。所構わずに踊りながら指を鳴らして真空刃を放つため、收容所のありとあらゆる施設と設備が破壊された。人間は切断されて真っ二つとなっている。

「ぎべっ!?!」

「タコスツ!?!」

「クニオ!？」

恐るべき強さを誇るヒイツツカラルドに無謀にも挑んだ看守や囚人たちは、当然の如く指を鳴らして放たれる真空刃によって切断される。破壊された建物の瓦礫の下敷きとなった弟を助けようとする兄に、大殺戮を続けるヒイツツカラルドは気付いて殺そうと思つて近づく。

「しつかりしろ! 弟!!」

「あ、兄者…! 俺を放つて…!」

「出来るかそんな事!!」

兄弟愛を見せる囚人の兄弟に対し、ヒイツツカラルドは冷酷にも殺意を向け、瓦礫の下敷きとなった弟を必死に助けようとする兄に声を掛ける。

「美しい兄弟愛だな。手伝つてやろうか? ただし、二人揃つて真つ二つだかな!」

「ああ…!？」

両手で同時に指を鳴らし、ヒイツツカラルドは兄弟を抹殺した。

その冷酷なヒイツツカラルドに対し、大勢の部下たちと娯楽の為に生かしていた囚人たちを殺された怒りに燃えるウイグル獄長が千条鞭で攻撃する。

「貴様ア! 何者だあ!?! ここに収監されている囚人を殺しに来た刺客かア!？」

「刺客? 違うな、私はこの星の掃除を命じられた者だ。目撃者は誰一人として生かして置くなと言われている」

自分の攻撃を躲したヒイツツカラルドに、ウイグル獄長は収監された囚人を殺しに来た刺客なのかと問い詰める。これにヒイツツカラルドはウイグル獄長も殺すので、長官に命じられたことを語った。

「掃除、掃除だ?!? まさか、このわしまで抹殺しようと言うのか!?!」
「そうだ。看守も貴様も不要となった。土の植え替えだよ」

「おのれえ! 死ねえ! 泰山流千条鞭!!」

「フン、縄跳びか」

自分らも抹殺の大将と知ったウイグル獄長は、必殺技を叫びながら

無数の鞭を放った。これをヒイツツカラルドはウイグル獄長の必殺技を縄跳びと蔑み、尋常ではない身体能力で躲し切り、指を鳴らして真空刃を放ち、鞭を次々と切断していく。やがて全ての鞭を切断されたウイグル獄長は焦り、余裕の姿勢を見せるヒイツツカラルドを睨み付ける。

「ぬうう、わしの千条鞭が…！」

「縄跳びは終わりか？」

「舐め腐りおつて！ この技を受けて生きていた者はおらん！

もつこうはきよくどう
「蒙古覇極道!!」

得物を切断された拳句、煽られたウイグル獄長は完全に頭に血が上り、奥義を発動した。右肩に筋力を集中させて大きく膨張させ、全身の力を込めてヒイツツカラルドに向けて全力のシヨルダーアタックを行つた。

本人が言う通り、この奥義を食らえば一溜りも無く、落ちた瓦礫がウイグル獄長に当たるだけで砕け散っている。これほどのシヨルダーアタック、ヒイツツカラルドも無事では済まないが、彼は蔑んだ笑みを浮かべている。

「縄跳びの次は、闘牛の如く体当たりか。芸の無い奴だな」

「死ねえええ!!」

芸の無い奴の蔑むヒイツツカラルドに対し、ウイグル獄長は全力の体当たりをしたが、あっさりと避けられ、厚い壁に激突したところで何度の真空刃を背中より撃ち込まれる。

「ぐ、グアアア！ な、なにイイイ!!」

「フッフ、お前はもう死んでいる」

「おつ、おオオオ!? をろあ!!」

自分の渾身の技すら避けられたことに、ウイグル獄長は驚愕していた。そんなウイグル獄長に向け、ヒイツツカラルドは死んでいると告げた。その言葉を受けたウイグル獄長は断末魔を叫びながら爆死する。

「さて、もう一人」

ウイグル獄長を爆殺したヒイツツカラルドは息を殺して剣士の石

像の足元に潜んでいた竜騎に気づき、そこまで飛んでいき、彼の前に立つ。未成年の竜騎の姿を見たヒイツツカラルドは少し驚いたが、法律が改正されたことを思い出す。

「ん、未成年か。そうか、法律が改正されてここにも未成年が収監できるようにになったな。君は運が良い。このイマガワの未成年収容者第一号になれ、そして未成年収容死第一号にもなれる」

「ひっ…!?!」

恐怖して震える竜騎に向け、ヒイツツカラルドは残忍にも指を鳴らし、放たれた真空刃で彼を殺そうとしていた。

遠くでヒイツツカラルドが指を鳴らしながら破壊と殺戮を行っていたことを知る竜騎は、自分も指を鳴らされた瞬間に殺されると思い、両目を瞑ってしまっただが、指を鳴らしたのは別の方向、それも石像の方であった。

ヒイツツカラルドは剣士の石像から伝わる殺気に気づき、それに真空刃を放ったのだ。だが、石像はヒイツツカラルドの真空刃でも切断できなかつた。

「なんだ、この石像は?! 生きていると言うのか?!」

「生きてる? 何言ってる?!」

石像より感じた殺気で、ヒイツツカラルドは剣士の石像が生きていると言った。これに竜騎が混乱する中、動かないであろう石像が急に崩れ始めた。これにヒイツツカラルドは石像の中に眠る何かが目覚めたと判断し、指を鳴らし続けて真空刃で石像を跡形もなく破壊しようとして試みる。

「目覚め始めた?! 目覚める前に細切れにしてやる!!」

そう言っただけで真空刃の弾幕を張るが、全てが弾かれるかの如く効いていない。

やがて崩れ去るころには、石像の中より鉄塊の様な大剣を携えた大男の剣士が姿を現した。外見は短い黒髪でアジア系のガツチリした体格の大男、背丈は190センチ。黒い甲冑に身を包み、黒いマントを羽織っていた。その男は石像の中より目覚めて早々に、自分を見て驚愕するヒイツツカラルドを睨み付ける。

「目覚めたか！　だが、加護はもう無いぞ！　真つ二つになれ!!」

自分を覆っていた石が無くなったことで、ヒイツツカラルドはもう加護は無いと判断して真空刃の弾幕を行った。

これで大男の剣士も一貫の終わり。そう思われていたが、剣士は目にも止まらぬ速さで大剣を振るい、ヒイツツカラルドの指を鳴らして放った真空刃全てを弾き落した。

「な、なんだと!?　あの大剣をあんな高速で!?!」

真空刃全てを大剣で弾いた剣士に、ヒイツツカラルドは驚愕する。そんなヒイツツカラルドに向け、剣士はその大剣を振るい落とす。

普通なら避けられる。そう思っていた近くで見ている竜騎であったが、対象が躲すよりも早く剣士は大剣を振るい、ヒイツツカラルドを真つ二つに斬り落とした。

「あ、あんな化け物を…!?!　化け物をあつさり…!?!」

驚く竜騎を尻目に剣士は大剣を背中のラックに戻し、しっかりと固定してから空を見上げる。剣士が空を見上げた理由も知らず、竜騎はこれで終わったと思つて声を掛けた。

「なあ、あんたは一体…!」

「小僧、安心しきつてるところ済まねえが、まだ終わりじゃねえぞ」

何者かを問おうとした瞬間、剣士はまだ終わって無いと告げた。それに釣られて空を見上げて見れば、恐ろしい死の使者たちが空から降って来ていた。

竜騎はヒイツツカラルドが剣士に斬られて終わったと思つたが、逆に地獄の始まりであったことを知り、絶望的な表情を浮かべた。

目覚めろ、ゲッター！

これで終わりではない。あのウイグル獄長ですら容易く葬った素晴らしきヒイツツカラルドを、大剣で真つ二つに斬り落とした剣士の言葉は真実であった。

彼が空に指を指せば、そこから無数の怪物たちが空より降り注いでくる。あれが全て、あのヒイツツカラルドを超える脅威だと言われれば、恐怖のあまり自殺してしまうだろう。

そう竜騎が考えようとした先、考えを見抜いてか剣士は大剣を地面に突き刺してから彼の頬を叩いた。

「うへっ!？」

「今、自殺しようと考えてただろ？ こんな状況でも生き残る努力をしろよ、若者よ。それとお前、ゲッターに好かれてんな？」

「げ、ゲッター？ な、何言っつてんだあんた？ いきなり出て来て無茶苦茶でおかしいぞ!？」

叩かれて正気に戻った竜騎は、剣士に無茶苦茶だと告げる。

確かに剣士の言い様は無茶苦茶であり、知らない竜騎にとっては意味不明な物である。だが、今の状況で説明している暇は、空より降りて来る死の雨が与えてくれない。

「うわっ!？」

「説明している暇はねえな。地下に行くぞ！ ここに居たら、メカブースト共に殺される」

空か振って来る死、その名もメカブーストの攻撃を受けた竜騎が伏せる中、剣士は説明の暇は無いと言って、大剣を抜いて背中中のラックに取り付け、左腕で彼を抱えて地下へと向かう。

剣士は強いが、敵が大き過ぎるので対処できない。地下に向かうのは、対抗できる手段があると言う事だ。竜騎を抱えて走る中、他の囚人や看守たちがメカブーストラに殺されるのが見えた。

「わあああ!?! 熱い！ 熱いイイイ!!」

「うわあああ!？」

「人が、人が虫けらみてえに…! 一体どうなってんだ…!？」

「俺も寝起きで分からねえよ。とにかく、ゲッター線があると
いう事は、ゲッターロボがあると
言う事だ。行くぞ！」

人が虫けらの如く殺されていくのを見た竜騎が絶望する中、
剣士は寝起きでなぜ攻撃されるのか良く分からないと告げ、
ゲッター線があるので、ゲッターロボがあるはずだと言
って地下に全力で疾走した。

地下に辿り着けば、竜騎を投げ付けて近くの壁に腰かける。

「いてっ!? 投げんなー！」

「赤ん坊じゃねえんだ。一人で歩け！ ゲッター線の匂いが
プンプンするぜ。なんだこの星は？」

「なに意味の分からねえこと言ってるんだ？ ゲッター
ってなんだよ？」

一人で歩けと言う剣士は、肌は何故かゲッター線を感じてこの惑星
イマガワが何で出来ているのかと疑問を抱く。

全く話が分からない竜騎はゲッター線が何かと問えば、
剣士は進化を促す質の悪い姓名エネルギーであると答えた。

「進化を促す生命エネルギーだあ？ 進化どころか、
厄災を振りまくエネルギーの間違いだろ」

「言えているな。それはそうと、小僧。お前なんて名だ？」

ゲッター線が進化を促す生命エネルギーであると聞いた竜騎は、
ゲッター線を厄災を振りまくエネルギーであると、今の状況を見なが
ら言った。

この生命エネルギーに好かれて数々の不運や悲劇を経験した者た
ちを知る剣士は、竜騎の例えがあっていると告げて名前を聞いていな
かったのか、名前を問い始める。

「今さらかよ。俺は竜騎、今川竜騎だ。あんたも名乗れよ」

「シユン、瀬戸シユン」

「ありきたりな名前だな。まあ良い、瀬戸。ゲッターロボってのは、
こっちの方向であってるのか？ さっきから頭ん中にこっちだとか
言う声が聞こえてきやがるんだ。あんたも聞こえてんのか？」

「お前、完全にゲッターに好かれたな。まあ良い、速く行こう。イン
ベーターも来るかもしれん」

名前がわかったところで、竜騎はゲッターロボが自分を呼んでいることを剣士である瀬戸シユンに言えば、シユンはゲッター線に好かれたと言ってその元へ急いだ。

「何だああのジジイ、俺以外にも掃除人を入れたのか？」

ネロスガンダムに乗って大殺戮を行っていたミケロ・チャリオットは、空から降って来るメカブーストを長官が送り込んだ自分と同じ同業者であると思っていたが、直ぐに自分をこのイマガワに送り込んだ長官からの通信を聞いて敵と判断する。

『み、ミケロ・チャリオット！ 今すぐわしを助けに来い！ 侵略者じゃ！ 侵略軍が攻めてきおった!!』

「侵略軍だと!? まさか、あれ全部が…!?」

『とにかく早く、わしを、わし、ギヤアアア!!』

長官からの通信で、空か降り注ぐ無数のメカブーストが全て敵だと認識したミケロが驚愕する中、衛星軌道上のステーションが破壊された。そこに居た長官は当然ながら死亡する。

「ち、畜生！ こんな、聞いてねえぞ!?」

指示を出す長官が死んだところで、ミケロはメカブーストが降り注ぐこの場から逃げ出そうとしたが、無数のメカブーストと共に降りて来た薄い緑の肌を持つ異星人が乗る巨大要塞バンドックに攻撃される。

『ほーっほっほっほっ！ 逃がす訳なからう!』

「っ!? ギヤアアア!!」

高笑いと共に放たれたバンドックの主砲を受け、ミケロのネテロガンダムは吹き飛ばされた。

「命中であります、ブッチャー様」

「よくやった。わしの獲物を横取りする不届き者は、バンドック砲で消し飛ばすに限る。さあて、殺戮の宴じゃ！ 眼下の人間どもを派手に殺しまくれい!!」

「御意、ブッチャー!」

部下よりネテロガンダムの消滅を確認したブッチャー、その名もキ

ラー・ザ・ブツチャーは大いに喜び、自分の娯楽の為にミケロに変わって大虐殺を継続する。

囚人や看守たちは巨大で倒せないメカブーストの前になす術もなく殺されるばかりであった。中には仲間を囫に自分だけ逃げようとする者が居たが、残虐なるブツチャーの前では意味もなく、虫けらの如く殺されるだけだ。

『アアアア!!』

「うむ、良い悲鳴じゃ。もつと人が居る方へ行くのじゃ！ 心地良い悲鳴の音楽が聴けるじやろうて！ ほーっほっほっほっ！」

メカブーストやバンドックの攻撃で殺される囚人や看守たちの悲鳴を、耳に心地の良い音楽を聴いたかのように楽しむブツチャーはもつと人の多い場所に移動しろと部下に命じた。

ブツチャーらの属する組織の名はガイゾック。宇宙を平和にするために開発されたコンピュータシステムであるが、ブツチャーを見る限り、もはや殺戮を楽しむシステムと成り果てていた。

惑星イマガワで行われているガイゾックの大殺戮に、挑もうとする者が居た。

「この星に眠る鉄人28号やゲッターロボが目覚めるまで、拙僧が時間稼ぎをせねばならんな」

挑む者は仏教徒の丸刈りの僧であり、体格は195センチとかなり大柄で僧と言うより武人であった。片手を添えながら念仏を唱えれば、周囲の大岩やビルの残骸が浮かび上がる。この僧は物体を浮かせる事が出来る念力使いであるのだ。

「我が名は嘉承^{かしょう}！ 殺戮の機械たちよ！ 拙僧がお相手いたそう!!」

嘉承と呼ばれた僧は時間稼ぎを行うべく、己の存在を知らしめんと叫べば、その叫び声を聞いたメカブーストは一気に振り返り、雄叫びを上げながら僧に攻撃してくる。

狙い通りに事が運んだ嘉承は笑みを浮かべ、浮かせた大岩やビルの残骸を向かってくるメカブーストに念力で投げ付けた。凄まじい弾丸の如くの速度で放ったため、数機のメカブーストが大破した。だ

が、装甲の厚いメカブーストは生きており、嘉承を殺そうとミサイルやレーザーを乱射する。

「その程度で拙僧は殺せん！ トオーツ!!」

雨あられのミサイルやレーザーに対して嘉承は体格に合わぬ身軽さで空中高く飛翔し、レーザーを高速で動きながら躲しつつ、無数のミサイルを足場にしながらメカブーストへの接近する。

その動きはもはや人ではない。常人には決死で出来ぬ速度で移動している。だが、これは危険な方法である。一度足を止めれば、流石の嘉承でもバラバラに吹き飛ぶだろう。一瞬の迷いが命取りなのだ。

そんな一瞬の迷いが死に繋がる移動をまるで慣れているかの如くこなし切り、メカブーストを自分の拳の間合いに捉えた。右腕に念力を込め、正拳突きを俄然のメカブーストへ向けて放つ。足元くらいしかない嘉承の念力がこもった正拳突きを受けたメカブーストは吹き飛んだ。一撃である。たったの一撃で巨大な機会の怪物が吹き飛んだのだ。

メカブーストを生身で破壊する嘉承に、メカブーストたちは集まり始める。嘉承の読み通りだ。

「さて、後は目覚めるまで拙僧が時間を稼ごう。速く目覚めんと、全て破壊し尽くしてしまうぞ。鉄人28号にゲッターよ！」

自分の周りに集まり始めた多数のメカブーストを見ながら、嘉承は鉄人28号やゲッターに早く目覚めねば全て破壊し尽くしてしまうと言いつつ、時間稼ぎの破壊活動を開始した。

「こ、これがゲッター…!?!」

一方、嘉承の時間稼ぎに気付かず、地下へと入っていた竜騎とシユンは、遂にゲッターを見付けた。ゲッターの奥には、鉄人28号と呼ばれる巨大なロボットが横たわっている。

ゲッターロボの姿を初めて見た竜騎は驚愕している。その姿はまさしく、怪物か悪魔その物であった。

「畜生、初代ゲッター1でも無けりやあ、新ゲッター1でもねえ。ゲッターカオスじゃねえか…!」

シユンは禍々しいゲッターロボを知っていた。その名もゲッターカオス。名前の通り、混沌が相応しい外見のゲッターロボだ。

ゲッターロボはそれぞれ三つのマシンが合体するタイプのスーパーロボットであり、三つの内の一つが上になるように合体すれば、それぞれの形態に変更可能。目前に立っているのが汎用型のカオス1なので、残りスピードの2とパワーと水中戦の3がある。三つのマシンは搭乗者が必要であり、三名の搭乗者が必要だ。

だが、シユンがこのゲッターを見て眉をひそめたのは、彼がゲッターカオスに余り良い思い出が無いようだ。

「なんで残念そうな顔してんだ？ 巨大ロボットだぜ！ あれなら外の化け物共なんぞ、一捻りだぜ！」

「ああ、こいつなら文字通り一捻りだよ。だがな、前にあいつに乗っていた三人は、ゲッター線と一体化しちまったんだ！」

「な、なんだってーッ!？」

ゲッターカオスを見て興奮する竜騎を他所に、シユンは余り出すことを懐疑的だ。その訳を直ぐにシユンは明かした。前に乗っていた三名は、ゲッター線に取り込まれたと語る。

ゲッター線に取り込まれたと聞いた竜騎は驚きの声を上げ、思わずゲッターカオスを見た。視線を向けられたゲッターカオスの周りから緑色のオーラが発生し、二つの眼から瞳が現れ、立ち尽くす竜騎を見る。その目を見た竜騎は、蛇に睨まれた蛙の如く怯み、思わず尻もちを着いてしまった。

「こ、こいつ…！ 俺を見てやがる…！」

「とにかく、ゲッターは駄目だな。俺は奥の鉄人28号に乗って戦う。お前はそこに居ろ」

ゲッターに見られた竜騎の怯えようを見たシユンは自分が鉄人28号に乗って戦う他ないと判断し、余断る古めかしい巨大ロボットの方へ向かった。

だが、竜騎も男だ。戦える力があると言うのに、戦わずに怯えて隠れるのは自分らしくないと思い、立ち上がってゲッターカオスを睨んだ。そんな彼に、シユンは忠告する。

「ムキになって乗ろうとしてんな、お前。言っておくが、安全は保障できないぞ。最悪、前任者たちと同様にゲッター線に取り込まれる可能性もある」

安全は保障しない、最悪な場合は前任者たちと同様にゲッターに取り込まれるかもしれない。

そう言われた竜騎は、それ以上前に進まなかった。自分でも、今の状況は何が何だか分からないのだ。ここはプロに任せ、素人である自分は邪魔をしないように隠れるのが筋だと思う。

そんな進めずにいる竜騎にシユンは少し言い過ぎたと思ってか、二度と元の世界に戻るつもりが無いならゲッターに乗って良いと告げた。

「二度と元の世界に戻るつもりが無いって言う覚悟があるなら、乗って良いがな」

その言葉を掛けられた竜騎は、巨大なゲッターカオスを見上げた。あれに乗れば、自分は二度と平和で喧嘩に明け暮れた日常には戻れないだろう。だが、自分の生まれ故郷には家族も居なければ、親友や仲間も恋人も居ない。家に帰っても、家財道具だけで誰一人自分の帰りと待つ者は居ないのだ。

竜騎は一人であった。かつて親友は居たが、仲違いして絶交してしまった。恋人はいたが、前に居た星の統治者の息子に屈辱された拳、殺された。両親は自分が生まれて直ぐに死んだと聞かされた。身内もテロに巻き込まれ、全員が死んでいる。竜騎は一人だ。故郷へ帰っても、誰一人自分を帰りを待つ者は居ない。

考えれば、竜騎にはもう自分しか残っていない。そうなれば既に答えは決まっている。ゲッターカオスに乗ると……！

「けっ、考えたらもう帰るところもねえんだ。俺にはもう何も残ってねえ、帰っても誰も待つていない。だったら……！ 俺は！ ゲッターに乗って新しい場所に行つてやるぜ！ たとえ行く着く先が地獄であろうとも!!」

考えれば元の世界に戻る必要性が無かった竜騎は、乗れば元に戻れないゲッターカオスに乗る決意と覚悟を叫んだ。半ば自暴自棄感溢

れるが、竜騎の覚悟は決まっていた。

少年の口から放たれたその決意と覚悟の叫びを聞いたシユンは思わず心に來たのか、自分が出会ってきた数々の戦士たちを思い出して懐かしく思つて感動する。

「良い覚悟だ。ヤケクソ感が溢れるが、それでも本物の覚悟と見た。後で降りたいとか言うなよ？」

「へっ、降りるかよ。もう地獄であろうが、なんであろうが行く覚悟は出来てんだ。気が変わらねえ内に、速くゲッターに乗せてくれ！」

「応よ。ゲッターの操縦系統はバカでも出来るくらい簡単だ。実際、バカが乗つて戦つてたからな」

改めてその覚悟を問えば、竜騎はもう覚悟は出来ていると答える。気が変わらない内にゲッターカオスに乗せてくれと言えば、シユンはゲッターロボはバカでも操縦できると告げ、竜騎を呪われしゲッターカオスに乗せた。

コクピットは広く、少し背の低い竜騎にはやや大きかったが、問題なく操縦桿やペダルに足が届く。操縦方法は付近に固定された箱の中に入っており、読めばシユンの言う通り竜騎にも容易く操縦が可能なほど簡単であった。読み終えた後、それを元の箱に戻し、操縦席にきちんと座つて操縦桿を握つてペダルに足を乗せる。

『準備は良いか？ こつちのはOKだ』

「俺も可能だ。説明書通りに行けば、小学生でも動かせるぜ」

『よし、こつちを見ろ。カメラは動かせるか？』

「これか」

無線機よりシユンに準備は出来たかを問われれば、竜騎は頷いて答え、カメラをゲッターカオスの背後に横たわっていた鉄人28号に向ける。残骸と思われていたが、元気に動いていた。

人が乗れないはずの鉄人28号であるが、頭部の辺りを見ると、人が乗ると思われるハッチが増設されている。どうやらシユンがそこに入つて、鉄人28号を操縦しているようだ。

「よし、俺も！ つ!? 動かねえ！ どういうことだ!?!」

『一度合体を解け。そうすりゃあ動くはずだ!』

自分もゲッターカオスを動かそうとして見たが、動かなかった。計器は正常に動いているが、操縦桿を動かしても、ペダルを踏んでもゲッターカオスは動かない。それを鉄人28号を動かして天井を破壊していたシユンに報告すれば、彼は一度合体を解けと命じる。

合体機能があることは知っていたが、せつかく最初から合体しているのに、パイロットの居ない残り二機はどうなるんだと竜騎はシユンに問い詰める。

「合体を解け？ 人が居ない身体と足はどうなるんだ？ 俺が乗っているサイコ号しか動かないんじゃないのか？」

『良いから解け！ 今は誰かさんが暴れてるおかげで、ガイゾック共は来ていない！ 地上で合体するんだ！ コンピューターが勝手にやってくれる！』

「ちつ、カッコよく地下より出て行きたかったのによ！ オープンゲット！」

竜騎の問いに、パイロットの居ない二機の合体はコンピューターが自動的にやってくれるので、それが分かった彼は自分が思う登場が出来なかったことを悔しながらゲッターカオスの合体を解いた。

ゲッターカオスはサイコ号、クレイジー号、クラッシュャー号の三つに別れ、竜騎が乗るサイコ号に無人のクレイジー号とクラッシュャー号が続いて地上へと飛び出す。

「ぐおおお!! か、身体が引き千切れそうだあ!!」

凄まじいGを感じた竜騎は身体が引き千切れそうだと叫ぶ。そんな彼が乗る地上へと飛び出し、空高く上がる三つのゲットマシンに、付近にいたメカブーストに気付いて攻撃を始めた。

「こんな状況で再合体は……!」

『俺が食い止める! その間に合体しろ!』

「よっしやー! ゲッターあ!!」

雨あられの攻撃であるが、直ぐにその攻撃は止んだ。鉄人28号に乗ったシユンが援護を開始したのだ。周囲のメカブーストを殴り、時には蹴って、首を引き千切って撃破する。

多数のメカブーストを相手にシユンが乗る鉄人28号が奮戦する

中、竜騎は再度のゲッターカオス1の合体に集中する。叫びながら操縦桿を前に押し出せば、サイコ号を先頭にクレイジー号とクラッシュヤー号が後に続く。

「カオス、ワァンンン!!」

竜騎が叫び終わった後、サイコ号の背後にクレイジー号が合体すれば、その背後にクラッシュヤー号も合体する。すると、三つの合体したマシンはゲッター線の影響で人型へと変わり、最初にあったゲッターカオス1へと変貌を遂げる。

空で再度合体したゲッターカオス1は自由自在に動かせるようになり、竜騎は興奮と高揚を覚え、戦意が増す。速くこのゲッターカオス1の力を試したいのだ。

「ようやく動かせるようになったぜ！ しかも手足のように動かせらあ！ さあ、怪物ども！ お礼は倍にしてたつぷりと返してやるぜえ!!」

自分を殺そうとしていたメカブーストに対し、竜騎は礼は倍にして返すと宣言してから地上に突っ込んだ。まずは真下に居たメカブーストに標的を定めて拳をぶつけければ、胴体を貫通する。人間の比ではない巨大ロボによるパンチだ。当然の如くメカブーストは大破する。「フン、ようやく出て来たか。危うい所だった…!」

ようやく出て来たシュンの鉄人28号と竜騎のゲッターカオス1を見て、嘉承は安堵する。流石の嘉承も、幾百ものメカブースト相手は骨が折れるようだ。

そんな嘉承の命懸けの時間稼ぎが功を奏したように、二体の巨大ロボは多数のメカブーストを破壊し続ける。

鉄人28号は殴ったり蹴ったり、先と同じように身体の部位を引き千切り、先端に鋭利な棘が付いた尻尾を武器にして戦う。気が付けば、鉄人28号の周りはメカブーストの残骸で溢れていた。

「おらあああ！ シャアアア!!」

一方でのゲッターカオス1は竜騎が喧嘩をするように素手で暴れており、同じくメカブーストの残骸で溢れている。効率が悪いと思っ
てか、シュンは竜騎にゲッターカオス1の武器を使うように告げる。

『おい、武器があることは知っているのか?』

「ああ? そう言えばあったな! これか。ゲッターアトマホーク!」

シユンに指摘され、武器があったことを思い出せば、竜騎は武器名を叫びながら両肩の射出口よりゲッタートマホークを取り出す。これもゲッター線のおかげか、先端が一瞬にして斧の形となった。両手に斧を持てば、竜騎はそれで次々と襲い掛かるメカブーストを切り裂き続ける。

やがて地上のメカブーストを全て撃破し尽くせば、残りは上空から攻撃してくる飛行型のメカブーストのみとなった。鉄人28号やゲッターカオス1には飛行能力があるので、空を飛んで地上と同じように暴れるが、効率が悪いので、シユンは竜騎にゲッターカオス1のもう一つの武器を使うように指示を出す。

『クソ、面倒くせえ! 今川竜騎、ゲッタービームを使え!』

「ゲッタービーム? 腹のこいつか! ゲッターアビイイムウウ!!」

直ぐに分かった竜騎は、技名を叫びながらゲッタービームを使用した。腹の射出口よりゲッター線のビームが放たれば、周辺に居たメカブーストは一掃された。周囲を見ずに放った為に、鉄人28号は巻き込まれた。思わずゲッタービームを食らい掛けたシユンは竜騎を注意する。

『馬鹿野郎が! 気を付けろ!!』

「す、済まねえ! 慣れてなくて」

『まあ良い、敵は退却したようだ』

注意されて竜騎が謝れば、シユンはガイゾックが退却していくのを確認する。

予想外の鉄人28号とゲッターカオス1の出現に、ブッチャーは大いに慌てて退却命令を出したのだ。

「ぶ、ブッチャー様! 鉄人28号とゲッターロボです! あ、あの二機にメカブーストの大半を破壊されてしまいました!」

「て、鉄人28号にゲッターロボ!? まずい! 退却、退却じゃあああ

!!」

部下からの報告で鉄人28号とゲッターカオス1の存在を知り、今度は自分が消されると思ったブッチャーは慌てる余り椅子から転げ落ち、退却命令を出した。その指示に応じ、惑星イマガワに展開していた全てのメカブーストは退却する。

「俺たち、勝ったのか…?」

『ああ、今のところはな。後の二人は生きてるかな』

ゲッターに乗った竜騎の初陣が勝利に終わったと告げれば、シユンは残り二名が生きているかどうか心配になる。

竜騎と目覚めたシユンの戦いは、まだ始まったばかりだ…。

二人目の狂人、レン・クー！

空より降り注ぐ無数のメカブーストを相手に、本来、三人必要なゲッターカオスを鉄人28号を駆るシユンの援護を受けながら一人で動かし、見事に初陣で勝利した竜騎。だが、次は無い！

早急に二人目と三人目の発見が必要であるが、二人目は意外と近くにいた。

その名はレン・クー。共産テロリストであり、標的が女子供でも躊躇なく殺す冷酷非道な男！

だが、それは自らの罪を権力や財力で揉み消す権力層や富裕層に対する憎しみから来る物であった。

罪状はテロを始めとした他多数の犯罪で囚人惑星イマガワに収監されたが、レンがイマガワに来る前の経緯を語ろう。

とある権力層、それも行政の大臣とその家族が住む屋敷に、二人目のゲッターカオスのパイロット、レン・クーと彼が率いる共産テロ組織が襲撃を開始した。

無論、テロを警戒して屋敷には軍の警備隊が展開している。直ぐに迎撃を開始する警備隊であったが、レン・クー率いる共産テロリストたちはまるで特殊部隊の兵士の如く強かった。

「ぐわあ!？」

「な、なんだこいつ等!! まるで特殊部隊じゃないか！」

次々とやられていく味方を見て、レンのテロ組織と対峙した軍の警備部隊は畏怖する。

派遣された部隊はレンの構成員らが単なるテロリストと認識していたらしく、侮っていたようだ。その付けは自らの命を持って支払う事となり、瞬く間に部隊の将兵等は次々と撃ち殺されるか、手榴弾で爆殺されていく。

リーダーであるレン自身も強く、彼に銃口を向けら兵士たちは手にしているライフルで撃ち殺されるか、左手に付けたカギ爪で抉られて殺された。

死神の如く、レンは自分に立ち向かった者たちの命を狩った。彼の周りは血と死体で溢れかえっていた。否、行く先は死体が転がり、まだ息のある兵士が居たが、レンは容赦なく銃弾を撃ち込んでとどめを刺す。

「ひいつ!? 来たあ!!」

「下がってー!」

あつという間に防衛線は突破され、レンとその一味が大臣が立て籠もる地下のシエルターへと迫る。

大臣一家が怯える中、部隊長と将校らは分厚い扉から彼らを下からせ、残った兵士たちと共に銃を構えてレン一味を待ち構える。

「中からロックされております」

「ハッキングして解除しろ。素早く済ませろ。増援が来る」

部下から中から扉が閉じられていると聞いた返り血塗れのレンは冷静に指示を出し、電子戦に長けた部下にハッキングを命じて扉を開けさせる。

ハッキング専門の部下は手練れであり、十秒もしない内にドアのセキュリティをハッキングしてレンの指示通りに扉のロックを解除した。それを声に出さずに表情だけで伝えれば、レンは突入の配置に着くように部下たちに手話で命じる。

配置が完了すれば、拳銃を持った部下がドアを開き、ドアの左右に配置している閃光手榴弾を持った部下二名が安全栓を外したそれをシエルター内に投擲し、待ち構えている兵士たちの目を眩ませる。

「し、しまったー! 閃光弾だー!」

敵の目が眩んでいる内に、ライフルから拳銃や短機関銃に持ち替えたレンとその部下たちはシエルター内に突入して一気に残りの警備部隊の兵士たちを撃ち殺す。レンはカギ爪で惨殺し、残った最後の兵士を拳銃で射殺した。

「ぜ、全滅…!?!」

「どうも、こんばんは。大臣殿とそのご家族の方々。わたくしは、レン・クーと申します。今回、貴方のご家庭にお邪魔したのは、制裁が目的でございます」

呼び寄せた警備部隊を壊滅させたレンに、大臣たちが恐怖する中、彼は礼儀正しく紳士的に怯える大臣たちに向けて挨拶を行い、同時に目的を告げる。

レンが大臣の屋敷を襲撃したのは、あることの制裁が目的であった。それを果たすべく、レンは大臣に近付き、その権力で握り潰した罪状を語り始める。

「貴方は汚職、隠蔽、その他諸々の数え切れぬ犯罪を行ってきた。それを自身の権力で揉み消す。うーむ、良くある汚職大臣だな。だが、お孫さんだけは除いて、奥さんに息子さん、娘さんに、息子夫婦の方々は犯罪一家だ」

メモを懐から出し、大臣の隠蔽した罪状を読み上げていく中、良くある物と思つて捨て、大臣の家族、それも息子夫婦に至るまで犯罪一家だと告げる。ただし、孫の方はまだ十代にも満たない上、何の犯罪も犯したことは無い。

そんなレンに対し、大臣は共産主義は無意味だと罵る。

「き、貴様ら共産主義者のやっていることは無意味だ！ 歴史を振り返ってみろ！」

「ああ、知ってますよ。だけど、あなた方権力層の汚職や富裕層の行いが、共産主義を生み出す結果になったことはご存じないようだ。現に共産主義を掲げた反政府勢力が誕生し、テロ行為を続けている。違いますかね？」

「くっ……！」

無意味だと罵つたが、自分ら権力層の行いが共産主義を生み出すと反論され、何も言い返せなかった。

そんなレンは孫に拳銃を向け、息子夫婦がひき逃げの隠蔽を行ったことを告げる。

「き、貴様!! 子供に銃を向けるなんて！」

「止めてえー！」

「子供に銃を向けるな？ あなた方夫婦は、ひき逃げを行ったそうです。公式には事故だったと報じられましたが、調べれば直ぐにひき逃げだと子供でも分かりますよ。それに、あなた方が轢いたのは幼い

子供、即死だったそうです。丁度、あなた方のお子さんの歳の子だ！」
ひき逃げを権力を使って事故にした息子夫婦に対し、レンは夫婦の
息子、即ち大臣の孫のを頭部を撃って射殺した。

「きやあああ!?!」

「お、お前！　なんてことを!!」

「なんてことだと…？　自分の息子と同じくらいの子を、撥ね殺した
お前たちが言うことか!?!　君たちの息子を俺が殺すように、お前たち
は見ず知らずの子供を撥ね殺し！　挙句に事故にした！　ひき逃げ
なのに!!」

息子を射殺されて悲鳴を上げる母と、怒りを燃やす父に向け、レン
は夫婦が撥ね殺した子供を事故で死んだと告げたお前たちが言うな
と銃口を向けながら反論する。

更にレンは大臣一家がこれまで揉み消してきた事件を暴いていく。

彼がこれ程までに権力層を憎み、共産主義者になったのは、学生時
代に権力層に両親や家族を奪われたからだ。故にレンは共産主義の
実態を知ろうとも、腐敗して自らの罪を権力や財力を使って揉み消す
権力層や富裕層などの上流階級を憎み、周りから悪だと罵られようと
も裁き続ける。

狂気とも言える信念で、彼はこうして共産テロを続けているのだ。
だが、腐敗した上流階級を憎む余り、賛同した同志たちですら引かせ
る行為に及ぶこともある。

それが今、同志たちの目の前でレンが行っていた。

「まだあるぞお！　窃盗、強盗、詐欺！　強姦！　殺人！　死体損壊！

ええい、お前たちはどれほどの罪を犯したんだ!?!　巨悪じゃないか

！　犯罪一家だあ!!　なんでこんな奴らが政界の上位に居るんだ!?!

もう我慢できない！　お前たち全員死ね！　死ね！　死ねえええ

!!

余りの罪状の多さにレンは怒り狂い、大臣一家を両手に付けたカギ
爪で惨殺し始めた。

全員をレンの目の前に集め、逃げられないように両手両足を縛り付
け為、大臣一家は逃げられなかった。そんな動けない上に抵抗できな

い大臣一家に、正気を失い、殺意の波動に目覚めたレンはカギ爪を振るい、一人、また一人と惨殺していく。

辺り一面に血と肉片が飛び散り、近くに立つ部下たちは返り血を浴びる。その中でグループに入って日が浅い少女は、目前に行われる光景に我慢できず、嘔吐してしまった。

やがて大臣一家が物と原形を留めぬくらいの肉片と化せば、息を切らしたレンはカギ爪を振るうの止め、少し呼吸を整えてから冷静沈着な性格に戻り、部下たちに撤収を命じる。

「さあ、撤収するぞ。もうじき敵の増援が来る」

「こんなの、狂ってますよ……!」

撤収を命じるレンに対し、嘔吐した少女は口を拭いながら彼に先の行いを咎めた。

「なんですか、これ？ 子供まで殺すなんて……! こんな肃正じゃないですよ……! 私たち、まるでただの殺人集団じゃないですか……!」

「ただの殺人集団……? なんだ、自分の思っていたのと違い、文句を言うのか……?」

その新人の咎めに対し、レンは悍ましい目付きで彼女を睨みつけながら自分のやり方に文句があるのかと問う。

他の部下たちは新米の同志を助けようともしなかった。レンに異論し、誰一人すら生きていなかったことを分かっていたからだ。

「だって、これはただの殺人……」

レンのやり方に異論を唱える少女であったが、それが彼の癩に障ったのか、両目を彼が高速で放った右手の二つの指で潰された。続けてレンは少女の耳を削ぎ、最後は鼻を引き千切る。

「目だ! 耳だ! 鼻だア!!」

肃正であった。彼が叫びながら目を潰し、耳を削ぎ、鼻を引き千切った後、悶え苦しむ少女の首を踏み付けて息の根を止める。死んだ少女に対し、レンは哀悼の意を表することなく、軽い気持ちで自分の組織に参加した彼女を咎めた。

「全く、ノリで参加した奴は直ぐこれだ。今度は本気な者にしろ。革

命をヒーローごっこと一緒にされては困る」

恐怖で支配されている部下たちにそう告げた後、レンは片手を上げて部下たちについてくるように指示した。

それから数か月後、レンのテロ組織は軍の本気の制圧作戦の前に敗れ去り、彼の同志たちは兵士たちに殺されるか凌辱された。

そして、レンは重罪人として惑星イマガワに収監される。通常なら処刑されてもおかしくないが、何故かイマガワに収監された。

その理由は一つ、レン・クームもゲッター線に選ばれたからだ！

時は戻り、ガイゾック襲撃後のイマガワにて、自分が収容されていた牢を破壊され、出て来たレンは辺り一面が死で溢れかえっていることに驚いていた。

「い、一体、何が…!？」

そんな驚いているレンに、彼からするゲッター線の匂いを感じ取ったシユンが見付け、目前に姿を現す。

「見付けたぞ、第二のゲッターに選ばれし者」

「な、なんだあんたは!? 一体何が起きてるんだ!? 教えてくれ!」

いきなり現れ早々に何の説明もなしに言うシユンに対し、レンは何が起きたのか説明を請うが、目前の大男は何の説明もせず、目にも止まらぬ速さで接近して腹を強打した。

「グハッ!」

「説明の時間がねえんだよ。なんたって、インベーターが来やがったからな」

気絶したレンを抱え、シユンは空を見上げながら彼に告げた。彼が言う通り、上空からはゲッター線を糧として生きる異形宇宙生物、インベーターが多数襲来していた。

メカブーストの襲撃を運よく生き延びた生存者たちは、新たに襲来したインベーターによって虐殺されていく。

またも断末魔が周辺から聞こえてくる中、レンを抱えたシユンはゲッターカオスと鉄人28号がある場所へと辿り着いた。嘉承が迎える。

「その御仁、もしや」

「ああ、第二のゲッターのパイロットだよ、坊さんよ」

「ゲッターに選ばれた第二の者、貴方がお抱えになっているその者ですな」

出迎えた嘉承に対し、シユンはレンが第二のゲッターカオスのパイロットであると告げる。

「よし、乗せるぞ。直ぐに戦ってもらわなきゃならねえ」

「承知した。拙僧がクラッシュヤー号へ搭乗しよう」

それと同時にレンを強制的にクレイジー号に乗せると言えば、嘉承は承知してまだパイロットが見付からないクラッシュヤー号へと向かう。

シユンがレンを抱えてクレイジー号にまで来れば、ゲッターロボ専用のパイロットスーツを着た竜騎が姿を現し、抱えている男について問う。

「おい、また化け物が来るんだってな！ 来るから、なんかゲッターの中にあったこいつを着たぞ！ そんなで、あんたが抱えてる男は何もんだ？」

「お前と同じ不運な奴さ。三人目は見付からなかったが、代わりに坊さんが乗る。お前は速くサイコ号に乗れ」

「ゲッターに選ばれたとはいえ、そんな見ず知らずな野郎と一緒に戦えるかよ」

「良いから乗れ。ゲッターは三人乗らねえと本来の力が出ねえんだ。

俺がフオローする。お前は黙ってゲッターに乗って暴れろ」

「ちつ、俺が死んだらあんたの所為だかな！」

抱えているレンを同じ哀れな男と紹介すれば、竜騎は知らない奴と一緒に戦いたくないと文句を言う。これにシユンはゲッターロボは三人乗らないと本来のパワーが発揮できないと答え、竜騎をサイコ号に乗せた。

竜騎と嘉承がそれぞれのゲットマシンに乗り込む中、クレイジー号に乗せられた直後で気が付いたレンはいきなり座席に座らされていることに驚き、何をさせる気かと自分を無理やり乗せたシユンに問い

詰める。

「な、なんだこれは!? なぜ俺がマシンに乗っている!? 何をやらせる気だア!?!」

「良いから黙って、操縦桿を掴んでろ! お前はそれだけで良いんだよ!」

「何だと!? 今すぐ解放しろ! おい! 待てえ! 待ってくれえ!」

その問いにシユンは操縦桿だけ握っていれば良いと答え、レンを無理やりクレイジー号に乗せた。それからサイコ号に乗る竜騎とクラッシュ号に乗る嘉承に合図を出し、レン共々出撃させた。

クレイジー号は自動操縦で動いており、何が何だか分からないでいるレンは出撃した際に発生したGで悲鳴を上げる。

『にやアアア!?!』

「こいつ、大丈夫なのか? 坊さん、あんたは大丈夫か!?!」

『これしき! 修行を思い出せば、そよ風程度な物!』

「よし、合体だ! チェンジ、ゲッターア、カオス1ンン!!」

悲鳴を上げるレンに竜騎は不安を覚える中、嘉承に無事を問う。これに嘉承はこの多大なGをそよ風と表す。無事が分かれば竜騎は基本形態であるゲッターカオス1に三機のマシンを合体させ、イマガワで殺戮を始める新参者たるインベーターを攻撃し始める。

地上に居る陸戦型のインベーターの頭部に上からかかと落としを食らわせて粉碎した後、死体をチョップで切断して次のインベーターを攻撃する。

無理やり乗せられ、合体させられて戦うゲッターカオス1に乗るレンは更に混乱する。当然の反応だろう。

「何だこれは!?! あの生物は何なんだ!?! 降ろしてくれ! 頼むう!!」

『煩い野郎だ。叩き出すか?』

『拙僧は反対ですぞ。ゲッターロボとは三つ合わさってこそ、本来の力を発揮する物。それに乗る人も三つ揃わねば、目前の異形の怪物に容易く倒されてしまう』

『坊さんの言う通りに我慢しろ！ 今はインベーター共をぶち殺すのが先だ！』

騒ぐレンを鬱陶しく感じる竜騎は叩き出すかと問えば、嘉承は反対の声を上げる。これにシュンは我慢するように伝えれば、竜騎は苛立つて舌打ちしながらトマホークを出し、インベーターを殺し続け、初陣の一人の時はなぜ強かったのかと問う。

「ちっ、三人乗らなきや意味がねえのかよ！ 一人の時はどうしたんだ!？」

『ありやあ、メカブーストが弱かったただけだ。本来は三人乗ってこそ
のゲッターロボなんだよ!』

竜騎の初陣の時の問いに、シュンはあの時はメカブーストが弱かったからと答える。それに続いてか、嘉承は三つの心が合わされば、更にゲッターロボは強くなると説く。この間にもレンは恐怖で叫び続けていた。

『ああああ!? 出せ！ 出してくれええ!!』

「その剣客の言う通り、三つの心が合わされば、ゲッターロボは更なる力を発揮する。故に今のゲッターカオスは軟弱その物。この戦、勝てるかどうかは天の気紛れ次第」

『神様次第って所かよ！ 煩い奴に坊さんの説教、全く最高な状況だぜ！ ゲッタービームう!!』

余りのカオスな状況を、竜騎はゲッタービームを撃って地上型と飛行型のインベーターを一掃した。ゲッターカオス1は少しばかり動かなくなるが、そこをシュンの鉄人28号がフォローする。

『後ろに気を付けろ!』

「済まねえ！ どわっ!？」

シュンが注意すれば、竜騎はそれに感謝の言葉を返した、その瞬間、高速移動するインベーターの攻撃を受けてゲッターカオス1は吹き飛ばされる。

「なんだこいつは!？」

『なんだこの衝撃は!? 物凄く速い物体に攻撃されたぞ!』

『クソつたれ。なんでこんな速い奴が居るんだ!? ぬわっ!』

攻撃された竜騎は周囲を見渡す中、シユンは高速移動が出来るインベーダーの攻撃を受けたと答え、そのインベーダーからの攻撃を受けて乗っている鉄人28号が吹き飛ばされる。

直ぐに反撃に出る竜騎たちであるが、高速移動するインベーダーには敵わず、一方的に攻撃されるばかりだ。意地になって竜騎も滅多やたらにゲッタービームを乱射するが、シユンの鉄人28号を誤射し掛けるだけで何の意味もない。

「クソっ！ クソがア！ なんで当たらねえ!?!」

『止めるバカ！ そんなに撃つんじやねえ!』

『こうなれば二番の伝統、素早さの2になるしかあるまい!』

『ゲッターカオス2だと!』

状況が打破できぬと判断してか、嘉承は素早さの二番、即ちゲッターカオス2に変形するしか無いと断言した。これに竜騎とレンが驚きの声を上げる中、カオス1のパイロットたる少年は嫌がる。クレイジー号に乗るレンに、自分の命を預けられないのだ。

「あんなビビッて叫んでる奴に、俺の命を預けられるか！ 今すぐあのすばしっこい奴をぶっ殺してやる!!」

『駄々を捏ねなさるな！ 今は生き残り、勝利することが目標！ それが理解できぬと言うなら、ここで死になされ!』

「ちっ、分かったよ。おい、絶叫野郎、テメエの出番だ!」

嘉承の説教を受け、ゲッターカオス2のレンに委ねる他ないと判断した竜騎は合体を解いた。理解できぬレンは更に混乱する中、三つのゲットマシンに戻り、ゲッターカオス2の合体シークエンスに移る。

「また分離したぞ?! 何が起きているんだ!?!」

『テメエが一番だ！ 俺らは合わせるぜ!』

『承知！ 拙僧が中央に!』

レンのクレイジー号を先頭に、中央に嘉承が乗るクラッシャー号、最後は竜騎のサイコ号が続く。自動操縦に切り替わっているため、合体はすんなりいった。インベーダーからの攻撃はシユンの鉄人28号が防いでいるため、最初の時と同じように合体は成功した。

三つのゲットマシンが合体し、ゲッターカオスは新たな姿、ゲッ

ターカオス2に変貌する。右手は鋭利なクロー、左手は鋭いドリル、体系は高速で移動するために細い物であった。

当然、操縦の優先順位はクレイジー号に乗るレンに移る。突然、操縦が出来るようになったレンはまだ混乱していた。

「なんだ!? どうなっている!?!」

『腹を決めろ！ お前はゲッターカオス2のパイロットとなった！ 死にたくなければ、襲ってくる化け物をぶち殺せ！ 操縦マニュアルは、近くの箱にある！』

シユンに言われたレンは混乱していたが、再び高速移動型インベーターの攻撃を受け、慌てて操縦マニュアルを取り出して操縦方法を確認する。

こんな状況にも関わらず、レンは操縦マニュアルを秒で読み終え、操縦方法を一瞬にして理解してクローで高速型インベーターに反撃した。恐ろしい速さだ。

『こいつ!? なんだ覚えたんだ!?!』

「簡単すぎる、簡単すぎるぞお！ ハハハ、なんて簡単な操縦方法で圧倒的なパワーなんだ…！ フハハハ！ 死ねえ!!」

竜騎が驚く中、瞬間間に機体の特性とパワーを知ったレンは笑い声を上げながら高速型インベーターを圧倒し始める。

あれほど圧倒していた高速型インベーターは恐怖して逃げようとするが、ゲッターカオス2は高速戦闘の形態であり、一瞬に追いついてクローで捌り殺される。

「凄い、凄いぞこのマシンは！ もっと試さなくては！ 武器はこれかあ…！ ドリルハリケエエェン!!」

先の混乱ぶりは何処へやら。すっかりとゲッターロボの虜となったレンは左手のドリルを高速回転させ、周囲のインベーターを殺し始めた。ドリルの高速回転に巻き込まれたインベーターは一瞬にして粉碎され、奇声を発しながら暴れ回るレンに殺されていく。

「キエアアア!! 死ね！ 死ね！ 死ねえええ!!」

やがてドリルとゲッターカオス2が止まるころには、周囲のインベーターは一掃されていた。

「や、やべえ……！」

『なんて奴だ、こいつは……!?!』

『恐ろしい……！ まるで阿修羅よ……!?!』

レンとゲッターカオス2の組み合わせの恐ろしさに一同が驚く中、そのゲッターカオス2に乗る共産テロリストは何を考えてか、惑星に向かってドリルを突き刺そうと高速で突っ込み始める。

「次はこの惑星を破壊できるかどうかのテストだア！ 行けえええ!!」

『なんだと!?!』

『正気か!?!』

なんと、惑星イマガワを破壊しようと言うのだ。それを食い止めるべく、シユンは鉄人28号のブーストをフルにし、何とか喰らい付くことに成功する。

「なんだ貴様ア!?! 離せえ！ 俺はこの惑星を破壊できるかどうか試すのだア！」

『馬鹿が！ そこまでやれなんて言っていない!』

喰らい付いた鉄人28号を引き剥がそうと、暴れ回るレンであるが、シユンは彼を止めるために機体から降り、物の数秒でコクピットのハッチがある場所まで到達し、ハッチを高速移動の中で開く。どうやって開いたかは、無理やりこじ開けたのだ。

「こいつう……！ 俺の実験の邪魔をするなどオ……！ 死ねえ！」

「呑み込まれてんじゃ、ねえ！」

ハッチを開けて侵入して来たシユンに対し、レンは手刀を放って彼の目を潰そうとしたが、躲されて顔面を殴られ、更には腹に強烈な蹴りを入れ込まれて昏倒した。

操縦者を失ったゲッターカオス2はそのまま地面に落下していき、やがては地面に激突して地面に鉄人28号共々横たわる。シユンは外へと投げ出されたが、並の人間ではない為に無事であった。

こうして、ゲッターカオスに二番目の男、レン・クーが加わった。

次は第三のゲッター線に選ばれし最後の者である。三つの選ばれし者と力に心が揃う時、ゲッターカオスは完全な物となる……！

第三の男、マ・ドソク!

第二のゲッターカオスのパイロット、レン・クールの暴走あっても辛くもインベーター相手に勝利を収めた竜騎たち。

だが、次なる脅威が惑星イマガワに迫っていた。

その名はハート!

付近の惑星の政権より、イマガワの生き残りたちの抹殺を命じられたのだ。

「ブツヒツヒツ、お任せください。このハートに掛ければ、イマガワに居る死にぞこない共など、短時間で皆殺しにして差し上げましょう」
政権に命じられたハートは直ちに、多数の部下を引き連れてイマガワへと出撃した。

場所は過去に戻る。

誰の過去と言えば、ゲッター線に選ばれた第三の男、即ち最後の男たるマ・ドソクの過去!

彼もまた竜騎やレンと同じく、家族や仲間を始めとした全てを失い、惑星イマガワに収監された。

なぜ、このような経緯に至ったか、ここで語ろう。

「て、テメエ…… 何故、なぜ俺をやらずに、俺の家族を……!」

マ・ドソクが収監されたのは、乗り込んできた警官たちに確保された為、だが、彼の体格は大柄であり、特殊部隊でも拘束が難しい巨漢である。

更にドソクは拳一つで裏世界の頂点に立った武闘派のドン!

裏社会の誰もが恐れる男であった。だが、そんな彼にも弱点はある。

それはドソクが心から愛した妻とその妻の腹の中で生まれの時を待つ赤子、その二人が敵対するマフィアに殺意がされたのだ!

「へっへっ、あんたが殺したような物だぜ? マ・ドソク。テメエの嫁さんとまだ生まれてねえ赤ちゃんは、テメエの所為で死んだんだ!」

マ・ドソク! お前の存在を、お前自身で恨むんだな!

ドソクの家族を殺したのに対し、当の本人はお前の所為だと恐ろしい形相で睨み付ける彼に告げる。

自分を殺さず、その家族を殺した目前の拳銃を持つ男にドソクは殺意と憎しみを抱き、正気を失い掛けていた。そんなドソクを更に怒らせるべく、煽り立てる。

彼が怒り心頭で突っ込んでくるのを待っているのだ。その為に数名の手下は拳銃や短機関銃を持っており、ドソクが怒って突っ込んでくるのを待っている。手にしている銃で射殺するために。

「大体、テメエ見てな生まれながらのクズが妻子を設けること事態が大間違いなんだ。こんな奴に惚れて、その餓鬼を身籠る女も同類よ！クズ同士お似合いのカップルだな！でも、運が良いな、この女も。なんとって、そのクズの餓鬼を生む前に死ねたんだからな！感謝しろよな!!」

怒りの余り正気を保てないように殺害したドソクの妻の死体を蹴れば、彼はもう我慢の限界であった。

「この俺を、この俺を何とでも罵倒するのは良い…！だが、ミョンジユを…！俺を唯一愛してくれたミョンジユを侮辱することは許さん!!」

自分はなんとも罵倒したり、侮辱するのは良い。

だが、妻を侮辱することは許されない。既に我慢の限界に達したドソクは、怒りに身を任せて雄叫びを上げながら銃を構える男たちに突っ込んだ。

「ぬおおお!!」

「はっ！遂に怒ったぜ！よし、蜂の巣にしろお！」

突っ込んでくるドソクに対し、男たちは銃を撃ち始める。

通常なら一瞬にして蜂の巣にされる大柄のドソクであるが、不気味なこと一発も当たらなかった。これだけの人数に撃たれて倒れないドソクを見て、銃を撃つ男たちは驚愕する。

「やった！」

「ぬあああ!!」

「嘘だろ!? なんで倒れない!?!」

少し近い距離になったところで当たるとは当たったが、ドソクは倒れることなく突っ込んでくる。顔は痛みを感じているが、痛覚よりも怒りの方が増しているのか、全力疾走で短機関銃を再装填中の男に近付き、怒りがこもる右手の大きな拳を顔面に向けて放った。

「ぶげっ!？」

その怒りがこもった右拳によるパンチは、殴られた男の顔面が変わるほどの威力であった。

近付いたドソクに対し、慌てて撃とうとする男たちであるが、既に拳の間合いに入られており、銃を撃つよりも前に彼の鉄拳を食らって吹き飛ばされるか、首の骨を折れる。

数名ほどの男たちは、ドソクの怒りの特攻で僅か二名ほどになっていた。

「ぎゃあああ?！」

「はあああ!!！」

余りの恐怖に逃げようとした男はドソクに捕まり、先に逃げた妻子を殺した男に向けて投げ付けられる。首から男の背中当たったために、投げられた男はその衝撃で首が折れて即死した。

硬いコンクリートの上に倒れた妻子を殺した男は直ぐに起き上がり、右手に握る拳銃でドソクを殺そうとしたが、既に彼は目と鼻の先に居た。引き金を引く前に拳銃を握る右手を蹴られ、ドソクに首を掴まれて持ち上げられる。

「くえ……か、かあ……！」

「ぬう……！」

首を掴まれた男の足はコンクリートより離れ、物理の影響もあつて首を絞める力が強まる。ドソクは片腕だけで男の首を掴んで持ち上げており、自分の妻子を殺した男を睨みつけながら首を絞める力を徐々に強めていた。

手で首を掴む右手を引っ掻いたり、浮いた両足で何度も蹴って抵抗する男であるが、ドソクはびくともしない。そればかりか力を強めて絞め殺そうとしてくる。その握力は、首を絞められている男の両目が飛び出しそうなくらいだ。

「か、かあ……くっ……！」

最後まで抵抗する男であったが、遂にドソクに絞殺された。右手の握力で首の骨が粉碎されたのだ。

絞め殺した男を投げ捨てた後、ドソクは吐血してから仰向けになってコンクリートの上に倒れる。怒りで活性化し、何発も撃たれても平気だったドソクの巨体であったが、怒りを晴らされた後、急激に力を失って倒れたのだ。

「今、行くぞ……！」

倒れた後、薄れゆく意識の中で既に逝った妻子の後へ続こうとしたドソクであったが、彼を選んだゲッター線がそれを許さなかった。

気が付いたドソクの最初の視線に入ったのは、惑星イマガワの独房であった。ドソクはゲッター線に導かれ、イマガワに収監されたのだ。

「クソっ……！　なんで死ねないんだ?！」

何度も自殺や脱走を行い、その度に瀕死の重傷を負うドソクであるが、ゲッター線は彼を決して死なせなかった。

ドソクが何度も死のうとしても、ゲッター線は死なせようとしないう。ドソクに取ってこのイマガワでの収容生活は生き地獄であったが、諦めの悪い彼は何度も死のうとした。

それは数年以上も続き、最初の掃除とメカブーストの襲撃の時さえ、周りを犠牲にしてドソクだけが生き残り、インベーターの襲撃ですら生き延びてしまった。

そして、今に至る……。

「大丈夫か!?　小僧!」

インベーターの襲撃を奇跡と言うか、ゲッターの意思で生き延びたドソクは数少ない生存者の若い囚人を発見し、自慢の腕力で瓦礫を退かして彼を救う。

生きてるかどうか確認すべく、助け出した囚人の頬を叩いて反応を見た。頬を叩かれた囚人は気が付き、ドソクの顔を見て驚きの声を上げる。

「うわっ!？」

「生きてるな! よし、とにかく安全な場所に行くぞ。他にも生存者が居るはずだ。お前も手伝え!」

驚く青年の囚人に碌な説明もせず、ドソクは他にも生き残りが居るはずだと言つて共に探すように命じた。それに応じ、青年の囚人は殴られると思つて生存者を探す。ドソクの見た目で、従わなければ殴りつける様な男と判断したのだ。

「見付かりました。全部で十三人です」

「よし、お前ら! これからは俺に従ってもらおう! 俺はマ・ドソクだ。生き残りたいければ、俺の指示に従え! 従わねえ奴は何処へでも行け! 分かったな!？」

数時間ほどで十三名の生存者を発見すれば、ドソクは彼らに従うかどうかを問う。

この荒れ果てた収容所で個別に動けば生き残れる確率は低いので、生き残りは徒党を組めば生き残れると思ひ、ドソクに従った。

「全員一致だな? よし、まずは安全な場所を探す。そこから食料に水、医療品を確保だ。行くぞ!」

全員が首を縦に振つたのを確認したドソクは、彼らに従えて安全地帯を目指した。

「クソっ、いてえぜ!」

二番目のゲッターのパイロット、レンの暴走につき合わされた竜騎は首を抑えながら目を覚ました。

彼らの居る場所は惑星イマガワでは一番安全な場所と言え、そこに生き残りが集まり、シユンの指示の下にバラックを拵え、三機のゲットマシンや鉄人28号を集めた道具で整備していた。嘉承は座禅を組んで雑念を消し、無の状態を取っている。

同じく目を覚ましたレンは少し寝て冷静になったのか、自分のマシンであるクレイジー号のシートに座り、これから自分の物であるマシンの長所と短所を調べていた。

各々が生き残るための準備をする中、人だかりを見付けたドソク一

行がそこへ姿を現した。ドソクが三番目の男と見抜いた嘉承は目を覚まし、彼の姿を見て口を開く。

「おや、どうやら探す手間が省けたようだ」

「おい、このリーダーは誰だ？ 何をしているか分からねえが、ここに居させて欲しい。手伝いもするぜ」

使えそうな物を探し回る生存者に問うドソクを見た嘉承は座禅を解き、立ち上がって茶を飲んでいいるシュンに第三の男が来たと報告する。

「来ましたぞ、第三の男」

「なに？ 速過ぎるな。あのデカイおっさんがそうか。ここの生き残り共を従わせるのに苦労してた所だ。助かったぜ」

この報告を聞いたシュンは立ち上がり、早速ドソクをゲッターに乗せるべく、彼の元へと向かった。

「何の用だ？」

「ゲッター線についてだ。あれは夢のようなエネルギーであるが、実際は悪魔のようなエネルギーだ。そのゲッターに選ばれた我々をどうする気だ？」

途中、ゲッターを調べ尽くしたレンがシュンの目前に姿を現し、これからゲッターに選ばれた自分たちはどうなるのかと問い詰める。

「どうするって、お前らは選ばれちゃったんだ。もう後には引けないぜ」

「後には引けない。俺を同意なしに乗せたお前の言えることか。もつとも、俺にはもう何も残ってなどいないが…」

「お前も何もない口か。次の三人目も似たような物だ」

「フン、ゲッター線が救いの手を差し伸べたと言うのか。ならば、とことんつき合おう」

これに選ばれたのだから仕方ないとシュンが答えれば、レンは眉をひそめて睨み付けた。だが、レンもまた何も残っていない人間であるため、ゲッター線にとことんつき合うと告げる。

それが終わったところで、三人目であるドソクの元へ向かおうとした瞬間、居住区としていいる区画が空からの攻撃を受けた。

「っ!？」

「畜生、もう来やがったのか!」

爆発音が響く中、シユンはもう敵が来たと思ってドソクの元へ急いだ。レンは直ぐに自分のゲットマシンであるクレイジー号まで急ぐ。

『ハート様、数十人は殺しましたぜ!』

「数十人ですか。では、二射目を行ってもっと殺して差し上げましょう」

拠点を襲撃したのは、ハート率いる掃討部隊であった。MSである多数のブツシを率いて攻撃を行っているのが、ハートが乗るスーパーロボット、ミスターハートだ。頭部の目から光線を放ち、生存者たちを虐殺している。

数百人を殺害したところで、ミスターハートに乗るハートは虐殺を止めてホログラム映像を使って挨拶を行う。

『ブツヒヒヒ、生存者の皆さん。こんにちは。わたくし、ハートと言う者でございます』

ホログラムに映る脂肪の塊である巨漢ハートが紳士的に挨拶を行った後、攻撃した理由をまだ生きている生存者たちに説明する。

『皆様を攻撃したのは、わたくしのスポンサー様からのご命令ですね。残念ながらあなた方には生存権はありません。大人しくわたしたちに殺されてくださいませ。暴れなければ、楽に死ねますよ。オツホホホ!』

事実上、死ねと言わんばかりの宣言であった。

これに生き延びた囚人や看守たちは怒りで手製の火器で抵抗するが、ミスターハートと多数のブツシに敵うはずが無く、惨たらしく虐殺されていく。

『ぎにゃあおあ!!』

「クソっ! また虐殺だ! なんて俺たちは殺されなくちやならねえんだ!!」

三度目の虐殺にドソクが怒りの叫びを上げる中、彼がゲッター線に選ばれし三人目と分かっているシユンは近付き、安全な場所があると

言って騙して連れて行くこうとする。

「おう、あんた！ こっちが安全だ！ 速く来い！」

「なに？ 安全な場所だあ？ みんな、ついてこい！」

これにドソクに同行していた者たちがついて来てしまったが、取り敢えずクラツシャー号に乗せればそれで良いのでシユンは彼らを連れて行く。

「ん、なんだここは？ 変な乗り物しか無いぞ！」

「ああ、あんたはこの中だ」

「この者たちは拙僧に任せられよ！」

「なに？ よし、頼んだぞ！」

クラツシャー号に辿り着いた頃には、サイコ号とクレイジー号には竜騎とレンが既に乗り込んでいた。ようやくパイロットが揃ったので、シユンがドソクをクラツシャー号へ誘導する中、嘉承は彼が連れて来た生存者たちを安全な場所へ案内する。

「一体、俺になにを…？」

「ここに入るんだよ！」

「ぐわっ!! 何をする!! 開けろお！」

キャノピーが開いたクラツシャー号にドソクを誘導したシユンは、コクピットの近くに来たところで無理やり彼をコクピットの中に突き飛ばし、キャノピーを締めて無理やり乗せた。

ドソクがキャノピーを叩いて出せと叫ぶ中、シユンはサイコ号とクレイジー号に合図を出して出撃させた。ドソクを閉じ込めたクラツシャー号も残る二機のゲットマシンに続いて出撃させていく。

「ヒヤッハー！ 死ねえ!!」

「よし、行った。こっちも、忙しくなりそうだ！」

三人が揃った三機のゲットマシンが飛び立つ中、シユンはバイクに跨って殺しに来たモヒカンの集団に対し、得物の大剣を素早く抜き、先頭の集団を纏めて切り裂いた。

『なます!!』

「な、なんだこのデカイ剣の野郎は?」

「刺身になってえ奴からかかってこい！」

「野郎、ふざけやがって！ 困んで嬲り殺せえ！」

四台のバイクに跨ったモヒカン四名が断末魔を上げる中、シユンは残りのバイク集団に挑発を行い、戦闘を開始する。

『ぬあああ!?! なんだ一体!?! 降ろせエ!!』

「レン、最初のお前みてえだな！」

『煩いぞ。とにかく、今は合体を優先だ。汎用の1で行くぞ』

騙されて乗せられた挙句、強烈なGに身体を引き裂かれそうなドソクが悲鳴を上げていた。

それを見ていた竜騎はレンに向けて最初のお前のような煽つたが、冷静沈着となった彼は安い煽りに乗らず、合体しろと指図する。

「ちっ、指図しやがって。なら、一番手は俺よ！ チェンジゲッター、カオス1！」

『うわあああ!!』

レンに指図されたことに苛立ちつつも、竜騎は三機のゲットマシンはゲッターカオス1に合体した。その間にドソクが叫んでいたが、クラッシャー号は自動操縦なので勝手に合体している。

ゲッターカオス1になった後、目前に居る多数のブツシを殴り潰しながらハートが乗るミスターハートに突っ込む。

『いべっ!』

「ブタ野郎！ この俺が丸焼きにしてやるぜ!!」

『人をブタ呼ばわりするとは躰のなっていない少年ですね。良いでしょう、このわたくしが貴方を躰けて差し上げましょう!』

邪魔なブツシをあらかた片付けた後、竜騎は拡声器を使ってハートを丸焼きにしてやると宣言した。この餓鬼の挑発に対し、ハートは乗らずに紳士的な口調で返して光線をゲッターカオス1に向けて発射する。

「へっ！ そんなへぼ光線に当たるかよ！」

『すばしっこい餓鬼ですね。ならば接近戦で躰けましょう』

「はっ、タイマンでやんのか？ てめえを丸焼きにすると言っただろ！ 焼きブタになれ！ ゲッタービーム!!」

光線を軽やかに躲す竜騎は、接近戦を仕掛けて来るミスターハート

に向けてゲッタービームを放った。

人の作り上げた物なら破壊可能なはずだが、ハートが駆るミスターハートには通じなかった。ミスターハートの装甲は宇宙の鉱物を使用した特殊合金で出来ており、ゲッター線のビームが通じないのだ。「な、何ッ!?!」

『ブッヒヒヒ。このミスターハートの装甲は特殊合金を使用しておりましてね、それも宇宙ではとても希少な物らしいですよ。よって、貴方のマシンのビーム砲はこのミスターハートには通用しません』
「クソっ、だったらぶった切つてやるぜ! ゲッターマホーク!!」
『ホッホッホッ、無駄なことを!』

ミスターハートにはゲッタービームが効かないとハートが言えば、竜騎は苛立つてゲッターマホークを取り出し、斬りかかったがゲッター線の刃ですら通じなかった。

「なんだとッ!?!」

『言ったでしょ。効かないと! ほれっ!』

刃ですら効かないことに驚愕する竜騎のゲッターカオス1に対し、ハートのミスターハートは叩きを行う。その叩きは恐ろしく、ゲッターカオス1を吹き飛ばす程であった。

「畜生が! 今度は…!」

『落ち着け! 特殊合金ならばカオス2のドリルが有効かもしれない! カオス2にチェンジしろ!』

「ああ!? てめえ、暴走するんじゃないやねえだろうな!?!」

『いがみ合っている場合か! あの時は機体に吞まれ過ぎた! 今の俺は冷静だ!』

無駄な反撃を行おうとする竜騎を止めるべく、レンは重装甲に有効なカオス2に変形するように指示を出した。これに竜騎が反発し、暴走するのかと問えば、レンは今度は暴走しないと約束して説得する。「ちっ! あのドリルはすげえからな! オープンゲット!」

『分かってくれて感謝する!』

『うわあ!?! 分裂したぞ!?!』

カオス2のドリルを思い出した竜騎は説得に応じ、合体を解いた。

これにレンが感謝の言葉を述べ、状況を理解出来てないドソクは叫ぶ。

「ゲッター、カオス2!」

三機のゲットマシンに別れたゲッターカオスは、カオス2の体系を取って合体する。その様子をハートはただ眺めており、姿形を自由自在に変えるゲッターロボに拍手を送る。

『なんとも面白いロボットではありませんか! 先ほどから一変して細くなりましたね。パワーダウンしたんじゃないやありませんか?』

「重装甲なら徹甲弾になれば良い! ドリルミサイル!!」

ゲッターカオス2になってパワーダウンしたんじゃないかと問うハートに対し、優先操縦者となったレンは重装甲ならば徹甲弾を使えば良いと答え、左腕のドリルをミスターハートに向かって放った。

凄まじい勢いで発射されたドリルは真つ直ぐと、高速でミスターハートの腹に飛んでいく。やがて命中したが、ミスターハートの装甲は丸みがあり、更に当たった個所は傾斜であった為に弾かれてしまった。軍事的に言えば、戦車の傾斜型の前面装甲で徹甲弾が弾かれたのだ。

「何っ!?!」

『おやおや、どんな物が飛んできるかと思ったら、ただの豆鉄砲ですか。戦車の傾斜装甲をご存じで? 第二次世界大戦でソ連軍の殆どの戦車がこの装甲でしてね、ドイツ軍の戦車の主砲を良く弾いたそうですよ。今の戦車砲では全くの無意味ですが、巨大なロボットでは有効のようですね! ブツヒヒヒ!』

強烈なドリルミサイルですら弾く傾斜装甲を持つミスターハートに乗るハートは、驚愕するレンに向けて大戦時のソ連戦車のうんちくと巨大ロボットの傾斜装甲の有効性を語る。

「ならば、ドリルハリケーンで!」

『そんな隙を与えようと思っただけですか? ブツヒヒヒ!』

「ぐわああ!!」

直ぐにドリルを左腕に戻し、ドリルハリケーンで反撃を試みようとしたが、ミスターハートは凶体に似合わない速度で既にゲッターカオ

ス2の至近距離まで迫っており、巨大な腕で細身のゲッターロボを叩いた。

高速戦闘を重視したゲッターカオス2にはその叩きは致命傷であり、一気に吹き飛んで付近の建造物の残骸にぶつかる。

『おやおや、何ともまあ呆気ないものですね！ では、そろそろと決着を付けましょう！』

そろそろ飽きたのか、ハートは動けずにいるゲッターカオス2に近付いてとどめを刺そうとした。

『おい、俺に代われ！ どうやるんだ？ どのボタンを押しても反応せんぞー！』

もうここまでかと思っていた竜騎とレンであったが、あれだけ吹き飛ばされても気絶していないドソクが急に操縦を代われと言出し始めた。向かってくるハートのミスターハートに、カオス1でもカオス2でも敵わないことを知るレンは止めろとドソクに返す。

『何を言っている!? このマシンでは奴には敵わないんだぞ！ 例えまだ試していないカオス3でも勝てる保証が無いんだ！』

『そうだぜ、おっさん！ あんた、マシンに乗って一時間も経っても居ねえし、操縦も分からねえんだろ？ ぶつ殺されに行くようなもんだぜ！』

「揃いも揃って、出来やしねえとほぎきやがって！ まだその3を試してねえんだろ！ お前らはここで諦める口か!？」

例えカオス3に変形しても勝てる見込みが無いと言う竜騎とレンに対し、ドソクはやらない内に諦めるのかと論ず。

あのミスターハートにパワーのカオス3で挑むのは愚の骨頂と思われるていたが、試さない内にみすみす殺されるのはレンの性に合わない。ここはあのドソクに任せてみてはどうだろうかとレンは思い始める。

竜騎が向かってくるミスターハートを睨み付ける中、レンは合体を解いてドソクに委ねた。

「こうなれば賭けだ！ オープンゲット！」

『おい！』

「大博打だ！ あの男がしくじれば、俺たちは死ぬ！」

『そんな無茶な！』

『その大博打、必ず勝つ！ 俺を信じろ！』

博打に出たレンはドソクの実力を不安視する竜騎に、彼がしくじれば死ぬと告げる。これにドソクはその博打は必ず勝つと答え、先頭を飛んで合体の隊形を取った。

『おや、まだネタがあるのですか？ まあ、見て差し上げましょう』

第三の合体にハートは少しは楽しめそうだと思い、その合体の様子を手を出さずに眺めていた。

ハートが見守る中、ドソクが乗るクラッシャー号は先頭を飛び、中央にレンのクレイジー号、最後尾に竜騎のサイコ号が合わさったのと同時に合体を行う。ドソクは説明書を少し読んだ程度であるが、合体はコンピューターが行ってくれた。

クラッシャー号を先頭とした合体で、ゲッターカオスはパワーと水中戦に特化した形態であるカオス3に変貌する。

他のゲッターカオスの形態と比べ、カオス3は大柄であった。まさにドソクに相応しい形態と言えよう。その形態を見たハートは驚きの声を上げる。

『ほほう、これは驚きです。あんな細身が、合体して今度は大柄になるとは…！ 不思議な三体合体ロボですね。汎用とスピードで敵わないとみると、今度はパワーですか。良いでしょう、力比べと参りましょう』

ゲッターカオス3を見て直ぐにパワータイプと見抜いたハートは、自身が駆るミスターハートと力比べをするべく、ゲッターカオス3に接近する。

「力比べか。俺とお前、どっちが上か勝負だ！」

近付いて来るミスターハートに対し、ドソクは操縦桿を強く握って力比べを行うべく接近した。

かくして、第三の形態ゲッターカオス3のドソク対ミスターハートを駆るハートとの力比べの戦いが始まった。

一番槍の男とサイボーグ若頭！

「行くぞ！」

『ブツヒヒヒ！ 叩き潰して上げましょう！』

ゲッターカオス3のドソクとミスターハートのハートによる力比べの戦いが始まった！

互いの両手が合わさり、取っ組み合いの押し合いが始まる。全高や全長はミスターハートの方が勝っており、大きさにおいてゲッターカオス3の不利だと思われていたが、ゲッター線を有するゲッターカオス3とドソクのパワーは底知れず、一気に押し返した。

「うおー、なんだこのパワーは!? パワーではミスターハートの方が勝っているはず!？」

体格の低いはずのゲッターカオス3に押し返されたハートは驚きの声を上げ、押される立場となる。

ハートも負けじと押し潰そうと操縦桿を前に押し出す。ゲッターの恩恵を受けたスーパーロボットの力の前では押される一方だ。

そんな力尽くでミスターハートを押すドソクに、自分の担当するカオス2と同様にカオス3の武装を短期間で熟知したレンは、ゲッターミサイルを使うように指示を出す。

『ゲッターミサイルを使うんだ!』

「ん、何処にあるんだそれは?」

『あんたが握っているレバーがあるだろ。そこが蓋になっている』
「おっ、これか」

レンの誘導に従い、ドソクは握っている操縦桿の蓋を開け、そこにあるスイッチを親指で押した。すると、機体の背部よりミサイルが発射され、ミスターハートのコクピットがある個所に命中する。

『ぶひっ!』

『おお、当たったぞ!』

『やったか!』

「ミサイルが出たぞ!」

個所に当たったことで、ハートをミサイルで殺せたと思っていた一

同であるが、ミスターハートはまだ健在であった。

「ぬう、押し合いでミサイルを使うなんて卑劣な……！　ん？　こ、これは俺の血……？」

多数のミサイルが命中した所為で計器が衝撃で爆発し、その小さい破片がハートの身体に突き刺さっていた。彼の体格の所為で大事には至らず、少し出血した程度であったが、それ自体がハートにとって大事であった。

「血……俺の血……？　いてえよ……！！」

自分の血を見たハートは豹変し、我を忘れて操縦桿を動かして目前のゲッターカオス3に向けて強烈な叩きを行う。その叩きの速さは凄まじく、ドソクが駆るゲッターカオス3は躲し切れずに当たってしまった。

「ぐっ！　なんだこの威力は?!　さつきより桁違いだ！」

『いてえよオーツ!!』

ミスターハートはハートの怒りの力でパワーアップするようだ。更にミスターハートはゲッターカオス3に打撃のラッシュを行い、破壊しようとする。

そんな中、ミスターハートのラッシュの最中にゲッターカオス3は胸部に大きな拳でパンチを見舞った。無論、全く効いておらず、衝撃を感じたハートは無駄だと拡声器で告げる。

『無駄だ！　このミスターハートにそんな軟なパンチは効かん!』

「ブタ野郎が……！　ゲッターパンチラッシュ!!」

無駄だと言うハートに対し、ドソクは胸部に向けて拳のラッシュを行う。そのラッシュは恐ろしく速く、それを受けるミスターハートの胸部が徐々にへこみ始めていた。

『そ、装甲が!?!』

「ぬあああ!!」

ドソクの叫びと共にミスターハートの装甲は徐々にへこんでいき、やがて貫通されてしまう。それに慌てたハートは逃げようとするが、ドソクが逃がすはずが無く、逃げるミスターハートを抱き抱えて上空へ一気に飛ぶ。

『のわあああ!?』

「うおおお！ グレートアバランチ!!」

上空数百メートルを高速で飛翔した後、そのまま抱き抱えたミスターハートと共に地面へと落下していく。

「うわあああ!?」

『グアアア!!』

その落下速度は、共に乗っている竜騎とレンは強烈なGを受けて叫び声を上げる。

そんな彼らを他所にドソクはミスターハートを地面に叩き付け、着地体制を取って地面に着地する。拘束で地面に叩き付けられたミスターハートは当然ながら潰れ、乗っていたハートは潰れる機体に巻き込まれて断末魔を上げて絶命した。

「ひでつぼううう!!」

ハートが断末魔を叫び終える頃には、ミスターハートは地面に叩き付けられた衝撃で大破していた。大爆発が巻き起こる中、その爆発を背にゲッターカオス3は蒸気を排出した。

「は、ハート様がやられたあ！ に、逃げろお!!」

ドソクのゲッターカオス3によりミスターハートに乗るハートがやられたことで、部下たちは退却を始める。

『あんた、すげえな！ 本当に若葉マーク付きか!?』

「まあ、そんなところだ。大将がやられて、子分共が逃げてるが、どうすりゃいい?」

全く説明書を読んでいないにも関わらず、勘だけで勝利したドソクに竜騎が歓喜する中、逃げるハートの部下たちはどうするのかと彼は問い詰める。

『追撃の必要はない。あの巨漢のロボットの戦闘で相当ダメージを受けている。まあ、我々の勝利と言う事だ』

「勝利ね。勝った気がしねえぜ」

『また来たら、ぶっ飛ばせばいいだけの事よ!』

「フン、餓鬼は単純だぜ」

その問いにレンは追撃の必要性が無いと答え、彼の言うことにドソ

クは納得した。だが、ドソクには勝利の実感が湧かない。それを口にしたところ、竜騎はまた来れば倒せば良いと告げた。

これをドソクは鼻で笑いながらも、今はこの勝利の余韻に浸っているように思って心を穏やかにした。

それか十分前、竜騎、レン、ドソクの三名がゲッターカオスでミスターハートを駆るハートと死闘を繰り広げている頃、異世界よりやって来た男がハート軍団のモヒカンたちを攻撃していた！

「甘寧 《かんねい》 一番乗り！」

いきなり現れ、甘寧と名乗った男は、鎖で繋いだ超合金Zで出来た二つの球で嵐を引き起こし、周辺のモヒカンたちを嵐の渦へ巻きこみ、吹き飛ばしていた。

「てめえ、何者だア!？」

「俺は一番槍の甘寧！ お前たちを殺しに来た男だ！」

「野郎！ ぶっ殺せえ!!」

モヒカンたちに名を問われた甘寧は殺しに来たと返し、怒って手にしている凶器で殺しに来るモヒカンたちに応戦する。

「鉄風拳！」

「もベツ！」

「ちばっ！」

「ウインヴルガ！」

技名を叫んだ後、甘寧は嵐に入り込み、空を自在に飛びながら嵐を纏った球でモヒカンたちを皆殺しにした。

『クソっ！ なんだあいつは!?!』

そこらに居た仲間を殺され、怒りに燃えるブツシに乗るモヒカンは機体が手にするランチャーで甘寧を殺そうとしたが、BF団より奪ったギルバートを改造したバイオンBBBトリプルビーの怪光線を受けて撃破される。

『うおおお!?! なんだこいつは!?!』

このロボットの登場に、ブツシに乗るモヒカンたちは驚きを隠せない。

ジェット装置の高速で自分の元に来たバイオンBBBに甘寧は嵐を使つて飛び乗り、鉄風拳を利用した技を行う。

『ルストハリケーンI!!』

『ギネバアア!!』

それはマジンガーZのルストハリケーンであつた。本来ギルバートはそんな技を持つていない。だが、甘寧の鉄風拳と強化改造で本家に勝るとは劣らない威力を有しているのだ。ルストハリケーンIに呑まれたブツシたちはバラバラに碎け散り、乗っていたモヒカンたちは断末魔を上げて機体と共に碎け散る。

「も、MSが紙くずみてえに吹き飛んちまつたぞ！」

「一体何が起きてんだあ!？」

甘寧とバイオンBBBの圧倒的強さに、地上のモヒカンたちは驚愕する。

だが、甘寧だけでない。この惑星イマガワにも恐るべき男が居た。直ぐに甘寧とバイオンBBBに驚いているモヒカンたちに魔の手が迫る！

「くイイイ！ 死ねい！」

『お、お茶アア!!』

「うおおお！ なんだこいつは!?!」

一瞬にして二人のモヒカンの首が飛んだ。その首を撥ねたのは、何の武器を持たない蛍光イエローのスパンコールスーツを着こなすサイボーグの男であつた。蹴りで二人のモヒカンの首を撥ねたのだ。

その姿を見て驚くモヒカンたちに対し、サイボーグ男はサイバネ拳法と呼ばれる摩訶不思議な拳法、エレクトニック寸勁すんけいで次々と殺害していく。一人、二人、三人、目にも止まらぬ速さで次々とモヒカンたちは血の海へと沈んでいく。

この男の名は電龍でんろん・フルアームズ・ステインガー。宇宙を股にかけるコスミック・チャイニーズ・マフィア「シユヴァルツシルト黄巾賊」の若頭である！

敵対組織の組長の首を自慢のエレクトニック寸勁で吹き飛ばし、囚人惑星イマガワに収監された。だが、掃除の際に脱獄。心酔している

組長の元へ帰ろうと宇宙船を探すが、探している間に何度も襲撃を受け、今のモヒカンたちへの襲撃に至る。電脳麻薬「木星阿片」を好む。

「う、宇宙船は、何処だッ!? 何処にあるウ!?!」

「あ、あつちに…あ、ありますべっ!」

心酔する組長の元へ帰るべく、生き残ったモヒカンに宇宙船を居場所が分かれば、電龍はそのモヒカンの首を圧し折ってそこへ向かった。

無論、甘寧や電流だけではない。この囚人惑星イマガワに数々の強者が揃いつつあった…!

マジンガーと覆面ガンダムファイター

政権より送られた刺客、ハートとその軍団を退けたゲッターチームとシユンたちであったが、政権は新たな刺客、それも惑星を吹き飛ばす程の艦隊を送り込んでいた。

「ハートの奴め、失敗しおったな。だが、イマガワを焼け野原にすれば良いことよ！」

政権の首相は惑星イマガワへ向けて発進する宇宙艦隊を見て、今度こそ成功すると思っていたが、その企みは機械の魔人によって阻止される！

「前方に超強力な反応！」

「な、なんだあいつは!？」

艦隊が政権がある惑星「オワコン」より発進して二時間後、艦隊の前に機械の魔人が姿を現した。その名はマジンガーZ！

全高24メートル、体重二十トン、出力五十万馬力、否、最大九十五万馬力！ 黒鉄の城の異名を持ち、全身に武器を内蔵している。装甲は超合金Zである！

宇宙で戦う為、背中には左右にスラスタが付いた宇宙用ジェットパック、両足にもスラスタ付きパックと言った空間用装備をしていた。

「ええい、なんだあのロボットは!？ 主砲で吹き飛ばしてしまえ！」

そんな城のようなスーパーロボットの前では、オワコンの宇宙艦隊など物の数ではない。艦隊は戦艦の主砲で発射するが、超合金Zには通じなかった！

「こ、効果なし！ 目標、健在であります！」

「ば、バカな!？ 現役の戦艦を吹き飛ばす主砲だぞ！ なぜ効かんだ!？」

「艦載機を発進させろ！ 接近戦で叩くのだ！」

副官からの報告に提督は驚きの声を上げる。そんな提督に代わり、艦載機部隊の指揮官は艦隊防空を担う艦載機を搭載している空母に命令を出す。

その指示に応じ、マジンガーZサイズの艦載機ロボットが多数空母より発艦し、艦隊に立ち塞がるマジンガーZに向けて突撃する。

「相手は一機だ！ 包囲して叩けえ！」

指揮官機の指令により、艦載機ロボット軍団はマジンガーZを包囲して手に持っているマシンガンでハチの巣にしようとするが、全くの効果なし！

包囲されたところで、マジンガーZは突風の武器であるルストハリケーンを行う。

『ルストハリケーン！』

「な、なにっ!? ぬわああ!!」

一番槍の甘寧が乗るバイオンBBBのルストハリケーンIの本家たるルストハリケーンの威力は凄まじく、一瞬にしてマジンガーZを包囲していた艦載機ロボットを一掃した。爆発の連鎖が巻き起こる中、マジンガーZはお馴染みと言うべきロケットパンチを行う。

「ロケットパンチ！」

操縦者が叫んでから放たれた右手はやすやすと艦載機ロボの装甲を貫き、一機のみならず、二機や三機、最終的には五機の艦載機ロボを貫いてマジンガーZに戻っていく。

「畜生、好き勝手しやがって！ 全方向から襲い掛かれえ！」

『光子カビーム！』

また友軍機を次々と撃破されたことに怒り、艦載機ロボ集団はマジンガーZを再び包囲するが、マジンガーZの両目より光線が放たれて隊長機が撃破された。マジンガーZの両目から放たれる光子カビームだ！

「鬱陶しいくらいに居るな！ なら、ブレストファイヤー!!」

まだまだ艦載機ロボは居るので、きりがないと判断した操縦者はマジンガーZの胸の二つある胸の放熱板、ブレストファイヤーを放つた。三万度の高熱が多数の艦載機ロボの集団に放たれ、その熱に当てられた艦載機ロボの集団は溶解していく。全機がブレストファイヤーの射程内に入っており、瞬く間に艦隊の艦載機ロボは全滅した。

「第一陣艦載機ロボ隊…全滅です！」

「な、なんだと…!!」

通信手からの報告に、提督は椅子から転げ落ちた。

颯爽と現れ、艦隊の一斉射撃を物ともせず、挙句に第一陣の艦載機を全滅させたマジンガーZは、そのまま艦隊を全滅するべく接近する。

「敵機、当艦隊に接近！」

「撃てー！ 撃ち落とすんだア！ たかが一機に艦隊が全滅させられるなど、笑い話にもならん!!」

向かってくる機械の魔人に、提督は迎撃を命じた。雨あられと対空砲やミサイル、艦砲などがマジンガーZに向けて放たれるが、全く効きもしない。

無駄に抵抗する艦隊に対し、マジンガーZに乗る操縦者は艦隊を一気に殲滅する為、なんと機体その物を巨大な手に変形させた。

「ビックバンロケットパンチ!!」

巨大な手に変形したマジンガーZはそのままロケットパンチとなつて艦隊へと突き進む。迫りくる巨大なロケットパンチに艦艇は次々と轟沈して行き、やがては旗艦に迫る。

「うわあああ!!」

「助けてくれえ！」

「ああああ!!」

「ぎにやあああ?!」

迫る巨大なロケットパンチに艦橋内は恐慌状態となり、乗員たちは我先へと階級に関わらず艦橋から出ようとしていたが、ロケットパンチに押し潰されて旗艦も轟沈した。

マジンガーZがロケットパンチより元の人型に戻った後、残った艦艇は早々に退却を始めた。艦隊を壊滅状態にしたマジンガーZはお決まりのポーズを取り、惑星イマガワに視線を向けた。このスーパーロボットも、イマガワを目指しているのだ。

「決戦前のウォーミングアップだ。このライトン・イエーガー様とマジンガーZが来るまで、決戦を始めるんじゃないぞ！」

マジンガーZに乗るパイロットは兜甲児では無く、ライトン・

イエーガーを名乗るライトン・ブラウナーと言う青年であった。

彼は惑星イマガワにマジンガーZの人差し指を向けながら自分
来るまで決戦を始めないように告げた後、そこへ背中のスラスターを
吹かせて向かった。

ライトン・ブラウナーが駆るマジンガーZが向かう惑星イマガワに
て、デビルガンダムによって生み出されるMS、複数のデスアーミー
が囚人たちを虐殺していた！

手にする棍棒型ビームライフルで囚人たちを殺していく中、看守ら
が乗るノブツシが決死の迎撃を行うが、デスアーミーの数は尋常では
無く、数の暴力でいとも容易くハチの巣にされる。

「もう駄目だ！ お終いだ！」

「カンソウ！」

「ちようだい！」

逃げ惑う囚人たちは、ただデスアーミーに虐殺されるばかりであつ
た。

デスアーミーには人が乗っていない。乗っているのはデビルガン
ダムによって生み出された怪物である。悲鳴や爆発は絶えることな
く、響き渡る中、その虐殺劇に終止符を打つ男が現れた！

「ルチャスター・キック！」

前半のマジンガーZのように颯爽と現れ、ビキニパンツに由来不明
のチャンピオンベルトを巻き、ルチャのマスクを被ったムキムキの
マッチョな男は飛び蹴りでデスアーミーを破壊した！

生身でデスアーミーを破壊したレスラーの如き男は、残るデスアー
ミーの集団に向けて名乗りを上げる。

「ルーチャス・ハルパニアこと、ワガハイが来た！」

颯爽に現れ、一機を撃破したルーチャス・ハルパニアを名乗るメキ
シカンレスラーに対し、デスアーミーは棍棒型ビームライフルを撃
つ。雨のようなビームに対し、ルーチャスは高速で動き、ビームを躲
した。

「ルチャスター・シャドウ！」

凄まじい速さで動いているが為に、ルーチャスが複数いるように見え、デスアーミーたちは分身を撃つだけだ。

分身しながらデスアーミーの集団に接近したルーチャスは高く飛翔し、手近に居るデスアーミーに向けて殺人パンチをお見舞いする。無論、技名を叫んでいた。

「ルチャスター・パンチ！」

キックと同様の威力であり、殴られたデスアーミーは撃破される。続けざまに周辺に居るデスアーミーに技をお見舞いする。

「ルチャスター・レッグ！」

「ルチャスター・ヘッドバット！」

「ルチャスター・ドロップキック！」

「ルチャスター・ラリアット！」

「ルチャスター・ダイブ！」

この五つの技で、五機のデスアーミーは撃破された。だが、まだ数が多い。そこでルーチャスは大技たるルチャスター・フラッシュ・スーパードライブを行う！

「ぬうん、まだ居るのかあ!? ならば、ルチャスター・フラッシュ・スーパーノヴァ！」

一度浮いてから全身に気を放ちながら高速で回転させ、それでデスアーミーの集団に突っ込み、その大技で集団を全滅させた。

「ムハハハ！ これで悪党は全滅だア！ ぬっ!？」

必殺技でデスアーミーを全滅させたルーチャスであったが、デスアーミーを率いるメカブーストの攻撃を受けて吹き飛ばされた。

「おのれ、ボスが居たか！ ならばガンダムで倒すまでだ！ カモン、ガンダムう!!」

現れたメカブーストに対し、ルーチャスは自分のガンダムであるルチャドールガンダムを呼び出した！

何処からともなく現れたルチャドールガンダムは、姿その物がテキキラガンダムであるが、色が変わっている。だが、そんな物はルーチャスには関係ない。直ぐにファイティングスーツを身に纏い、ファイティングポーズを取ってメカブーストに挑む。

「ムハハハ！ 悪を裁く正義の拳を受けて見ろお！ ルチャスター・殺人パンチい！ 殺殺殺殺ツ!!」

自分のガンダムより巨大なメカブリストに対し、ルーチャスはガンダムに乗って強化されたルチャスター・殺人パンチのラツシユを見舞った。

彼が殺殺殺と叫びながら放たれるパンチの威力は生身のルーチャスのルチャスター・パンチの十倍であり、それを受けたメカブリストは瞬く間に細切れとなる。ルチャスター・パンチのラツシユが終わるころには、メカブリストの姿は跡形もなく消し飛んでいた。

メカブリストを撃破したルーチャスは勝利のポーズを取り、高笑いを始める。

「フハハハハハッ！ ワガハイの、正義の勝利だ!!」

正義の勝利とルーチャスが叫べば、生き延びた囚人たちは歓声を上げる。この歓声を聞いたルーチャスは更に上機嫌となり、更なるポーズを取り、彼が乗るガンダムも連動してそのポーズを行う。

「勝利にギャラリーの歓声、全く良い事この上ない！ フハハハハハハハ!!」

上機嫌となってルーチャスとルチャドルガンダムが更にポーズを取って高笑いする中、更なる戦士たちが着々と惑星イマガワに集結していた。

赤いあいつとウルトラマンに憧れる星人

惑星イマガワに集結する戦士たちはロボットだけでない。

あの赤い怪獣ハンターもイマガワで生存者たちを虐殺する怪獣の匂いを嗅ぎ付け、イマガワに来ていた！

「レッドファイター！」

突如となくイマガワの地に徒歩で現れた身長四十メートルの赤い巨人の名はレッドマン！

宇宙空間でも生存可能で三十万度の高熱に耐え、全身は鋼鉄の二十倍以上に硬い。両耳のアンテナ、レッドソナーイヤーは三百キロメートル四方の音を聞き取れる。即ち地獄耳である！

太陽光線をエネルギー源としているため、昼は無限に活動が可能。だが、曇りや雨、夜中は力が半減して三十分以上しか活動できない。その為、怪獣退治は主に昼に行う。

マツハ5の飛行能力を有し、飛行型の怪獣も難なく追い付く。故にレッドマンに倒せぬ怪獣は居ない！

宇宙の過去一万年のあらゆる怪獣がらみの事件と怪獣名を全て暗記している。レッドマンは怪獣博士に近い知識を持った怪獣ハンターなのだ！

惑星イマガワの囚人たちを情け容赦なく虐殺する四体の怪獣を発見したレッドマンは直ぐに掛け声を上げて怪獣に立ち向かった。

向かってくる赤い巨人に対し、囚人を虐殺していた怪獣たちは虐殺を止め、レッドマンに応戦する。

「トオーッー！」

全力疾走の勢いをつけ、レッドマンは一番先頭の怪獣に飛び蹴りをかまして転倒させる。直ぐに立ち上がり、二体目の怪獣を殴り、それから背後に回った怪獣に肘打ちを食らわせ、倒れたところで馬乗りとなり、連続のチョップをかます。

「レッドナイフッー！」

襲い掛かる四体目に対し、レッドマンは叫びと同時に右手に出したレッドナイフで首を斬り付け、嘔き出る血を抑え込む怪獣の腹にナイ

フを突き刺し、とどめを刺した。

続けて体勢を立て直した三体の怪獣に向け、レッドマンはレッドナイフの先端部より弾丸を発射して怪獣たちを苦しめる。

「レッドアローッ！」

弾丸を撃ち込まれて怯む三体の怪獣に対し、レッドマンは叫んで召喚したレッドアローと呼ばれる槍を投げ付け、一体を串刺しにした。レッドアローで串刺しにされた怪獣は突き刺されたレッドアローを抜こうと藻掻き苦しみながら息絶える。

流石に二体を立て続けに殺したレッドマンに残る二体の怪獣は怖気付くが、まだ二体も居るので一気に襲い掛かる。これにレッドマンは腕先を向け、技名を叫んでその攻撃を行う。

「レッドサンダーッ！」

それは破壊光線であった。その破壊光線は一体目の後ろに居た怪獣に命中し、背後の怪獣の命を奪った。残った一体の怪獣はレッドマンの余りの強さに恐怖して逃げ出したが、赤い怪獣ハンターが逃すはずが無かった！

「レッドファイヤーッ！」

指先から火炎弾を発射し、逃げる怪獣を焼いたのだ！

火炎弾を撃ち込まれて全身を焼かれた怪獣はたちまち火達磨となり、悶え苦しみながら地面をのた打ち回る。そんな怪獣に対してレッドマンはとどめの一撃と言うか、慈悲の一撃を見舞う。

ベルト中央のランプよりカッターを発射し、火達磨となつてのた打ち回る怪獣の身体を切り裂いた。

上半身と下半身に切り裂かれた怪獣は息絶え、全身を覆っていた炎は遺体を焼き尽くすまで燃え続ける。骸を燃やす炎を見ていたレッドマンは別の怪獣の存在を悟り、その場を無言で立ち去った。

「……は…?!」

付近で赤いあいつことレッドマンが四体の怪獣を仕留め、別の怪獣の元へ向かう中、機械怪獣キングジョーに乗る異星人が目覚めた。

コクピット内で目を覚ました異星人は、直ぐに計器を操作して機体

のカメラを回し、周辺の様子を探る。

「どうやら、私は四次元怪獣ブルトンの攻撃で、別の場所へ飛ばされてしまったようだ」

キングジョーに乗っている異星人は怪獣の攻撃で、この世界に來たと判断する。

更に調査しようと周辺の映像を見る中、一体の怪獣が収容所を襲撃しているのが映った。火炎放射を口から吐き出し、逃げ回る囚人や看守たちを焼き殺している。

「ここにも怪獣が居るようだな！ しかも人を襲っていると見える！ ウルトラマンのように助けるぞ！」

火を吐く怪獣を倒すべく、キングジョーに乗る異星人は宇宙を守る正義の戦士「ウルトラマン」の如くその怪獣に挑んだ。

「怪獣よ！ このキングジョーのペダン星人ボウンが相手だ！」

拡声器で怪獣に自信の名を叫んで注意を引けば、キングジョーの胸のガトリング砲による牽制射撃を行う。凄まじい連射力で放たれるエネルギー弾に怪獣が怯み、余りの痛さに後ろへと下がる。そこへ破壊光線を撃ち込み、怪獣を地面に転倒させる。

「電撃をお見舞いだー！」

倒れた怪獣へ向け、ボウンは更なる追い打ちを掛ける。両耳のボルトより五千万ボルトの電流を浴びせ、怪獣を痺れさせるが、怪獣は口より火炎放射を吐いた。

だが、このキングジョーは三つに分離できるのだ。三体に分離したキングジョーは立ち上がった怪獣に波状攻撃を行い、更なるダメージを与える。

爆発の連鎖が起き、怪獣がダメージによるうめき声を上げる中、三つに分かれたキングジョーは再び一つとなり、既による追撃を行う。

「ペダニウムランサーー！」

ランサーを叫べば、右腕にランサーを装備し、怯んでいる怪獣を串刺しにする。

なぜ右腕が一瞬にしてランサーに変わったのは、粒子化システムと呼ばれる途方もない説明が必要なシステムが使われているからだ。

これにより、ボウンのキングジョーは一瞬にして武器を換装することが出来る。

ランサーに串刺しにされた怪獣は息絶え、キングジョーが刺していたランサーを引き抜けば、数秒後に爆発した。

だが、先の攻撃で二体目の怪獣がやって来た。飛行タイプである。光線でキングジョーを攻撃するが、キングジョーの装甲には通じなかった。

「もう一体いたか！ ならば！」

空を飛ぶ怪獣に対し、ボウンはキングジョーの右腕をランサーからランチャーに粒子化システムで即座に感想を行い、照準を旋回して再び光線による掃射を行う空飛ぶ怪獣に定めた。

「ペダニウムランチャー、発射！」

技名を叫びながら引き金を引けば、大都市を吹き飛ばせる光線が砲口より発射され、空飛ぶ怪獣に命中した。光線を撃たれた怪獣は一撃で振付近で爆散した。残骸が地面に雨の如く落下する中、キングジョーはランチャーから元の右腕に切り替え、囚人や看守たちの安全を確認する。

「良かった。生きている」

生存者を確認すれば、その場から立ち去ろうとした。だが、あの赤いあいつが現場に駆け付けていた。

「レッド・フォールツ！」

崖の上からレッドマンが現れ、頭上に抱え上げた怪獣を地面に向けて投げ付けた。

地面に投げ付けられた怪獣はキングジョーの足元に叩き付けられ、そのまま息絶える。これにキングジョーに乗るボウンは警戒し、崖の上にいるレッドマンを見た。

「あ、あれはウルトラマン…なのか!？」

レッドマンを見たボウンは驚きの声を上げる。レッドマンはウルトラマンに似ているが、ウルトラマンではない。

死んだ怪獣の骸の近くにいるキングジョーを見たレッドマンは崖から滑り降り、怪獣かどうかを判断するために近付いた。

キングジョーは機械怪獣であるが、乗っているのは正義の守護者であるウルトラマンに憧れる戦士だ。こちらを無言で見るレッドマンに、ボウンはキングジョーのコクピットのハッチを開き、我が身を晒して敵でないことを告げる。

「私はペダウ星人のボウンだ！ 敵ではない！ このキングジョーも敵ではない！」

その拡声器を使った訴えに、レッドマンは無言で聞いていた。

ずっとこつちを見て来るレッドマンに、ボウンはキングジョーの足元に転がる執拗に攻撃され、地面に叩き付けられた死んだ怪獣のように攻撃されるのではないかと思った。

十分にも及ぶ沈黙の中、レッドマンは背中を向け、無言で立ち去って行った。どうやら、敵意のない事が通じたようだ。何も言わずに立ち去るのが証拠である。

彼は無法に暴れる怪獣のみをターゲットにしているのだ。正義のヒーローに憧れ、罪なき人々を悪意から守るキングジョーとボウンを悪意のない怪獣とレッドマンは認識したのだ。

立ち去るレッドマンの背中を見て、ボウンは安心してコクピットへと戻った。

ところ変わり、惑星オワコンでは、新たなる艦隊が発進していた。

ライトンのマジンガーZの攻撃で撤退した第一陣の生き残りを加え、第二陣の破壊艦隊は通常の艦隊より艦艇がやや多い。

「クソお、一体あのイマガワで何が起こっているのだ…!? どうしてこうも失敗続きなのだ…！」

惑星オワコンの議事堂の首相用執務室で、オワコンの統治者たる首相は惑星イマガワの掃除が幾度となく失敗することに苛立ちを覚えていた。

何が起きたか分からんが、あの数の艦隊なら今度こそイマガワの掃除は完了するだろう。

続々とイマガワへ向けて発進する艦艇を見て、首相はそう思っていたが、その思惑は新たに現れた者によって打ち砕かれた。

「な、なんだ!？」

惑星イマガワを破壊せんと出航していく艦隊が、何かの攻撃を受けて一瞬にして消滅したのだ。

この光景を見た首相は驚き、直ぐに何が起きたか確認するために端末を操作したが、艦隊を全滅させた本体はオワコンに標的を定めており、艦隊を消滅させたメガビームランチャーを向けていた。

「どうした!?! 何が起きている!?!」

『が、ガンダムです! ガンダムが艦隊、アーツ!!』

「お、おい! ガンダムが何だ!?! 応答しろ! おい! 聞こえてくるのか!?!」

端末で呼び出した防衛本部に問いかける首相であったが、既にメガビームランチャーが放たれた後であり、防衛本部は消滅していた!

その惑星破壊ビームは惑星オワコンを貫いており、オワコンは大爆発を起こして小惑星帯へと変わった。

惑星オワコンを破壊し、小惑星帯へと変えたガンダムの名はNE OーHiっガンダム。乗っているパイロットは小惑星帯となったオワコンに向けて言い放つ。

「ニュータイプに進化しない地球人類は全滅だ!」

手にしていたオワコンを破壊して小惑星帯へと変えたメガビームランチャーを消し、惑星イマガワに緑色の光る眼を向け、蝶のような羽を纏ってそこへと向かった。

竜馬と人類に絶望した男

レッドマンとキングジョーのボウンが惑星イマガワに到達した頃、あのゲッター線に選ばれし者も、ゲッター線に導かれてイマガワへと来ていた。

「畜生、何処だここは？」

ゲッターロボに一人で乗る粗暴な男は、イマガワの地に降りて周囲を見渡す。どうやら、亜空間を通ってイマガワに到着したようだ。

男が乗るゲッターロボは寄せ集めであり、様々なゲッターロボのパーツが使われており、一人乗りに改造されている。

その寄せ集めのゲッターに乗る男の名は流竜馬^{ながれりょうま}！

初代ゲッターチームのメンバーの一人であるが、この竜馬は違う。初代ゲッターチームの竜馬も喧嘩っ早い男であるが、この竜馬は更に凶暴である。

「まあ、ここが何処だか関係ねえ。俺に襲い掛かる連中は、片っ端からぶっ殺していくまでよ！」

頭の方は更に悪いようで、イマガワに着いても自分に襲い掛かる連中は殺せば良いと発言し、当てもなく一人乗りゲッターを動かした。

竜馬の野生の勘か、それともゲッター線に好まれる彼の所為か、直ぐにイマガワで暴れ回るインベーターと遭遇する。

「なんだあ、この気色悪い化け物は？ 鬼や神なんかじゃねえ。しかも俺を殺す気でいやがると来てる。なら、ぶっ殺すまでだ！」

インベーターが竜馬のゲッターを見るや否や、襲い掛かって来たので好戦的な彼は笑みを浮かべ、両肩よりゲッタートマホークを出す。

「ゲツエタアトマアホオオクウ!!」

それを叫びながら両肩より射出された二振りのゲッタートマホークを両手に持てば、襲い掛かるインベーターの集団に怯むことなく我武者羅に突っ込む。

先頭の一体が飛び掛かった瞬間に右手のトマホークを叩き込んで切り裂いた後、二体、三体、四体と両手のトマホークを振るってインベーターを殺し続ける。十数体は居たインベーターであるが、血気盛

んな竜馬が駆るゲッターは寄せ集めとは思えない程に強く、四体にまで減っていた。

「あと四体か！ 気色悪い化け物は、さっさと駆除するのが一番だぜ！ ゲッターアアビイイムウウ!!」

残り四体だと確認した竜馬は、速く始末するためにゲッタービームを叫びながら放った。放たれたゲッタービームはインベーターを焼き尽くし、塵へと変える。

その直後に飛行体のインベーターが現れ、竜馬のゲッターを空襲する。それに対し、竜馬は恐れることなく笑みを浮かべながら空を飛ぶ敵に対する対抗策に出る。

「今度は気色悪いハエか！ ハエ叩きにはこいつだ！ ゲツエタアトマホオオイク、ブウメエラアアアンン!!」

それはゲッタートマホークを、飛行体のインベーターに向けて投げ付ける物であった。竜馬の叫びと共に投げられたゲッタートマホークは飛行体のインベーターの身体を引き裂き、ゲッターの手に戻って来る。残る一体に対しては飛行し、張り付いて引き千切り、地面に叩き付けて殺す。

「ゲッター線の奴らや仏の奴らじゃねえな、こいつ等。ここの生き物か？」

掃討したインベーターを見て、竜馬はイマガワの原種生物と思っていた。この竜馬はインベーターがゲッター線に惹かれてやって来るのを知らないのだ。そもそもインベーターも知らない。

「まあ、考えてもしやあねえ。人気のあるところはねえかな？」

単純な竜馬はインベーターの事を考えるのを止め、休息を取ろうと思つて人気のありそうな場所を探した。

そんな時に、残ったインベーターの僅かな細胞が付近に倒れているイマガワの防衛用である機動兵器に寄生し、同じく残っている細胞を集結させて兵器を再生させる。

人型の形態を取ったところで、竜馬のゲッターの背後より襲い掛かろうとしたが、既に彼は気付いてゲッタートマホークを頭上に叩き込んでいた。

「へっ、殺気が抑えきれてねえんだよ。んなもん、ワン公でも気付くぜ」

背後から襲い掛かった時に発した殺気を竜馬は気付いており、相手を確実に仕留めるために敢えて気付かぬフリをしていたのだ。ゲッタートマホークの間合いに入ったところで、背後から襲い掛かる残骸に寄生したインベーター、メタルビーストの頭にそれを叩き込んだのだ。

ゲッター線のトマホークを叩き込まれ、胴体にまで切り裂かれたメタルビーストは沈黙する。

「後ろから近付くときは、殺る時まで殺気は抑えとくもんだぜ。あの世で出直してきな」

トマホークを引き抜いた後、竜馬は崩れ行くメタルビーストに向けて告げた。

それから操縦桿から手を離し、肩を回して軽くストレッチを行う中、何かの残骸が竜馬のゲッターの前に転がり落ちる。

「っ!?! 新手か!」

直ぐに操縦桿を持って新手に備え、残骸を確認する。その残骸はあのメタルビーストであった。倒したのは、竜馬のゲッターが来るまでこのイマガワで唯一存在するゲッターロボであるゲッターカオスであった。形態はパワーと水中戦特化型のカオス3、それを担当するのはドソクである。

ゲッターを見た竜馬は笑みを浮かべ、見たことが無いゲッターロボに殺意の眼差しで見えてゲッターとまごころを取り出す。

「ここにもゲッターか…! ぶっ壊すまでだア!!」

自身の寄せ集めゲッターの両手にゲッタートマホークを持たせた竜馬は、こちらを見て警戒するゲッターカオス3に我武者羅に突っ込んだ。

「あれは…ゲッターロボ…?」

突っ込んでくる竜馬のゲッターに対し、それを見たドソクは驚くあまり茫然としていた。竜馬の殺気に感付いた竜騎は、直ぐにドソクに

躲すように叫ぶ。

『呆けてる場合か、おっさん！ 奴は殺す気で来るぞオ!!』

『いきなりか！ クソつたれ!』

『死ねえええ!!』

竜騎の声でドソクは直ぐに戦闘態勢に戻った。星の如く速さで迫る竜馬のゲッターは、ゲッタートマホークの間合いに入ればそれを振り下ろす。この斬撃を躲したゲッターカオス3は反撃の拳を打ち込むが、数え切れる修羅場を潜り抜けてきた竜馬はそれを躲し、逆に蹴りをカオス3に叩き込んだ。

「ぬう、こいつ…! ただのメタルビーストじゃねえぞ!」

『まさか、この星のパイロットの戦闘データをコピーしたのか!?』

『おいおい、あいつらは化け物じゃねえのか!?』

「へっ、要は一番強い奴の真似ってことだ。ならば、こちらも経験で張り合うまでだ! ゲッターミサイル!!」

蹴りを入れ込まれ、直ぐに距離を取ったドソクは、相手がただのメタルビーストでないと判断する。もつとも、竜馬のゲッターはメタルビーストでも無いのだが。

相手がメタルビーストだと思っているレンはこの星のエースの戦闘データをコピーしたと誤認し、竜騎はそれを聞いて驚く。これにドソクは経験で張り合うまでと判断、ゲッターミサイルによる弾幕を張る。

このミサイルを見た竜馬は、かつて共に戦った二人の仲間の一人が担当していた形態を思い出す。

「見たこともねえゲッターだが、ムサシのゲッター3と同じミサイルか! だったら撃ち落とすまでだア! ゲッターマシンガン!!」

多数のミサイルに対し竜馬は、寄せ集めゲッターに搭載したゲッターマシンガンでそれを迎撃し始める。向かってくるミサイルに向けて乱射してその全てを迎撃する中、爆炎の中よりゲッターカオス3が姿を現し、掴み掛ってから上昇する。グレートアバランチだ。

『この野郎、離しやがれ!』

「ぬアアア! グレートアバランチ!!」

掴まれた竜馬が抵抗する中、ドソクは寄せ集めゲッターを地面に叩き付けて破壊する為、更に上昇する。十分な高度に達したところで急降下し、地面に叩き付けようとする。

『テメエと一緒に心中なんてするか！ ゲエツタア、ビイイイムウウウ!!』

「おワアアア!?!」

至近距離からゲッタービームを放ち、ゲッターカオス3の拘束を解いた。

「ゲッター、トマホオオイクウ!!」

『オープンゲエツト!』

「ゲットマシンだとオ!?!」

続けざまにゲッタートマホークを投げるが、ドソクは合体を解いた。三つのゲットマシンに別れたゲッターカオスを見て、竜馬は驚きの声を上げる。

「チェンジ、ゲッターカオス2ウ!!」

『合体しやがった!?! ハヤトの野郎と同じ2か!』

竜馬が驚く中、レンは相手が驚いている隙にゲッターカオス2に合体する。形態を変えたことに竜馬はさらに驚く。もう一人の仲間が担当していた形態と似ているのだ。

そんな竜馬のゲッターに、レンは容赦なくドリルミサイルを放つ。

相手が放心している隙に、仕留めようと言うのだ。

「ドリルミサイルッ!」

『しやらくせえ!』

「何っ!?!」

ドリルミサイルを放ったが、竜馬は既に戦闘態勢に戻っており、放たれたドリルミサイルを弾いた。これに逆にレンが驚かされたが、トマホークを持って斬りかかる竜馬のゲッターに直ぐに対処し、放たれたドリルを回収して左腕に装着する。

「死ねえ! ちっ、地中に潜りやがって!」

竜馬のゲッターの次の斬撃を躲せば、ドリルで地中に潜って姿を消す。地中に向けてマシンガンを放ち、いぶり出そうとする竜馬のゲッ

ターの背後より這い出た。

「ドリルハリケーン!!」

『グっ！ オラあ!!』

そこから奇襲のドリルハリケーンで突き刺す。攻撃を受けた竜馬は怒りの肘打ちをゲッターカオス2に打ち込んで吹き飛ばす。吹き飛ばされたゲッターカオス2は地面に叩き付けられる前に合体を解除し、直ぐに形態に合体しようとする。だが、それを竜馬が許すはずが無い。直ぐにマシンガンによる乱射を行い、合体を妨害する。

「やらせると思ったか！ くたばれえええ!!」

『怯むなア！ チェンジい、ゲッターアアカオス、ワアンン!!』

この合体の妨害攻撃に怯むことなく、竜騎たちはゲッターカオス1に合体する。その姿を見た竜馬はマシンガンの乱射を止め、笑みを浮かべる。かつて自分が担当していた基本形態なのだから。

『へっ、やっぱりゲッターの顔はこれだな!』

「てめえ、なんでゲッターを知ってた？ つか、誰だテメエは!? メタルビーストが何で普通に喋ってやがる!」

『何い？ てめえ、俺は化け物じゃねえ、流竜馬だア！ それとお前らはゲッターの差し金か!』

「俺は今川竜騎！ ゲッターの差し金じゃねえ!!」

基本形態のカオス1になったところで、竜騎は竜馬に向けて何故ゲッターを知っているのか、それとメタルビーストなのかと問う。

この問いに怒りを覚えた竜馬はメタルビーストでは無いと答え、自分の名前を告げた。次に竜馬は自分が倒すべきゲッター線の差し金かと問えば、竜騎は自己紹介しながら違うと答える。尚、この会話は拡声器越しで行われている。

『なに、違うだあ？ だったら何で襲い掛かってきやがったんだ？ それも殺す気でよ!』

『テメエのゲッターがボロいから、メタルビーストと間違えたまでだ! それに最初に襲い掛かったのはテメエだろ! 流竜馬ア!!』

『んだとお、このデブ親父が! 降りろお! 面と向かって決着だ!』
『止せ! そんなことをしている場合か!』

それから最初になぜ攻撃したと言う問いを竜馬が行った。これにドソクは激怒し、最初に襲ったのは竜馬だと罵る。互いの返答違いで己の拳闘士の喧嘩に発展しそうになる中、レンは止めるように仲裁する。

これで互いの疑いが晴れたが、新たなる敵が惑星イマガワに現れた。

「なんだ、あいつ…?」

『くつ、ここにきて新手か…!』

竜騎がイマガワの上空に現れた人型を確認すれば、レンはそれが新手だと判断した。

その新手はオワコンを滅亡させたH i ーレガンダムであった。それに乗るパイロットである滅^{メツ}は、イマガワに居る者たち全てに宣戦布告する。

「私の名は滅! 貴様たちニュータイプに進化しない人類を、全滅しに来たの者だ!」

突如となく現れたH i ーレガンダムに乗る滅が、人類を全滅しに来たと宣言した後、眼下に映る二体のゲッターロボに向け、お前たちは絶対に倒すべき存在であると告げる。

「特に貴様たちは絶対に始末せねばならん存在だ! 闘争心に駆られ、思うがままに暴れ回る狂暴性。ニュータイプに不必要な存在だ! 貴様たちのような闘争心の塊たるオールドタイプは必ず全滅させる! 絶対にツ!!」

ガンダムの右手を動かしながら滅は、特にゲッターロボに乗る竜馬、竜騎、レン、ドソクのような好戦的な人間は絶対に全滅させなければならぬ存在だと告げた。

無論、これを聞かされて黙って滅に消されるゲッターチームではない。自分には理解できないことを言う滅に対し、一人乗り用自作ゲッターに乗る竜馬は怒りを覚えてか、真っ先にゲッタービームによる攻撃をガンダムに行う。

「分けわからねえことを言ってるじゃねええ!!」

『何いつ!?!』

この竜馬のゲッタービームによる攻撃は流石に滅には予想できない物であつたらしく、直ぐに躲してメガビームランチャーを取り出し、イマガワごとゲッターチームをやるうとチャージ無しで放った。「なんと野蛮な! だが、貴様たちもこれで終いだ! あの世界で後悔するが良い!!」

オワコンを滅亡させたメガビームランチャーを放とうとした滅であつたが、既に竜馬のゲッター、だけでなく竜騎たちのゲッターカオスも既にヒーリングダム付近まで接近していた。竜馬のゲッタービームの攻撃の後、高速で滅の元まで来ていたのだ。

『いつの間!?!』

「テメエは、自分の思い通りにならねえ人間はいらねえって言うのか!?!」

『自己中心的な選民思考の持ち主だな。そういう輩は、肅正するに限る』

『要は気に食わねえ奴はぶつ殺すって思想だろ! そういう奴はぶつ飛ばさねえとな!』

『ちいつ! 死ねえ!!』

自分を身勝手な選民思考だと罵るゲッターカオスに乗る者たちに對し、滅はメガビームランチャーを放とうとしたが、砲身は巨大な手に掴まれて押し折られた後であつた。

「ご自慢の得物もブチ折ったぜ! 次はテメエの首をブチ折る番だ!」

『蛮族共がア! ファインファンネル!!』

『不味い! 躲せ!』

撃つ前にメガビームランチャーの砲身を右手で押し折り、次はお前の首を押し折ると宣言した竜騎に、滅は機体背部のウイングに搭載されたファインファンネルを展開してゲッターカオスにオールレンジ攻撃を行う。

これを理解できない竜騎は何の攻撃か理解できなかったが、レンはその攻撃に気付き、躲すように指示した。それに合わせ、ゲッターカ

オスーは回避行動を取る。

「なんだこの攻撃は!？」

『四方八方から来るぞ!』

『軍の研究中の兵器だ! あ の 機 体 は そ れ を 装 備 し て い る !』

「近付けねえじゃねえか!」

竜騎たちはファンネルを見たことが無く、対応策を思い出せぬままただ四方八方から飛んでくるビームを躲し続けるしか無かった。

「余所見してんじゃねえ!!」

だが、竜馬のゲッターが居り、ゲッタートマホークでガンダムを切り裂こうとその斧を振るう。これを軽やかに躲し、何処からともなく出したビームライフルでゲッターを撃つが、竜馬はそれを躲しながら斬りかかって来る。

「これだから闘争心剥き出しな奴は!」

『グダグダ抜かすなア! ゲッターアアビイイムウウ!!』

ゲッタートマホークの斬撃を躲しつつ、自分を罵る滅のガンダムに向け、竜馬はゲッタービームを放つ。無論、これに当たるような滅ではない。直ぐに躲してバズーカをあらぬ方向へ投げ、そこへ攻撃を躲しながら向かう。

「逃がすか!」

『待て! 流竜馬、それは罠だ!』

「何っ!?! ぐわっ!」

逃げるガンダムに、竜馬は追撃を掛けるが、フィンファンネルのオールレンジ攻撃を躲し続けるゲッターカオスーに乗るレンはそれを罠だと見破った。直ぐに警告するが、時すでに遅く、背面にバズーカを食らった。フェイントバズーカだ。だが、撃墜には至ってない。

「野郎! 味な真似しやがって!」

直ぐに背後を向き、ゲッターマシンガンでバズーカを破壊する。そこへ背後からビームサーベルを抜いたHiールガンダムが迫る。

「やらせるか! ゲッターアアビイイムウ!!」

竜馬のゲッターの背後よりビームサーベルを突き刺そうとするHiールガンダムに、ゲッターカオスーの竜騎はゲッタービームを放つ

た。

「ちっ！ 抗うか！」

直ぐに滅はそれを躲し、左手に持ったビームライフルでゲッターカオス1を撃つが、竜騎はそれを喧嘩で培った経験で躲しつつ接近してゲッタートマホークを振り下ろす。

「背中がお留守だぜ！」

『こいつ等あ……！ フィンファンネル！ ファンネル！』

ゲッターカオス1の斬撃を躲したと思いきや、竜馬のゲッターの斬撃も来るので、滅は苛立ちを覚える。

二機のゲッターロボを同時に機体に搭載された全てのファンネルを展開し、二機共々葬ろうとするが、両者ともそれを躲し切り、拳句に腕や足を振るってファンネルを破壊した。

『にゅ、ニュータイプでも強化人間でもないのにファンネルを破壊しただとおツ!』

「喧嘩は四方八方から拳や蹴りが飛んでくる物よ！ この今川竜騎様を舐めんじゃねえぞ！」

『似たようなのと戦ったことがあつからな！ こんなちやちな物で俺たちゲッターチームをぶつ殺そうなんて百年早いぜ！』

『ぬうう……！ ぬうううツ!!』

ファンネルを破壊され、拳句にニュータイプでも強化人間でもないゲッターチームの面々に追い詰められた滅は、Hi-Logガンダムの奥の手を使う。

それはNT-Dシステムであった。本家ユニコーンガンダムとは違い、一部の装甲がスライドする程度であるが、戦闘力は増しており、二機のゲッターロボを吹き飛ばした。

「何だこいつは!! 赤色に光るだけで俺たちを！」

『野郎、切り札と使いやがったのか！ 畜生が!』

竜騎が驚きの声を上げる中、竜馬は滅が奥の手を使ったと判断する。形勢は逆転、二機のゲッターロボは一機のガンダムに押されていた！

遠くの方でこの戦いを眺めていた嘉承は滅の内に潜む光を感じ取

り、NT-Dが発動したHiiragganダムなら、彼の内に潜む光を引き出すことが出来るチャンスだと捉える。

「あの者の内に潜む光、見付けたり！ 今の状態、あの者の光を引き出す好機ッ！」

そのチャンスを逃すまいと、嘉承は目を見開き、座禅から立ち上がって動いた。

光に目覚めた超越者と奇怪な女！

滅の中に光を感じ取った嘉承が行動を起こした頃、惑星イマガワは
またも攻撃を受けていた。

今度の狙いは政治犯収容所であり、このイマガワでは真つ当と言え
る人物たちが収監されている施設だ。

そこにもオワコンより送られた刺客たちによる攻撃が行われてい
たが、その刺客たちは奇人の女が駆る機動兵器の攻撃を受け、壊滅状
態となっていた！

「な、なんだこいつはアーツ?!」

政治犯収容所の襲撃隊であるブツシに乗るパイロットは、恐ろしい
速さで迫る機動兵器に僚機を次々と撃破されるのを見て驚愕の声を
上げた。

時間が経つごとに一機、また一機と撃墜される。恐怖以外何物でも
ない。直ぐにそのブツシに乗る男の番が来た。

「ギヤアアア!!」

その男はなす術もなく、十字架を燃やす鬼火のエンブレムを左肩に
付けた白いアーマード・コアのレーザーブレードで切り裂かれて撃
破された。

それと同時に政治犯収容所で人材を集めに来たシユンが駆る鉄人
28号が現れ、白いACを見る。

「なんだあ、あの白いロボットは？ 政治犯を血祭りに上げに来た刺
客か？」

白いACを見たシユンは、政治犯を処理にしに来た刺客だと思い、
操縦桿を動かして鉄人28号に構えのポーズを取らせる。

戦闘態勢を取る鉄人28号に対し、白いACに乗る女性と思われる
人物は笑みを浮かべる。

『フッフ、さっきの雑魚共より手強そうな相手だ…！ 君のような奴
と戦いたい…！』

「あつ、何言ってるんだ？ それより誰だ？」

拡声器で戦いたいと言ったので、シユンは何者かを問う。これに白

いACに乗るパイロットは偽名と機体の名を答える。

『ナハトとでも名乗っておこう。それとこのACはゲシユペンスト。これから君のACを切り裂くACさー!』

「はっ? おい、何を言ってる…」

とにかく機体がゲシユペンストで、偽名であるが乗っている人物がナハトと分かったが、その白いACに乗るパイロットは鉄人28号をこれから切り裂くと興奮しながら告げた。

これにシユンは意味が分からず、もう一度聞こうとしたが、既にゲシユペンストはライフルを発砲していた。凄まじい機関銃のような連射であり、シユンはそれを防ぐ。この間にゲシユペンストは小型ミサイルによる波状攻撃を始めていた。

「クソっ、いきなりかよー!」

余りにも唐突過ぎるナハトからの攻撃を防ぐか躲しつつ、接近して反撃しようとするも、キャノンを撃ち込まれてバランスを崩された。

そこからレーザーブレードで斬りかかるゲシユペンストが急接近してくる。直ぐに立ち上がり、ブレードを振り下ろされる前に胴体に鉄人28号の拳を打ち込んだ。巨大なロボットのパンチを受けたゲシユペンストは吹き飛んだが、即座にスラスタを吹かせて態勢を整え、ライフルとキャノンによる攻撃を行って鉄人28号の追撃を封じる。

弾幕を受ける中、シユンは付近の手頃な石を持ち上げ、それを高速移動しながらライフルとキャノンを撃って来るゲシユペンストに向けて投げ付けた。

『投石かい? そんな投げ方じゃ、このゲシユペンストには当たらないよー!』

凄まじい速さで攻撃するゲシユペンストには単なる投石が当たるはずが無く、通った後に当たるばかりであった。そんな攻撃は意味が無いと告げるナハトであるが、シユンは相手が通る進路の予想と石が当たる時間を掴み、手頃なサイズに潰した石をゲシユペンストの進路に向けて投げ付けた。

「命中……!」

『グっ…！ やるねえ…！ そう言う手強い相手と戦いたかったんだ！』

石を当てられたゲシユペンストの動きは一度止まったが、ナハトを更に興奮させてしまったのか、今度はレーザーブレードを抜いて接近してくる。凄まじい速さだ。

直ぐに接近したのと同時に鉄人28号の剛腕を叩き込もうとしたが、相手の動きは余りにも速過ぎ、ブレードで胴体を切り裂かれてしまった。

「何だこいつ!? さっきより速え!」

ブレードで横つ腹を斬られても、シユンは空かさずに反撃のパンチをゲシユペンストに見舞う。これがナハトを更に興奮させてしまい、二撃目が鉄人28号の胴体に刻まれる。

『良いね! 良いよ君! この機体と同じく愛してる!!』

「告白かあ!? お前みたいなのはタイプじゃ、ねえ!!」

『っ!?!』

二撃目が胴体に刻まれた途端、ナハトは愛していると拡声器で言ったので、それを聞いたシユンは驚愕した。だが、自分を殺しに掛かる女性はタイプではないので、まだ動く手でゲシユペンストの両肩を掴んだ。

直ぐにナハトはキャノンで反撃するが、鉄人28号の装甲はそれに耐えた。この間にシユンは何を考えてか、得物である大剣を持って頭部のコクピットから飛び出し、ゲシユペンストの頭上から飛び降りる。

『自爆するつもりか!?!』

このシユンの行動を自爆だと思ったナハトであったが、その考えは間違っていた。

なんと、大剣でゲシユペンストの二門のキャノンを切り裂いたので!

『切り裂いただど?! クソっ、撤回だ! 僕を切り裂く君は大ッ嫌いだ! 君を切り裂くのは僕なんだぞッ!?!』

これにはナハトは驚愕し、大剣で自分の機体を切り裂くシユンから

逃れるため、直ぐに鉄人28号から離れようとしたが、鉄人28号の剛腕に固定されてしまい、ゲシユペンストは動かない。そのままコクピットがある部分を切り裂かれ、ナハトは丸裸にされてしまう。

「まさか……までだなんて……！　なんで生身の大男の大剣なんかに……！」

コクピットを大剣で切り裂かれ、露わとなったナハトの正体は銀髪碧眼の美女であった。年齢は星人であろうが、身長が低い所為か、美少女と見間違うくらいの容姿だ。

敵を切り裂くことに快楽を覚える白いACに乗るパイロットの正体が、銀髪の美女であることが分かったシユンは、自分が切り裂かれることに恐怖する彼女に叩き込もうとしていた大剣を背中に背負うラックに戻し、ある言葉を吐いてから鉄人28号に戻った。

「マジでタイプじゃねえ」

その侮辱とも言える言葉にナハトは何も言い返せず、ただ敗北したことを痛感して俯いていた。そんな彼女にシユンは自分らと共に来ないかと誘う。

「おい、行く当てがねえんなら俺たちの所に来い。腕利きは一人でも多い方が良い。それで、その白いロボットも直せる腕の立つ整備士も居る。嫌なら来なくとも良いが」

この誘いにナハトは、シユンの目を見て共に行くことを決めた。何故なら、何か途轍もない手強い勢力と戦っている戦士と見ているからだ。共に来れば、更なる強敵と戦え、更には自分を打ち負かした大剣使いを超えることもできると思い、ナハトはその誘いに乗ることにした。

「行くよ……！　何故なら、君たちが戦っている相手が手強いからさ！」

その目を見れば分かる。君たちが、僕の想像もつかない敵と戦っていると言う事を……！」

「随分と馬鹿な奴だ。まあ良い、自ら地獄に首を突っ込む奴は大歓迎だ。後悔は無いな？」

「そんな物は当の昔に捨てた。今は、君を含めて更なる手強い奴らを切り裂く！」

「恐ろしいな。まつ、俺を切り裂くのは戦いが終わってからにしろ。返り討ちにしてやるがな」

「望むところー！」

自分を切り裂くのはイマガワを襲う勢力との戦いが終わった後にしろとシユンが告げれば、ナハトはそれに少女のような笑みを浮かべて応じた。

こうして、竜騎たちゲッターチームとシユンの一団に新たな仲間、十字架を焼く鬼火のエンブレムを左肩に刻んだ白いAC、ゲシュペンを駆る女性パイロット、ナハトが加わった。

ナハトとゲシュペンストが加わる中、滅のヒーレガンダムと対峙するゲッターカオスに乗るゲッターチームと竜馬のゲッターは、NT—Dシステムを発動したガンダムに圧倒されていた。

「クソっ、たかがどっか開いて光った程度の奴なんかに！」

『ゲッターが押されているってのかア!? 野郎もゲッター線か!?』

ゲッター線を源とする二機のゲッターロボがゲッター線を有しないガンダムに圧倒されているので、竜馬は滅のガンダムがゲッター線を浴びているのかと疑い始める。

そんな竜馬にレンは目前のガンダムをセンサーで確認し、ゲッター線を源にしているかどうかw調べたが、滅のガンダムにはゲッター線の反応など無かった。

『いや、ゲッター線は使っていない! ただのMS、なのか…!? 普通のMSでは無い事は確かだ!』

『ああ、赤いオーラを纏ってる時点で普通じゃねえ! こいつは本気で俺たちを殺しに掛かっている! このロボットの中に居ても分かるくれない!』

「殺る気満々ってか! 逆にぶっ殺してやるぜ！」

それを他のチームメンバーに報告すれば、ドソクは向こうの殺意がゲッターロボに乗っていても伝わると答え、同じく殺意を感じる竜騎は逆に殺してやると粹がる。

「けっ、あの神様共を思い出すぜ! だが、目の前のあいつはそいつ等

と同等だ。あのゲッター地獄よりもなまりいぜ！」

竜馬もその殺意を感じているが、彼は滅と同等の殺意を放つ神と名乗る四天王と交戦した経験もあり、更に恐ろしいゲッター聖ドラゴンに挑もうとしている。これくらいの殺意で臆しては、あの巨大なゲッターロボとは戦えないので、竜馬は動けないでいる竜騎たちゲッターカオスチームよりも先に、滅のガンダムに仕掛けた。

『おりゃアアア!!』

「この蛮族め、敵わぬと知りながらなぜ来るっ!？」

我武者羅に向かつてくる竜馬のゲッターロボに、滅はガンダムに纏ったオーラで攻撃した。

一見、無力とも思える攻撃であるが、NT-Dシステムとサイコフレームで強化されたガンダムのオーラはゲッターロボを吹き飛ばす威力があり、オーラ攻撃を受けた竜馬のゲッターは吹き飛ばされる。

『ぬあ!?!』

『オーラで吹き飛んだ!?!』

「何が起きてんだ!?!」

『分からない! だが、あれはゲッター線と同等と見ていいようだ!』
オーラで竜馬のゲッターが吹き飛ばされたの見て一同が驚く中、解析しているレンは分からないが、滅のガンダムはゲッター線と同等と見る。

だが、立ち向かわなければこのイマガワに居る者たちが滅に殺されてしまう。

「ここで退いちや、奴にみんなが殺されちまう! ビビッてられるかよっ!」

竜騎も竜馬のように我武者羅に突っ込み、懐に飛び込むことに成功する。

「懐に飛び込んだところで!」

『ぐあ! まだまだ!』

ゲッタートマホークを叩き込もうとするゲッターカオスーに対し、滅はオーラによる攻撃で吹き飛ばそうとしたが、竜騎は負けずに左拳を胴体に叩き込んだ。その衝撃で機体は揺れ、滅は思わず声を上げ

る。

「ぐあっ!? このオールドタイプがア!」

殴られた滅は怒り、Hiールガンダムの渾身の蹴りをお見舞いしてゲッターカオスを吹き飛ばす。味方のゲッターカオスが蹴飛ばされたことで、竜馬は空かさずにゲッタービームを撃ち込む。

「まだあるぜ! ゲッターアアビィイムウ!!」

『くっ、躲し切れん! ならばっ!』

既に躲し切れないほどまでゲッタービームが迫っていたため、滅はそれを全身に纏ったオーラで防いだ。これには流石に竜馬も驚きの声を上げる。

「なんだとっ!?」

『まずは貴様だ!』

『させるかあ!』

『っ!』

オーラでゲッタービームを防ぎ切った滅のガンダムはオーラでビームサーベルのビームの刃を強大化させ、それを振り下ろさんとしたが、竜騎はゲッタートマホークを叩き込んだ。これに気付いた滅は長いビームサーベルで防ぎ、再びオーラの力を使ってゲッターカオス1を吹き飛ばす。

「おわっ!? クソっ!」

『何とか互角にやり合ってるが、このままじゃ埒が明かねえぞ!』

『まるでチキンレースだ...! どちらが先に倒れるかの消耗戦だ。向こうは余裕がありそうだが...!』

『しぶてえやろうだぜ、全く!』

何とか体勢を立て直すのが、今の状況はどちらかが倒れるまでの消耗戦であった。ドソクがそれを言えば、レンは滅のHiールガンダムのエネルギーは底なしとも言えると推定する。

竜馬もまた滅のガンダムに勝てそうもないと思っていたが、負けを認めているような物なのかそれを言わず、向こうがしぶといと強気になって額に浸る汗を左手で拭う。

二機のゲッターロボのしぶとさに滅は更に怒りを覚えたのか、その

巨大なビームサーベルで二機共々切り裂いてやろうと思ひ、思いつ切り振ろうとした。

「しぶとい奴らめ！　だが、これで終わりだ！　っ!？」

二機共々切り裂いてやろうと巨大なビームサーベルことハイパービームサーベルを振るおうとしたが、自分に急接近してくるプレッシャーを感じ、そこへビームサーベルを振るった。

「このプレッシャー、そこかあ！」

『っ!？』

いきなり別の方向へと滅がハイパービームサーベルを振り下ろしたので、竜騎たちは驚きの声を上げた。滅が振るったビームサーベルの先には、念力で空を飛ぶ嘉承の姿があった。あれを生身で受ければ、嘉承は一溜りも無いと思ひ、竜騎は逃げるように叫んだ。

『避ける嘉承！　そいつを食らえばお前は!？』

「心配ご無用！　はあっ！」

逃げるように叫んだ竜騎であったが、嘉承は余裕の表情を浮かべながら全身にオーラを纏い、そのハイパービームサーベルを防いだ。防いだのだ！

これには嘉承を除く一同は驚愕する。ハイパービームサーベルを防ぎ切った嘉承はそれを振り払い、滅のHiールガンダムへと急接近する。迫る自分と同じくオーラを纏う坊主の嘉承に、滅は機体の頭部バルカンと両腕のガトリング砲による弾幕を浴びせた。

「ビームサーベルをオーラで防いだ!？　何者だ貴様！」

その実弾による弾幕を浴びせる滅であるが、嘉承は常人ではありえない速度でそれを全て避けながら接近し、オーラによる攻撃を行う。

「これしきの事！」

嘉承によるオーラの攻撃に対し、滅もまたオーラによる反撃を行う。互いのオーラがぶつかり合う中、嘉承は二機のゲッターロボに乗る者たちに向け、手出しは無用と叫ぶ。

「ゲッターの者たちよ！　手出しは無用！　この者の光、この嘉承が掴み上げて見せるッ！」

『何を言ってるんだあんた!？』

『光だとう？ この俺の中に、土足で入るんじゃないッ！』

光を掴み上げる。

その嘉承の言葉に竜騎たちが更に混乱する中、自分の頭の中に入つて来る感触を覚えた滅はそれに嫌悪感を感じ、更にオーラ力を高めて追いつくとする。

だが、嘉承は滅の奥底に居る光を掴みだすことが目的。相手が嫌がるなら、嘉承は更にオーラ力を高めて対抗した。

「こ、このガンダムと俺がパワーダウンだと!? 奴は生身なんだぞ！」
力強いオーラのぶつかり合いを制したのは、生身の嘉承であった。滅は自分のオーラとそれを強めるマシンであるヒールガンダムに乗っているはずだが、勝つたのは己の精神力のみである嘉承だ。彼の精神力がヒールガンダムに勝利したのだ！

そのまま嘉承のオーラに押し切られ、滅のガンダムは彼のオーラに包まれた。そこから嘉承の精神は滅の精神へと入り、彼の奥底に眠る光を探し始める。

「これが、あの機械に乗る者の精神の世界。幾度も転生を繰り返し、その度に出会いと別れを繰り返して絶望している。それにその絶望の数、あの者が旧人類を滅ぼそうと決意した記憶ばかりだ」

滅の精神の中に精神体として入った嘉承は唯一残っている光を探す中、彼が旧人類を滅亡する要因となる記憶を見て、そう決意するのが当然であると認識した。

滅は数々の世界を転生を繰り返し、出会いと別れも含め、戦争、死、それらを含めてありとあらゆる絶望を経験して精神を病んでいた。光とも言える希望は滅が経験した絶望に比べて数えられるほどしかない。だが、あることには間違いない。その希望が、滅に誰かに助けを求めてさせている。

そんな小さな滅の願いを果たすべく、嘉承は彼の光とも言える記憶を見付け、それに手を伸ばした。

「グッ……やはりそう簡単には行かぬか……！」

この中では嘉承は異物だ。そんな異物である嘉承を精神の中から

追い出そうと、滅の攻撃が来た。これは嘉承は躲せず、身体に無数の杭を突き刺されて吐血したが、激痛を堪えて希望に手を伸ばす。もう少しの所で手が届くまで伸ばせたが、その度に嘉承の身体を貫く杭は増え、追い出そうとしてくる。

「これ以上は、拙僧の肉体にも痛みが及ぶ。だが、ここまで来て、引き下がれぬッ！」

これ以上滅の精神に留まっていれば、精神体で受けた身体が現実にも響いてくるが、せっかく見付けた希望を逃すなど以ての外なので、嘉承は血反吐を吐きながらも彼の内に隠された光を掴み取った。

その瞬間、嘉承は自分の精神を現実の身体に戻す。滅の精神で受けたダメージが現実の身体にも響き、それが全身に伝わり、嘉承は思わず声を上げる。

「グハッ！ 少し、長居し過ぎたか…！ だが、これである者の光は…！」

中に潜む光を取り出すことに成功した嘉承は精神体で受けたダメージを感じ、血を吐きつつ滅が乗るヒーレガンダムを見た。オーラは消え去り、NT-Dシステムは停止して糸が切れた人形のように地面へと落下していく。

「やったのか…？」

『人形見てえに落ちやがったぜ』

落ちるヒーレガンダムを見て竜騎は終わったと思ひ、竜馬は人形のようにだと言ひ始める。

地面へと落下して倒れたヒーレガンダムであったが、乗っていた滅が目覚めたのか、機体は立ち上がる。それを見ていた竜騎と竜馬は警戒したが、地面に降りた嘉承は手を翳して止めるように無言で伝え、立ち上がったガンダムに話し掛ける。

「気分はいかがか？ 異界の戦士よ」

嘉承に尋ねられたヒーレガンダムに乗る滅、否、闇を振り払った戦士は答える。

『私の光を救い上げてくれてありがとう、異界の僧よ。私は旧人類オールドタイプに対する怒りの余り、我を忘れ、闇に心を囚われていたようだ』

自分を闇から救い上げてくれた嘉承に礼を言うパイロットは、そちらに合流しても構わないかと問う。

『諸君らに危害を加えてしまった私であるが、贖罪として諸君らと肩を並べて戦いたい。良いか?』

「無論、歓迎するとも。ゲッターの方々はよろしいかな?」

贖罪として共に戦いと言うガンダムのパイロットに対し、嘉承は歓迎すると答え、ゲッターチームの面々に意義が無いかを問うた。

『勝手にしろ。俺もこいつと同じくよそ者だからな。俺もあんた等のところで世話になるぜ』

ガンダムのパイロットの参入に、竜馬は自分もよそ者だから判断を嘉承に任せ、自分も共に参加すると答えた。

一方で竜騎、レン、ドソクのゲッターカオスに乗る面々は互いに顔を合わせ、数秒で意見を纏めてからかつて敵であったガンダムのパイロットの参加に対する意見を伝える。

「全力で殺しに来たが、今のお前からは殺意は感じね。むしろ温かいのを感じるぜ。お前からどうだ?」

『今は人手不足だ。敵であったが、味方になるなら大歓迎だ』

『敵の敵は味方って言うしな。あんなに強いんだ、こっちは大歓迎だぜ』

「俺も同意見ってことで、瀬戸の兄貴によろしくな! 坊さん!」

その意見は大歓迎であった。自分を迎え入れてくれた竜騎たちに、ガンダムのパイロットは改めて礼を言う。

「改めて感謝する。君たちと共に戦列を組むなら、私の名を明かそう。私の名はクガヤ・アルファラ。この名は宇宙世紀の名であるが、その名を名乗っておこう」

こうして滅を改め、H i i l lガンダムのパイロット、クガヤ・アルファラが竜騎たちの仲間となった。

少女のような少年と大人風鳴弦十郎（かざなりげんじゅうろう）

ナハトとクガヤが新たに仲間に加わった後、更なる戦士が惑星イマガワに来ていた。

「こ、ここは何処かな…?」

『どうやら地球の何処かの荒地のようだが、違うようだ』

禍々しい人型形態のロボットに乗る少女、ではなく少年はコクピットの画面に映るイマガワの景色を見て、自分の知らぬ場所へ来た口にする。

これに男性の声、機体のAIであるのか、イマガワを解析してここが地球でないと直ぐに少年に伝える。かなり高度な知能を有したAIのようだ。

『センサーを張り巡らせる。何か近付いた時の為にな』

「うん、分かった」

そのAIの言葉を信じ、少年は周辺に機体のセンサーを張り巡らせ、自分を見付けて接近してくる物体を探知できるようにした。

数秒後、少年とAIのロボット、シユロウガに接近してくる物体をキヤッチする。何かセンサーに引つ掛かったのだ。

『センサーに反応だ。警戒しろ!』

「もう来た! 蛇へびが出るか、蛇じゃが出るか!」

『どちらも蛇だよ、有馬ありすまりや鞠也。この反応、明らかにこちらに敵意を持っている! 戦闘態勢を取れ! 来るぞっ!』

有馬鞠也と呼ばれる少年の放った言葉が間違っていると注意しつつ、AIは敵が戦闘態勢を取り、奇襲を仕掛けようとしていることを知らせた。

それを受けて有馬は即座に戦闘態勢を取り、スラスターを吹かせて横に移動し、敵の奇襲攻撃を躲した。

奇襲攻撃を行ったのはメカブーストであった。その恐竜に機械を融合させた姿を見た有馬は驚きの声を上げる。

「あ、あれは…!?!」

『メカブーストだな。まさかこんな異世界に居るとは。俺でも驚きだ』

シユロウガのAIはメカブーストを知っていた。交戦した経験があると言う事だ。これに有馬は驚きながらも、どうすれば良いかAIに問う。

「で、どうすれば良い?」

『メカブーストの装甲は分厚い。今、脆い所を探している。有馬はその間に生き延びろ』

「もう、速くしてよね!」

装甲の脆い場所を探るまで生き残れとAIは答えた。これに有馬は文句を言いながらも、メカブーストが振り下ろした尻尾を寸でのごで避け、次々と来る攻撃を躲し続ける。

シユロウガの機動力はゲッターロボ以上に異常であり、メカブーストの攻撃を容易く避けることが出来た。攻撃を躲し続ける中、AIはメカブーストの弱点を突き止めた。

『解析を完了した。弱点は背後だ。ラスター・エッジで牽制しろ!』

「うん!・ラスター・エッジ!!」

弱点を突き止めたAIより額の光線攻撃であるラスター・エッジによる牽制しろと命じられれば、有馬は応じて技名を叫びながら行つた。額から光線が放たれ、それを受けたメカブーストは怯んだ。その隙にAIは次なる指示を出す。

『今だ。背後に回り、秘剣デイスキャリバーを突き刺し、奴を穿て!』

「秘剣デイスキャリバー!」

その指示に応じ、有馬はシユロウガの右手に剣「デイスキャリバー」を召還し、凄まじい速さで怯んでいるメカブーストの背後に回り、剣先を弱点である部分に突き刺した。

「タアアア!」

そこから一気に切り込めば、メカブーストを両断する。両断されたメカブーストはシユロウガが離れた後に爆発した。

「やった!」

『いや、メカブーストはその一体だけじゃない。僕たちは絶望に好まれているようだね』

「うわっ！ いっぱい居る!？」

メカブーストを倒して喜ぶ有馬であったが、AIは既に多数のメカブーストに包囲されていることを知らせた。これに有馬は驚きの声を上げる中、何故か楽しそうなAIは対処するように告げる。

『驚いている暇は無い。さあ、共に抗おう！ この運命から!!』

「言われなくとも、やるよ!!」

そんなAIに、有馬は言われなくもこの包囲下に抗うと答え、デイスキャリバーを振るって体当たりを仕掛けて来たメカブーストを両断した。

一体、一体切り倒しても切りがないので、有馬はシユロウガのある武装を使用する。

その名もトラジック・ジェノサイダー。黒き獄鳥と呼ばれるカラスのような誘導兵器、魔法のような物体を全体に飛ばして攻撃する。全体攻撃用である。

「トラジック・ジェノサイダー!」

『さあ、舞えー！ 黒き獄鳥たちよ！ 機械の怪獣共を喰らえ!!』

有馬が技名を叫び、トラジック・ジェノサイダーを使用すれば、AIはシユロウガより放たれる複数の黒い鳥のような物体に、周辺のメカブーストを食らうように命じる。

そのAIの命じた通りに、黒い鳥のような物体は周辺のメカブーストを喰らった。黒い鳥のような物体に喰われたメカブーストは次々と撃破され、シユロウガの周辺では爆発の連鎖が巻き起こる。

『周辺の敵の掃討、いや、残りはあのメカブーストだけだ。見たところ、かなり大きいな。あれを使うか?』

「ランプリング・デイスキャリバーだね！ 最後はそれで決めよう！

アサキム!!」

『フツ、それも良いだろう！ では、行くか!』

最後に残った大型のメカブーストに対し、有馬が機体の必殺技を使うと口によれば、遂に名が判明したAIアサキムはそれに応えた。

必殺技はランプリング・デイスキャリバー。シユロウガはデイスキャリバーの刃で左手を切り、血液らしき液体を出している。そこから高速で移動し、メカブーストを目にも止まらぬ速さで切り裂き始める。

シユロウガはただ切り裂いているわけではない。切り裂きながらその軌跡で魔法陣を描いているのだ。

『ハハハッ！ アツハツハツハツ!!』

敵を切り刻む間、アサキムは笑っていた。やがて魔法陣が完成した後、シユロウガは敵を刻むのを止めて離れ、描いた魔法陣を起動させる。

「必殺、ランプリング・デイスキャリバー!!」

『君はもう死んでいる。いや、壊れているのが妥当かな?』

魔法陣が起動されれば、その魔法陣は爆発した。切り刻まれ、描かれた魔法陣で爆破されたメカブーストは跡形もなく消し飛ぶ。

「さあ、少し安全な場所に休憩…」

『いや、まだ来るようだ。それも新手だ。敵かどうか、会って見極めてみるのも一興だ』

「ええ…!?!」

全ての敵を倒したかと思って安堵する有馬に、アサキムは新手が迫っていることを知らせた。

これに有馬はまだ終わってないことに困惑する。そんな有馬のことなどお構いなしに、ライトン・ブラウナーが乗る黒鉄の城ことマジンガーZが上空より現れ、シユロウガの前に降り立つ。

「あ、あれって…?」

『マジンガーZだ。だが、形もやや違うし、七メートルほど大きくなっている。それに乗っているのは、兜甲児ではない』

現れたマジンガーZに、アサキムは直ぐに自分の記憶にないマジンガーZであるの見抜き、乗っているのも兜甲児でも無いと見抜いた。

偽物…では無く、オリジナルと同じ光子力で動くマジンガーZに乗るライトンは禍々しいロボットであるシユロウガに警戒しつつ、敵か味方か判断するために拡声器で問う。

『俺はライトン・イエーガー！ お前は敵か？ 味方か!? 敵なら、このマジンガーZのロケットパンチで吹き飛ばす!』

『斃すか? 今ならやれるぞ』

「いや、駄目だよ。それにせっかく味方になってくれそうじゃん。ここは、味方と答えるべきだね!」

『賢い選択だ。オリジナル程に無いにせよ、マジンガーZの戦闘力は高い。幾らこのシュロウガでも、一筋縄ではいかんだろう』

今ならやれると言うアサキムに対し、有馬はマジンガーZが敵意が無いので、ここは味方になるべきだと答えた。

先の問いはアサキムの試しであつたらしく、味方になると答えた有馬を褒め、もしも戦闘になつた場合、幾らシュロウガでもマジンガーZ相手では一筋縄じゃいかないと告げる。

アサキムと意見が一致したことで、有馬はマジンガーZのライトンに味方であると拡声器で告げる。それと同時に、映像通信を送つた。

「敵じゃないよ! この変な機械の怪獣たちに襲われてたんだ!」

『ん、女の子…か?』

拡声器で告げれば、ライトンはマジンガーZの拳を下ろした。それにアサキムが解析して送つた映像通信で、有馬の姿を見たライトンは呆気にとられる。そこに映っているのが少女であつたからだ。驚くライトンに、有馬は自己紹介を行う。

「あつ、ごめん。僕は男なんだ。名前は有馬鞠也。この機体はシュロウガで、搭載AIの名はアサキムだよ」

『トランスジェンダーだったのか。こちらも失礼した。俺はライトン・イエーガー、このマジンガーZのパイロットをしている』

自分が男で名前と機体名、それに搭載AIのアサキムを紹介すれば、ライトンは謝罪しつつ自分の名と機体名で返す。

お互いのある程度わかつたところで、ライトンは自分らの拠点に案内すると有馬とアサキムに告げた。

『ちよいと姿が悪魔みたいだが、こっちにも似たようなのが一体や二体も居る。味方になってくれるなら大歓迎だ。来てくれ!』

「うん! 久しぶりに美味しいご飯、食べれるかな?」

『連れ込まれて身包みを剥ぎ取らなければいいが』

「それを言わない！」

改めて仲間に入った有馬とアサキムは、ライトンのマジンガーZの後に続いた。

「(ハハ)は……」

有馬とアサキムのシユロウガの他に、惑星イマガワに転移した者も一人いた。

その男は赤髪で屈強な身体つきをしており、随分とラフな格好をしていた。何らかの攻撃を受け、イマガワに来たようだ。

「どうやら、随分と厄介な場所に来たようだな……」

男は冷静に周りを見て、ただならぬ状況であると秒単位で判断した。彼が言った通り、周りの状況は厄介極まりなかった。

そこは罪人たちを收容する施設であり、收容されていた囚人たちは怪獣や無人殺人兵器に虐殺されていた。この状況下でも、男は冷静である。似たような状況を幾度も経験している証拠だ。

そんな状況下にも関わらず、男は生真面目な顔で笑みを浮かべる。自分の思う通りの状況になったからだ。

「フツ、全風鳴弦十郎かぜなりげんじゅうろうに暴れると言わんばかりの状況じゃないか。偶然どころかご都合主義に等しくノイズも居ない！ なら、好き放題暴れるまでだア!!」

この状況下は、風鳴弦十郎にとって望んで居た通りの物であった。彼はS・O・N・Gソーンと呼ばれる組織の司令官であり、その屈強な身体と性格に似合う圧倒的な戦闘力を持っていたが、敵は通常攻撃が効かぬ物ばかりで、それに対処できる奏者と呼称される少女たちに戦闘を任せるしか無く、弦十郎は指揮所から彼女らをサポートに徹する。

敵が自分の戦えぬ敵で無ければ、現場に出たかったが、指揮系統の問題で前線に出られず、自身の中に眠る暴れたい願望をただ押し殺す状況が続いた。

だが、今は自分一人。頼れるのは己の拳と足、そして戦闘力、経験

のみ。まさに今の状況が弦十郎の望んでいた状況であった。

「オオリヤアアア!!」

地面を蹴り、高く飛翔して自分を殺そうとする殺人ドローンに向け、雄叫びと共に放った右拳を叩き付ける。拳を打ち込まれたドローンは一発で爆散し、周辺に残骸を巻き散らす。

一機のドローンを撃破したことで、周囲に居た怪獣や他のドローンは弦十郎の存在に気付き、突如となく現れた怪物級の男一人を殺そうと、殺到して向かってくる。

「フフツ、良いぞ！ あのカトンボ一匹では物足りなかったところだア！ もっと来いッ！ この俺をもっと暴れさせろオオオ!!」

自分を殺そうと殺到してくる怪獣やドローンに対し、弦十郎は笑みを浮かべながら突っ込んだ。

何も知らぬ者が見れば、弦十郎が直ぐに殺されると思うだろう。だが、弦十郎は雨あられのように放たれる銃弾の雨を高速で動きながら躲しつつ、目にも止まらぬ速さで接近して来たドローンを流れるように拳と蹴りで破壊。そこから怪獣に向けて左拳を叩き込み、そこから顎下に右拳によるアッパーを仕掛けて首を飛ばす。何と恐ろしい腕力だろう！

首をアッパーで吹き飛ばされた怪獣は地面に倒れるが、弦十郎が止まることなくドローンの大群を拳と蹴りだけで破壊し続ける。爆発の連鎖が巻き起こっていた。

「とあーっ！ フンツ!!」

直接ドローンに殴る蹴るのみならず、拳や足に纏った八卦による衝撃でドローンを破壊した。流石に怪獣は怯ませる程度だが、そんな物は弦十郎に何の問題にもならない。ただ怯んだ隙に、己の拳か蹴りを叩き込んで倒すだけだ。

「ウオーミングアップにはなったな。このまま終わって欲しくない気持ちもあるが」

弦十郎が思うがまま暴れ回った後、彼に襲い掛かった多数のドローンと複数の怪獣は全て倒されていた。

ドローンは拳や蹴り、八卦による衝撃波で原形を留めぬ程に破壊さ

れている。怪獣は頭を殴り潰されるか、首を蹴り飛ばされるか、身体に穴を開けられて死んでいる。何と恐ろしい男か！

息一つ切らさずに立つ弦十郎はズボンのポケットから取り出したハンカチで汗を拭い、準備運動になったと口にする。まだ暴れ足りないようで、次なる増援を期待していた気持ちも思わず口にしてしまう。

「っ!？」

「真剣白刃取りだとッ!？」

そんな弦十郎の背後より、現場に遅れて駆け付けた大剣スレイブを携えたシユンが奇襲攻撃を仕掛け、凄まじい速度で飛翔し、彼の脳天を叩き割るどころか破壊してしまうほどの鉄塊を恐ろしい速さで振り下ろした。

しかし！　あろうことか、弦十郎はシユンが抑え込めない僅かな殺気を感じ取り、それを寸でのところで気付き、真剣白刃取りで大剣の刃を受け止めたのだ。

斬撃まで防ぎ切れなかったが、弦十郎は額に傷がついて少し出血した程度だ。これにシユンは驚愕して驚きの声を上げ、直ぐに次なる攻撃を行うために弦十郎の顔面を蹴り付けた。大男の蹴りを受けた弦十郎が流石に怯み、大剣の刃を握っていた手を離す。

「フーン！」

「こいつ、ただの人間じゃねえ！」

「ここの連中は、挨拶代わりに殺しに来るのか!？」

怯んだ隙に弦十郎に大剣の二撃目を叩き込んだシユンであったが、彼はそれを躲し、顔面にカウンターの拳を叩き込んだ。

顔を殴られ、鼻血が噴き出たシユンであるが、直ぐに距離を取り、相手がただの人間でないと認識する。もともと、一人で多数のドローンと複数の怪獣を壊滅させる男などただの人間では無いが。

人の言葉を発しながらも、いきなり殺しに来たシユンに対し、弦十郎は挨拶代わりに殺しに来るのかと問う。

「挨拶代わりに殺しに来るだア？　あんな数のドローンを全部ぶっ壊し、拳句に四十はあろう複数の怪獣までぶっ殺す奴が人間じゃなくて

何だよ!？」

「それは奴らが全力で殺しに来て、こちらが応戦してきたまでだ!

それより俺は戦う気は無い! 俺の名は風鳴弦十郎! 詳しい経緯はそちらと和解してから話す!」

その問いに、自分が駆け付けた後にドローンと怪獣を全滅させた弦十郎を人間では無いとシユンは返した。これに弦十郎は殺しに掛かった連中に応戦したまでと答え、構えを解いて戦意がない事を伝えた。

これを騙し撃ちを企んでいると思つて警戒するシユンであるが、弦十郎はそんな卑劣な真似をする男ではない。シユンは弦十郎の目を見て、そのような男では無いとみる。そうと分かれば、シユンは大剣を背中のラックに戻し、弦十郎を迎え入れた。

「俺は汚い大人だが、あんたは良い大人なようだ。あんたに敬意を表し、迎え入れよう」

「感謝する。もつとも、騙し撃ちをするつもりなら、油断したところで一気に懐に飛び込み、首を仕込んだ刃物で掻き切っている所だ」

「だろいな。俺たちには手練れはもつと必要だ、特にあんた見てえなのはな。風鳴」

シユンが和解に応じたところで、弦十郎は応じてくれた彼に感謝の意を表明した。他にも自分のような者たちが居ると驚き、弦十郎はそれをシユンに問う。シユンもまたこの場で弦十郎を殺すことが出来るが、最初の奇襲攻撃を気付くほどだ。仕掛ければ気付かれ、逆に自分が殺されている事だろう。

それに今のシユンに弦十郎を殺す理由も無い。ここで彼と殺し合つても、お互いの不利益となるだけだ。

「俺たち? 他にもいるのか? 俺のような者たちが」

「ああ、居るとも。これから馬鹿でさえ組織と大戦おおいっせをやるつてのよ。それとあんた、暴れたりなさそうだな? 俺たちに着けば、もつと暴れられるぜ?」

これにシユンは居ると答えた後、弦十郎が暴れ足りないと見抜き、自分ら側に着けば思う通りに暴れられると告げた。

「デカイ組織との戦争か。フン、ならば全て倒してしまつて構わんだらう？」

「デカイ口を叩くな。後悔すんなよ」

その誘いに、弦十郎は笑みを浮かべた。自分が思うがままに好き放題に暴れられるからだ。願望が叶うと思ひ、弦十郎はシユンの一団に加わつた。

自分の世界より百倍以上も物騒ではあるが、自分の思い通りになる世界だ。だが、弦十郎には元の世界に帰る気持ちは残してある。彼の世界には、まだ自分が面倒を見なければならぬ者たちが居るのだから。

今は帰る手段が見付かるまで、弦十郎はシユンたちが戦おうとする組織相手に戦争に興じるつもりであつた。

ロボットに変形する戦艦とコーウエン&ステイン
ガー

『重粒子ミサイル、発射五分前』

惑星イマガワに向け、重粒子ミサイルと呼ばれる惑星全土を破壊し
なければならないミサイルが発射されようとしていた。発射基地がある場所
はイマガワより少し離れた距離ある惑星カザナリ！

そこには銀河統一政府の軍事拠点が設けられており、発射基地もそ
の一部であった。

「最初からこうすれば良かったのだ。オワコンの連中め、手こずり
おって」

「もつとも、オワコンには重粒子ミサイルなど配備されておりません
がな」

「ああ、そうだったな」

基地司令官は最初からイマガワを重粒子ミサイルで吹き飛ばして
しまえば良かったと口にすれば、副官はそれに同意する。

だが、オワコンにはこの基地に配備されている重粒子ミサイルは配
備されていないことを告げれば、司令官は笑みを浮かべながら答える。
ミサイルが五分後に発射されるアナウンスが基地中に鳴り響く
中、基地のミサイル発射の管制室に人とは思えない風貌の二人の男が
訪れる。

「イマガワに重粒子ミサイルを発射するのかね？」

「おつ、これはコーウエン博士にステインガー博士。あと四分三十秒
後にミサイルを発射いたします」

金髪で大柄のサングラスを掛けたコーウエンと呼ばれる学者が問
えば、司令官は敬語でミサイルを発射すると答える。これに青白い顔
をした科学者は不本意であると告げた。

「イマガワを吹き飛ばす気かね？ あそこにはまだ進化を促すエネルギー
ギー体であるゲッター線があると言うのに。残念極まりないね、コー
ウエン君」

「ああ、オワコンの鎮守府のように討伐艦隊を派遣すれば良いのに。ねえ、ステインガー君」

「はあ、風鳴総司令官からの指示でありますので」

イマガワに向けてミサイルを発射することは、コーウエンにも大変不本意であるらしく、その不満を司令官に向けて口にする。

彼らはイマガワにゲッター線があると知っているからだ。例えこの世界を支配者たる者の命令でも、ゲッター線があるイマガワを潰すなど許すことは出来ない。

「そうか。風鳴総司令官の命令ならば仕方ないね。ステインガー君」

「うん、コーウエン君。そろそろ潮時だね」

総司令官の命令ならば仕方ないと言うコーウエンであったが、彼はその気など無い。ステインガーも同様である。

そろそろ潮時とステインガーが発したことに、基地司令官はどういう意味なのか理解できなかった。答えは直ぐに分かった。

「では、イマガワへ行くとしよう。ステインガー君」

「ちょうど良い乗り物が近くにあるね。コーウエン君」

「はっ？ 一体何を仰って…」

急にイマガワへ行くといい出す両学者に対し、司令官は問い直そうとした。だが、既にコーウエンとステインガーは行動を開始していた。

「ぬえ!？」

「っ!？ な、なんだ!？」

突如、両学者の近くにいた兵士が突然現れた触手によって殺害された。

その触手を出しているのは、コーウエンとステインガーであった。二人の足元から触手、それもインベーターの触手が伸びている。

基地司令官は驚き、思わず目前に居る人間のふりをしたインベーターに向けて素早く抜いた拳銃の銃口を向ける。他の兵士たちも同様だ。コーウエンとステインガーに銃口を向けていた。

「き、貴様ら! 何者だ!？」

「私たちか？ 私たちは常に進化し続ける存在」

「ある世界では僕たちのことをこう言う、インベーターと！」

「い、インベーターだどっ!？」

基地司令官の問いに、コーウエンとステインガーは自らの正体を明かした。それと同時に、人類は進化するに値しない生命体と認定する。

「全く、人間と言う輩は直ぐに銃を突きつける事しかせん」

「そんな事だからゲッター線の何たるかも分らぬ物よ…そう、進化！」
「進化！」

「な、何を言っている貴様ら!？」

急に人類は進化に値しないと言うコーウエンとステインガーに、混乱した基地司令官とその部下たちは一斉に銃を撃ち始める。

並の人間ならハチの巣になっっている所だが、コーウエンとステインガーはインベーターだ。ただのピストル弾とライフル弾で殺せるはずが無い。

全弾を撃ち尽くした司令官と兵士たちが即座に再装填を終えて再び構えた後、コーウエンとステインガーは何事も無かったように立っている。二人が受けた銃弾は全て床に転がっている。

「じゅ、銃が…!？」

「我々はゲッター線と共に生きる者…!」

「そのようなちやちな銃弾など我々には通用せん！」

銃弾が効かないことに司令官たちが驚愕する中、コーウエンとステインガーは自分の身体から触手を勢いよく飛ばし、司令官と兵士たちを殺害して管制室を血の海に変えた。

「さて、邪魔者が来る前に、イマガワへ行くのでしょうか。ステインガー君」

「うん、コーウエン君。近くにちょうどいい乗り物があるしね！」

「惑星イマガワにツ!!」

管制室を制圧した二人は決戦場となった惑星イマガワへと行くべく、イマガワへ向けて発射される重粒子ミサイルを見て叫んだ。

そして、コーウエンとステインガーはありえないことに、発射されるミサイルに張り付き、ミサイルと共に惑星イマガワへと向かった。

他にも重粒子ミサイルは発射されようとしていたが、行く前に両名は自分たちが乗る以外のミサイルの標的を変えていたらしく、同時に発射された六発の内、五発はカザナリの軍事施設へと向かっていく。追撃の手を封じるために、コーウエンとステインガーは標的を変えていたのだ。

かくして、コーウエンとステインガーが乗った重粒子ミサイルは、惑星イマガワへと飛んでいった。

重粒子ミサイルが撃ち込まれている惑星イマガワでは、衛星軌道上にてガイゾックと何処からともなく現れた宇宙戦艦と交戦していた！

「な、なんじゃあのでかい戦艦は!? は、速く宇宙の藻屑にしてしまうのだ!!」

「御意、ブッチャー! 周辺の部隊を呼び戻して集中砲火致します!」
移動要塞バンドックの玉座に座るブッチャーは、部下に命じて直ちに自分らガイゾックを攻撃する宇宙戦艦に集中攻撃を命じた。

これに応じ、ありとあらゆる方向からメカブーストが集結し、宇宙戦艦に集中攻撃を始める。だが、宇宙戦艦は大多数の集中砲火にも関わらず、傷一つ付いていない!

「こ、攻撃が通じておりません!」

「な、なんちゆう装甲じゃ!? ええい、ガイゾックに改造したあの男も出せー!」

「あ、あいつを直ぐに出すんですか!? 速過ぎるのでは!」

「良いから出せッ! あいつならあの馬鹿硬い戦艦をぶち壊せるはずじゃー!」

部下のその報告に、ブッチャーはあの男の出撃を命じた。

それに応じ、ガイゾックに改造された男、その名もミケロ・チャリオットは、同じく改造されたネロスガンダム、可変系型のモビルファイターであるガンダムヘブンズソードを駆って出撃の体勢を取る。

「ミケロ・チャリオット、ガンダムヘブンズソード…! 行くぜえええ!!」

ガイゾックに改造され、更に人格が歪んだミケロはバンドックよりガンダムヘブンスソードを駆って勢いよく出撃した。

そのまま人型形態から飛行形態である鳥を模した形態に変形し、多数のメカブーストを対空砲火やミサイル、艦砲で撃破する宇宙戦艦に接近する。

『あの戦艦を沈めるのじゃ！ ミケロ！』

「イツヒヒヒ！ 良いぜえ！ 丸焼きにしてやるぜえ！ ウィンドファイヤー!!」

ブツチャーの指示に応じ、ミケロはガンダムヘブンスソードの大きな両翼から火炎の渦を撃ちだした。だが、甲板には焦げ跡すら残らない。

「な、何イーツ!? 火が効かねえ!？」

効かないことに驚くミケロであるが、ヘブンスソードにはまだ武器がある。

「ヘブンスダート!!」

次に鳥の羽を模した実体刃による攻撃を仕掛けるが、装甲に弾かれるばかりだ。

「クソオ、だったら強風でぶん回してやるぜえ！ ヘブンストルネード!!」

火や刃で駄目なら風と思ったのか、ミケロはヘブンスソードの両翼を大きく羽ばたかせ、突風攻撃を仕掛けた。流石に少々敵戦艦は動いたが、スラスターを吹かせてバランスを保ち、艦砲による反撃を行う。

「畜生！ 接近して直接ぶつ叩いてやるぜえ！」

通常攻撃で沈まない敵戦艦に苛立ったミケロは、艦砲射撃を躲しながら高速で敵戦艦に接近する。

凄まじい弾幕であるが、モビルアーマー形態となったガンダムヘブンスソードには全く当たらない。対空弾幕すらすり抜け、敵戦艦に接近すれば、機体の必殺技を叩き込む。

「沈めエエエー！ ハイパー虹色の脚スペシナルウウウ!!」

必殺技を叫びながらガンダムヘブンスソードの右足による飛び蹴りを行うミケロであったが、戦艦には通じなかった。

「き、効かねえ!? なんで俺のハイパー虹色の脚スペシャルが効かねえ!?!」

自身の渾身の必殺技が効かないことに、ミケロは激しく動揺する。そんなミケロに更なる追い打ちを掛けるように、敵戦艦は変形を始めた。

「て、敵戦艦が変形を始めました!」

「せ、戦艦が変形い!? どういう事じゃ!? 何が起こっておる!?!」

戦艦が変形すると言う報告に、ミケロと同様にブッチャーも動揺する。この隙に戦艦はロボット形態へと変形を終え、人型形態となった姿をブッチャーやミケロたちに晒す。

その戦艦からロボットへと変形した姿の名はヴァルザカード!

史上最強の家の異名を持つヴァルザカードの二台目である。オリジナルと同等の性能を持っているが、一代目に乗っていたアーディガン家は乗っていない。乗っているのは、セカンドの保全と制御を担っている人工AI群を統括して操作している人型ロボットのスキア。外見はアーディガン家の次女であるアカネ・ガーディガンだ。

「て、敵艦、ロボットに変形しました!」

「せ、戦艦がロボットに変形しおった!? それが何だと言うのじゃ!? ぶっ壊してしまえ!!」

「ぎよ、御意、ブッチャー!」

ヴァルザカード・セカンドに対し、ブッチャーは配下の者たちに向けて破壊命令を出す。それに応じ、多数のメカブリストが一斉攻撃を始め、ミケロのガンダムヘブンスソードも再び必殺のハイパー虹色の脚スペシャルを繰り出す。

「もう一度だア! ハイパー虹色の脚スペシャルウウ! これで終いだアアア!!」

ロボット形態になれば必殺技が通じると思っていたミケロであるが、戦艦形態と同様にヴァルザカードには通じず、そのまま巨大な右手に掴まれ、握り潰され始める。

「ぎ、ぎにやアアア!? お、俺は!? 俺は死にたくねえ! 死にたくねえええ!! アアアア!!」

握り潰されて押し潰されようとする中、ミケロは死にたくないと呼んだが、ヴァルザカードに乗っているスキアには聞こえず、そのまま握り潰された。

右手の中で押し潰されたガンダムヘブンズソードが爆発すれば、ヴァルザカードは周りのメカブーストを一掃すべく、全体攻撃を行う。

それはハイプロトンスマッシャー。ヴァルザカードの臍から発射するプロトンキャノンである。臍から発射された強大なエネルギー砲により、周囲のメカブーストは一掃された！

「め、メカブースト全滅です！」

「なんと無茶苦茶な!? バンドックの全火力をあのロボットに集中させるのだ！ それともつとメカブーストを出すのじゃ!!」

全滅の報を聞いたブッチャーは、バンドックのありったけの火力の集中と温存しているメカブースト全機を出すように叫んだ。それに応じてバンドックの一斉射と温存してあったメカブーストが次々と発艦していくのだが、ヴァルザカードに通じなかった。

この大規模な総力戦にたった一機で挑むヴァルザカードは右手に巨大なエネルギーソードを召還し、突撃を仕掛ける多数のメカブーストの大部分を一振りで切り裂いた。ヴァルザカードが二撃目を振るった後、メカブーストは全滅していた。

「第二陣、ぜ、全滅です…!!」

「キエエエ!? 化け物過ぎるぞお!」

メカブースト全滅に、ブッチャーは座っていた玉座から転げ落ちた。

そんなブッチャーにとどめを刺そうと、ヴァルザカードは右手に握っていたエネルギーソードを弓に変形させ、左手に矢を引いてそれをバンドックに向けて放とうとする。

「こ、こちらを狙っております！」

「逃げるのだ！ 速く逃げるのだア!!」

「ま、間に合いません！」

こちらに矢を放とうとするヴァルザカードに、ブッチャーは逃げる

ように叫ぶが、間に合わなかった。

ヴァルザカードは逃げようとするバンドックに向け、エネルギー体に結晶させた矢を発射。その矢はバンドックを貫通し、ブツチャーの元まで届いた。

「や、やだあああ！ のはあああああつ!!」

矢はブツチャーの身体を容易く引き裂き、周りの部下たちもエネルギーに吞まれてバンドックと共に消え去った。

あっさりとブツチャーはやられてしまったが、意外にも呆気なさ過ぎる。だが、これで終わったわけではない。倒されてしまったはずの彼が、ここで簡単に終わるはずが無いのだ。

ガイゾックを壊滅させたヴァルザカードは眼下に見える惑星イマガワに視線を向け、戦艦形態へと変形してから降下を開始した。

そこに居るシュン達や竜騎を始めとするゲッターチームと合流するため。

そして、重粒子ミサイルに乗ってコーウエンとステインガームもイマガワへと向かっていた！

流竜馬対流竜馬！

ヴアルザカード・セカンドが惑星イマガワに降下し、シユンや竜騎たちを驚かせている頃、多数のインベーターが新たにイマガワに現れたゲッターロボに蹴散らされていた！

「な、なんだあのゲッターは?! あ、あいつは…?!」

寄せ集めゲッターに乗り、現場へ急行していた流竜馬は、インベーターを一掃するゲッターロボを見て驚愕する。

その姿形、自分がこの終わりの見えないゲッター線との戦いに挑む際に見たゲッターに似ているのだ。それを見た竜馬は、直接自分を殺しに来たか、取り込もうとしに来たと判断した。

「直接この俺を殺しに来たか、取り込むつもりか？ へっ、お断りだぜ！ ここに来たことを後悔させてやるッ!!」

インベーターやメタルビーストの大群を容易く全滅させたゲッターロボ、その名も聖ゲッター1に対し、竜馬は恐れることなく挑んだ。

「ゲッター、トマホオイクウ！ ゲッターアアアビイイム！ 死ねえ!!」

ゲッタートマホークを取り、果敢にゲッタービームを撃ちながらゲッターロボに立ち向かう。

向かってくる寄せ集めゲッターに対し、謎のゲッターロボもゲッタービームによる反撃を行うが、竜馬は怯まずに突っ込んでくる。やがてゲッタートマホークの間合いに入れば、かなり大きめである謎のゲッターロボに向け、その刃を振り下ろした。

「ちっ、そっちもゲッタートマホークか！」

寄せ集めゲッターのゲッタートマホークに対し、謎のゲッターロボもゲッタートマホークで対抗して来た。これに竜馬は何度も叩き付けるが、謎のゲッターロボはその全てを防ぎ、時折り反撃も行う。る。

一度、竜馬のゲッターを吹き飛ばした後、ビームレザーによる追撃をしてくる。これに竜馬は躲し切れないと判断し、両腕で防御態勢を

取って防ぎ切る。

「野郎、ビームを滅多やたらに撃ちまくりやがって！ 倍返しだ！

ゲッターアビイイム!!」

謎のゲッターロボのビームの乱射に怒りを燃やす竜馬は、倍返しにゲッタービームを行う。それに対し、謎のゲッターロボも同じ技で応戦した。

「サル真似をしやがって！ どっちが上かの勝負ってか？ この俺が勝つツ！ 絶対だアアア!!」

互いのゲッターのゲッタービームがぶつかり、つばぜり合いに発展する中、これに竜馬は操縦桿を強く押し込んでゲッタービームのエネルギーを上げる。

だが、出力もパワー、全てにおいて勝るのは謎のゲッターロボだ。竜馬の寄せ集めゲッターはパワー負けし、吹き飛ばされた。

「ぐあー！ 畜生、向こうが強えてわけか！ んなことで、この流竜馬様がテメエに背中向けて、尻尾巻いて逃げるとでも思ってたのか!？」
全てにおいて勝るのは目の前のゲッターロボであろう。だが、その程度で逃げる竜馬では無い。

ゲッター線に愛されているとも言えるこの獣のような男は敵に背を向けて逃げるの何よりも嫌う。例え相手が叶わぬ相手だとしても、自分が死ぬことになろうとも、彼は目の前の強大な敵を相手にしようと思わず、ただ我武者羅に立ち向かう。

「ゲッタートマホーク！ ブウウメエエランツ!!」

直ぐに機体を立ち上がらせ、竜馬はゲッタートマホークを取り出し、ブーメランのように追撃を掛けようとするゲッターロボに向けて投げ付けた。

投げられたゲッタートマホークはブーメランのように謎のゲッターロボに向けて飛んでいくが、そんな物が通じるはずがなく、軽く弾かれた。お返しと言わんばかりに、ゲッターロボは同じくゲッタートマホークブーメランで反撃を行う。

「真似すんじゃねえ!!」

自分の技を使う謎のゲッターロボに怒りを覚えた竜馬は両腕から

マシンガンを取り出し、飛んでくるゲッタートマホークを迎撃する。そこからマシンガンを戻し、再びゲッタービームを撃とうとする謎のゲッターロボに突っ込み、ゲッターの拳を打ち込む。凄まじい速さであり、これに謎のゲッターロボは顔面を殴られた。殴られた謎のゲッターロボは、腹からゲッタービームを撃ちながら転倒した。

その際、竜馬は謎のゲッターロボの口にあるコクピットに映る人影を見て驚愕する。

「なっ!?、あいつは…俺!?!」

一瞬の出来事であるが、竜馬ははつきりとその人影が自分であると気付いた。

「ゲッターに魅入れられちゃった俺の成れの果てって事か? だったら俺をぶっ殺すまでだ!!」

相手が自分であろうと、竜馬は倒す決心をして追撃を入れようとする。

だが、相手もただ殴られるばかりではない。反撃の蹴りを竜馬のゲッターの脇腹に入れ込み、吹き飛ばす。そこからゲッタービームによる反撃を行おうとするが、竜馬も直ぐに機体を起き上がらせ、躲しながら謎のゲッターロボに接近し、飛び掛かって転倒させてから馬乗りになって殴り始める。

何度も殴っていく中、敵の反撃が全く来なくなった。そんな物は竜馬には関係ない。敵を倒すまで殴り続けるまでだ、

『ま、待て! 異世界の私よ! 私は正気に戻った!!』

「なっ、俺!?! 俺の声だと!? てめえ、どういうつもりだ!?!」

顔を何度も殴っていけば、謎のゲッターロボに乗る流竜馬が折れたのか、それとも正気に戻ったのか、竜馬に止めると拡声器で伝えて来た。

これに竜馬は驚き、即座に距離を取ってゲッタービームを撃つ用意をする。謎のゲッターロボに乗る流竜馬は敵意がない事を伝え、戦闘態勢を解いた。

『どうやら、異世界の私である君に殴られたショックで戻ったようだ。しかし、度が過ぎるぞ』

「てめえこそ、本当に俺か？俺ならもつと抵抗してるぜ。お互いぶつ倒れるまでな！」

『そこまで行けば、お互い死んでいる所だが…』

謎のゲッターロボ、その名も聖ゲッターロボに乗る竜馬は、別の世界の自分が好戦的な馬鹿なことには頭を抱えた。

そんな寄せ集めゲッターに乗る竜馬は、別世界の自分にこの世界に来た理由を問う。

「でっ、違う世界の俺が何の用だ？ゲッターにでも取り込むか？」

『そうではない。私はゲッター線に呑まれ、ゲッター線の意思のままに数多の世界を転移し、暴走していた。その私を正気に戻したのが君だ。異世界の私よ』

「なるほど。ゲッターに乗っ取られて、色んな所を暴れ回って俺にぶん殴られて正気に戻ったって事か。別の世界の俺は軟な奴だなア。まあ、俺も人のことは言えねえが」

来た理由を問えば、聖ゲッターに乗る竜馬はゲッター線に呑まれて暴走しており、異世界の自分である過激な竜馬に殴られて正気に戻ったと答えた。

異世界の自分を軟だと言う竜馬であるが、自分も同じくゲッター線に呑まれ掛け、暴走していたこともあるので、人のことは言えない。

互いに打ち解けた竜馬と異世界の竜馬であったが、新たな脅威がこの惑星イマガワに迫っていた。それは重粒子ミサイルに乗るコーウエンとステインガーである！

その襲来は、イマガワの地に降り立っていたヴァルザガード・セカンドに乗り込んでいたシュンの通信で二人の竜馬に知らされた。

『おいバカ、惑星に核ミサイルだか重粒子ミサイルが接近中だ！竜騎や他の連中はインベーター共の退治で間に合わねえ。行けるか？』

「瀬戸の野郎か。イマガワにミサイルだア？ テメエの居る戦艦でやれねえのか？」

『こつちも化け物退治で忙しいんだ。手の空いてるのはお前だけだぜ。行けないのなら、手の空いた奴を…』

ヴァルザガードに乗るシュンより通信で重粒子ミサイルの接近を

知らされた竜馬はそちらで対処できないのかと問えば、こちらも手を離せない状況になっていると答える。その後、手の空いているのは竜馬だけだと言え、聖ゲッターロボに乗る竜馬が代わりに行くと言いつつ、

『私が行こう。誘導してくれ』

『っ!? りよ、竜馬が二人いるぞ!?』

突如となく現れたもう一人の竜馬にシユンは驚きの声を上げる。これに寄せ集めゲッターの竜馬が事情を簡単に説明した。

「別世界の俺って事だ。ゲッターに吞まれて暴走している所を、この俺がぶん殴って正気に戻してやったのよ」

『事情はだいたい察した。そいつと取っ組み合った後に大丈夫か?』

『ゲッター線は無敵だ。それにこのゲッターは常に進化している。接近中の重粒子ミサイル程度、どうと言うことは無い。大船に乗ったつもりでいてくれ』

この竜馬の説明に大体は察したシユンは、乱暴者と戦った後に行けるのかと問う。これに聖ゲッターの竜馬は問題ないと答え、重粒子ミサイルの迎撃に向かった。

「別の俺が行くなら、この俺も…!? クソっ、もう限界か…!」

後に続こうとした乱暴者の竜馬であるが、聖ゲッターとの戦いで自分のゲッターロボは限界であった。仕方なく、この場は異世界より来た聖ゲッターに乗る竜馬に譲る。

「ちっ、この場はテメエに譲るよ。俺たちの仲間になるって言う証明が必要だしな」

凄まじい速さで大気圏を突破する聖ゲッターを見ていた竜馬は、あの聖ゲッターの竜馬に自分たちに味方であることを証明する機会であると譲った。

大気圏を突破し、宇宙へと出た聖ゲッターの竜馬は、惑星イマガワに接近中の重粒子ミサイルをレーダーで確認した。

「あれが接近中のミサイルか。この距離ならゲッタービーム、否、ゲッタートマホークで迎撃する! ゲッタートマホーク!」

ミサイルの位置を確認した竜馬は聖ゲッターロボのゲッタートマホークを展開させ、凄まじい速度で重粒子ミサイルに接近した。

そのまま振り下ろし、重粒子ミサイルを切断しようとしたが、そのミサイルにはコーウエンとステインガーが乗っており、振り下ろされたゲッタートマホークの刃を二人同時に受け止める。

「何っ!？」

「まさか真ゲッタードラゴン、否、聖ゲッターと言うべきか。ここに来ていたとは…!」

「イマガワに宿るゲッター線に導かれて来たんだね！ 遠路遙々来た甲斐があった!」

ゲッタートマホークの刃を受け止めたコーウエンとステインガーに、竜馬は驚きの声を上げる。

聖ゲッターの到来に、コーウエンとステインガーは大いに喜び、直ぐに体内のインベーターを解放して張り付き、ゲッター線を吸い上げようとする。

「取り付いてゲッター線を吸収するつもりか!？」

「以下にも！ 聖ゲッターより溢れ出るこの無限のゲッター線、まさしく我らが求めていた物ッ!」

「この聖ゲッターを物にすれば、我らは無限に進化し続けることが出来る！ そして貴様、異界より来訪した…!」

「流竜馬！ 貴様も我らと同化し、進化するのだ!」

「ゲッター線と共に…!」

「進化!」

聖ゲッターに取り付いたコーウエンとステインガーは、それに乗る流竜馬に自分らと共に同化して進化しようとする誘いが、インベーターを敵視するゲッター線に選ばれし者はそれを断る。

「答えはノーだ！ 我らゲッターは貴様たちインベーターを受け入れない！ この世界、否、全てに存在するインベーターを排除する!!」

「愚かな！ 我らの永遠なる進化を断るとは!」

「我らインベーターこそ、ゲッターに選ばれし者なのだ!」

取り込もうとするインベーターを、竜馬はゲッター線の力を借りて

聖ゲッターより吹き飛ばした。吹き飛ばされたコーウエンとステインガーは、自分らの勧誘を蹴った竜馬に怒りを燃やし、周辺のインベーターを集め、総攻撃を仕掛ける。ミサイルやレーザーによる攻撃だ。この弾幕に対し、レーザーを躲しつつ、聖ゲッターはゲッタービームによる迎撃を行う。

聖ゲッターに向かった全ての攻撃が爆発していく中、多数の飛行型や手裏剣型のインベーターが一斉にゲッターロボに突撃する。この多数のインベーターに、聖ゲッターは両腕よりゲッターミサイルレーザーマシンガンを展開させ、それを乱射して一掃する。

「凄まじい…… 何という強さ!」

「あれがゲッター線で更なる進化したゲッタードラゴンか!」

「是非とも欲しい……! だが!」

「今は相手をしている時ではない!」

周辺のインベーターに聖ゲッターにぶつけていたコーウエンとステインガーは重粒子ミサイルに戻り、目的の為に惑星イマガワへと目指していた。

「囧か! 逃がさんぞ!!」

ある程度一掃した後、竜馬は気づき、接近してくるインベーターを片付けながら重粒子ミサイルを追撃する。

自分らを追って来る聖ゲッターの竜馬に対し、コーウエンとステインガーはこの世界の人間の為になぜ無関係なのに助けるのかと問う。

「何故だ、なぜお前はこの進化に値せぬ人類の為に戦う?」

「そうだ。この世界の人類はゲッターを認めず、排除せんとこのミサイルを撃ち込んだのだぞ」

「なぜ助けようとする?」

進化に値せず、ましてやゲッターを排除せんと攻撃してくる人類の為になぜ戦うのかと問うコーウエンとステインガーに、無関係である聖ゲッターの竜馬はゲッター線に選ばれたからだ、ゲッタートマホークを投げながら答える。

「ゲッター線に寄生するお前にはそう見えるだろう。だが、この人類もゲッター線に選ばれている! そう、惑星イマガワに居る者たちが

!!

ゲッタートマホークと共に放たれた答えに、コーウエンとステインガーは嘲笑う。

「フフフ、愚かなー!」

「後悔する事だろう!」

「この世界の人類の愚かさに!」

「その真実をいずれ知ることになるう!」

放たれたゲッタートマホークは重粒子ミサイルに命中した。巻き起こる爆発の前にコーウエンとステインガーは重粒子ミサイルから降り、聖ゲッターの竜馬に向けて人類は救う価値が無いことを告げながら飛び出す。やがて爆発が起きれば、両名はその衝撃に乗ってイマガワへと飛んでいった。

飛んでいく方向で竜馬はコーウエンとステインガーがイマガワへと向かうため、重粒子ミサイルの爆発を利用したと見抜いた。

「奴ら、この為にミサイルを使ったのか!」

直ぐに追ってイマガワへと飛んでいくコーウエンとステインガーを排除しようとするが、両名が呼び寄せた多数のインベーターに阻まれた。ゲッタービームを放つても、インベーターが盾になってコーウエンとステインガーには届かない。

「あの二人、イマガワに行つて何をやる気だ? あそこにはゲッター線が湧いている。良からぬことを考えているな…!」

周辺の邪魔なインベーターを排除する頃にはコーウエンとステインガーを見失った後であり、竜馬は嫌な予感を覚え、それを知らせるためにイマガワへと戻った。

後日、聖ゲッターの竜馬の知らせで、シユンたちはイマガワ中を探したが、コーウエンとステインガーは居なかった。そればかりか、痕跡すらなかった。

奇妙なことに、その日は怪獣やインベーター、イマガワの掃除を命じられた傭兵、刺客たちの襲撃も無く、イマガワは平穏を保っていた。これをシユンや竜騎たちは機体の整備と自身の休息に使い、いつ来る

かもしれない敵の襲撃に備えた。

だが、襲撃は気味が悪いように無いので、互いを知るために自己紹介を済ませ、何も無い一日を休息で過ごした。

皆がこれを嵐の前の静けさと捉えていた。予想通りになるはずが無いと思っていたが、日が明けてから自分たちの予想通りになつてしまふ。

それは、風鳴弦十郎にとって思わぬ人物から布告から始まった。

『惑星イマガワに居る囚人に看守たちよ。よくぞ地獄より生き延びたな……!』

「まさか……! 風鳴訃堂、だと……ツ?!」

かざなりふどう

ヴァルザガード・セカンドの艦橋内の映像通信に映る人物は、弦十郎が良く知る人物、否、父親である風鳴訃堂であった。

その映像を見た弦十郎は思わず驚きの声を上げる。自分の居る世界では既に故人な父が、この世界の人類の首都から生きて放送をしているのだ。驚かすにはいられない。

『わしの名は風鳴訃堂! 銀河日ノ丸帝国を影の守護者よ!』

「知り合いか?」

「知り合いも何も、俺の実父で俺の世界では既に故人だ! 何故この世界に居る!?!」

「まさか日ノ丸帝国の陰で支配する人物が、風鳴さんの父親だとは……!?!」

映像に映る人物を見て驚く弦十郎に、シユンは知り合いなのかと聞えば、彼は既に故人であり、この世界で生きていることに驚いている。

竜騎やレン、ドソクを始めとするこの世界の者たちは訃堂が影の支配者であることに驚き、その存在を知って初めて驚きの声を上げる。ヴァルザガードのAIであるスキアは、全域放送であることを伝える。

「この世界を支配する星系国家、銀河日ノ丸帝国の支配地域すべてに放映されているようです」

「全国放送だど? あのジジイ、何を企んでやがる」

「おいおい、ここの囚人や看守共に、俺たちを殺させるつもりじゃねえ

「だろうな？」

解析したスキアの報告に、乱暴者の竜馬は腕を組みながら映像に映る討堂を睨みつけながら言えば、シユンは最悪の場合であるイマガワで生き残っている囚人や看守たちに自分らを攻撃させるのではないかと口にする。

このシユンの言ったことが、そのまま映像に映る討堂より発せられようとは誰もが思わなかっただろう。

『イマガワの者共よ、生き延びたいか？ ならば、これより映像に映る子どもを討つが良い！ この者たちを討てば、貴様らをイマガワより出してやろうぞ！』

『っ!?!』

映像に映ったのは、シユンや竜騎たちのこの世界の者たち、竜馬を始めとする異世界の者たちが映った画像が流された。

それを見た一同は驚愕し、直ぐに戦闘態勢を取った。

第四の壁を破壊する男、デッドプール！

惑星イマガワ中に放映された映像に映る風鳴訃堂かざなりふどうによる布告で、竜騎、シユン、竜馬たちを殺せば自らの生命が助かると判断した囚人や看守たちが一斉にヴァルザガード・セカンドに襲い掛かった。

時を同じくして怪獣の襲撃も再開したが、それは赤い怪獣ハンターであるレッドマンが直ぐに対処し、逃げた怪獣を追っていた。

「ヤーッー！」

逃走する怪獣に対し、レッドマンは全力で追う。怪獣はただ逃走しているのではない、仲間が居る方へと逃げ、レッドマンを数の多さで倒そうと言うのだ。

その罠にハマったレッドマンであるが、彼は幾度となく複数の怪獣との戦闘経験がある。そんな物を知った事かと言わんばかりに、両腕にレッドナイフを召還し、数の多さを活かして襲い掛かる怪獣に挑む。

「レッドナイフ！」

飛び掛かる一体の怪獣に対し、レッドマンも飛んで二振りのレッドナイフで胴体を切って切断する。

胴体を切り裂かれた怪獣の屍が地面に転がる中、降り立つ直前で二体の怪獣を斬り付け、更に両手に握る二振りのレッドナイフを間合いに居ない怪獣に投げ付けた。

投げ付けられたレッドナイフが突き刺さった怪獣は絶命する。それをコンマ単位でレッドチェックで確認したレッドマンは、レッドサンダーを放つ。

「レッドサンダーー！」

放たれたレッドサンダーで二体の怪獣が爆発四散すれば、頭部の黄色のランプよりレッドレーザー、両目よりレッドショット光線を、一体の怪獣に集中して爆散させる。

怪獣もただレッドマンに殺されるばかりではない。四方八方より襲い掛かるが、レッドマンは分身の術を使ってそれを躲した。その分身は実体であり、襲い掛かる怪獣と戦い始める。

「レッドアロー！」

襲い掛かる複数の怪獣に二体のレッドマンが死闘を繰り広げる中、二体の右手に同時にレッドアローが召喚された。それを並んだ怪獣に向け、レッドマンは二体同時に投げる。

右と左手の怪獣二体同時に串刺しにされており、串刺しにされた四体は倒れる。だが、怪獣は続々と集まって来る。これにレッドマンは更に実体を持つ分身を増やし、最大で五体になったレッドマンは、襲い掛かる多数の怪獣に対して各々が武器を持って挑む。

「レッドナイフ！」

「レッドアロー！」

「レッドショット！」

「レッドサンダー！」

「レッドファイヤー！」

三体が攻撃を行えば、その射線に居た怪獣は爆散する。それからレッドナイフやレッドアローを召還して、怪獣に向かって退治を始める。

その近くで、クガヤ・アルファラが乗るヒルガンダムが怪獣と交戦していた。

「こいつ等、なんであの放送の後から出て来たんだ!？」

怪獣たちは訃堂の放送の後から出て来たようで、クガヤはそれに驚きながらもビームライフルで倒し、左手に持つハイパーバズーカで吹き飛ばす。

バズーカの残弾が切れれば、近付いてきた怪獣に弾切れのバズーカを投げ付け、空いた左手でビームサーベルを抜き、バズーカを投げ付けて怯ませた怪獣を切り裂く。更に背後から迫る怪獣に振り向き、そのビームの刃を振り落として真っ二つにする。

「何だか分からんが、この場を凌ぐには怪獣を大群を何とかするしかないと言うことだ！」

キングジョーに乗るボウンはクガヤの疑問に、怪獣の大群を倒すほか無いと答えつつ、右腕のペダニウムランチャーを放って怪獣の大群を一掃した。

その近くでは聖ゲッターに乗る竜馬が暴れ、ゲッタートマホークで次々と怪獣を蹴散らしていた。

「死ねえええー！ ぶへっ!!」

「どわっ!!」

一方でヴァルザガードの艦内に居る者たちは、自らの生存を賭けて殺しに来る囚人や看守たちの迎撃に当たっていた。

竜騎はシユンより渡されたAK-47突撃銃で迫りくる囚人たちを射殺し、背後から迫った大柄囚人をストックで殴り付けた後、股間を蹴り上げ、追い打ちに至近距離で顔面に向けて銃を撃ち込む。

「畜生、こいつ等、マジでやる気だぜー!」

大柄の囚人を射殺した竜騎が、囚人と看守たちが必死に自分らを殺そうとしてくると口にすれば、MAC10短機関銃を持って多数の囚人たちを射殺し、看守の喉元を左腕のカギ爪で切り裂いたレンはそうだと応える。

「そうとも。生存が掛かっているからな。もつとも、あの老人が約束を守るとは思えんが」

訃堂が始末するはずである囚人や看守たちを生かすはずが無いとレンは口にしつつ、第二派の迎撃を竜騎と共に行う。

「グエアアア!!」

「テメエらア! あんなジジイの言葉に踊らされやがって!!」

ドソクは武器を持たず、怒りながら捕えた囚人を武器のように振り回し、自分に襲い掛かる囚人たちを次々と打ち倒した。

「死ねっ!」

「ふん!」

「ぼがっ!!」

振り回していた囚人を捨てれば、ナイフで背後から襲い掛かろうとした囚人の首元を掴み、彼を天井に叩き付け、それから床に叩き付けて完全に息の根を止める。

「騙されて殺されんのがオチだぞ! テメエら!!」

竜騎、レン、ドソクのカオスゲッターチームが襲い掛かる囚人や看

守たちを次々と己の力で殺していく中、シユンはドラムマガジンのA—12自動散弾銃を撃つて囚人たちを射殺していく。

狭い通路内での機関銃のように散弾は強力であり、一気に二十数人が散弾を浴びて床に倒れた。

「女だあ！ 抑え込め!!」

スキアを見た囚人たちは襲い掛かるために一斉に向かうが、彼女はヴァルザガードの管理AIであり、直ぐに艦の防犯装置を作動させる。

「防御プロトコル起動。照準を接近中の侵入者数名に固定、レーザー起動!」

向かって来る囚人たちに対し、スキアは通路にレーザー装置を作動させた。レーザーは躲し切れない網目であり、それが自分らを切断する物とは知らず、囚人たちは下品な表情を浮かべながら突っ込む。

「あばっ!」

「きべっ!」

その結果、彼らは網目に切断され、ブロック状となった肉片は床に次々と落ちていく。目前の侵入者を排除したスキアは端末を操作し、ヴァルザガードに侵入した囚人や看守たちを警備システムで排除し始める。

「警備システムが発動したのか。なら、俺は格納庫の制圧だ!」

警備システムの発動により、侵入者たちは次々と抹殺されていく。背後で囚人や看守たちが機関銃で射殺されたのを見ていたライトンは、MG3機関銃を抱えながら格納庫へと向かう。

そこにも多数の囚人と看守たちが居り、訃堂の指示に応じなかった者たちを襲っていたが、現れたライトンのMG3の掃射でバタバタと薙ぎ倒される。彼の体格であれば、MG42の戦後モデルの反動を抑えることは容易だ。この掃射で格納庫に居た半分の侵入者は壊滅した。

「アツハツハツハツ! 生身で斬るのは楽しいねエ!!」

ゲシユペンストに乗らず、生身で暴れ回るナハトは鉈で次々と侵入者を切り裂いていた。敵を斬るその表情は満面の笑みであり、顔を赤

らめながら敵を切り裂いている。

人を斬ることと絶頂を覚える美少女に恐怖した囚人と看守たちは、かつては仲間であった自分たちをなぜ殺せるのかと怯えながら問う。

「な、なんでだ!?! 俺たちは仲間じゃねえか! なんてこうも簡単に殺せるんだ!?!」

「そうだ! 僕たちは君たちを殺さな、がばっ!?!」

「けっ、死にそうになりやあ命乞いか」

形勢が不利になれば、命乞いの如く問う自分を殺しに来た者たちに對し、乱暴者の竜馬は斧を気弱な囚人の頭部に叩き付け、命乞いをする彼らにそんな気持ちで自分らを殺しに来たのかと問い始める。

「テメエら、藁にも縋る思いであのジジイの言葉を信じて俺たちを殺しに来たんだろ? そんな度胸で、俺たちを殺せると思うなよ!?! タマ取る気なら、全力で殺す気で来やがれ! でなきや死ぬぞ!?!」

その竜馬の言葉に、訃堂の言葉を信じる者たちは一斉に雄叫びを上げながら殺しに向かう。

「あの者め、無理に焚き付けおつて」

雄叫びを上げながら襲い掛かる囚人を素手で無力化した嘉承は、自分たちを殺しに来る者たちを焚きつけた竜馬に文句を言いつつも、襲い掛かる侵入者たちに対処する。

「くっ、敵の襲撃の防衛では一番槍も出来ん! てあつ!?!」

文句を言いながらも甘寧は鎖で繋いだ超合金Z製の二つの球を振り回し、殺しに来る囚人たちを巻き起こした嵐「鉄風拳」で倒し続ける。

「くりゅあああ!!」

訃堂に応じそうだが、応じなかった電龍はサイバネ拳法で襲い掛かる囚人を殺し続ける。一度敵対すれば、例えかつては味方であろうが、電龍は誰であろうと容赦しないのだ。

「うわあああ! ま、待て! 俺はもう!..」

「黙れ、この悪に寝返った者どもめエ! 俺の正義の鉄拳を受けろオ! ルチャスター・パンチ!!」

戦意を喪失した囚人も居たが、正義を信じるルーチャスターは容赦なし

ない。目前の囚人を悪に寝返った男と判断し、自称、正義の鉄拳である殺人パンチを顔面に打ち込んで殺害する。

「みんな容赦無さすぎだよ…」

『彼らも必死なのさ。さあ、こちらにも必死なのが来るぞ！』

「もう、貴方たちも容赦なさすぎだよ！」

シウロウガに乗っていた有馬は訃堂の布告を受けた囚人や看守たちを躊躇いも無く殺し回る竜騎やシユンたちに、情けが無さ過ぎると口にする。

そんな有馬が乗るシウロウガにも、防衛用機動兵器に乗る看守たちが襲い掛かる。彼らも訃堂の言葉を信じ、竜騎たちを殺しに来たのだ。これに管理A1であるアサキムは直ぐに対処するように言えば、有馬は襲い掛かる防衛用機動兵器と交戦を始める。

「お前たち、あの男の言葉を信じるんじゃない！ お前たちを殺そうとしていたんだぞ！ 約束など守るはずが無い!!」

襲い掛かる者たちだけを倒しつつ、弦十郎は襲い掛かる囚人や看守たちの説得を試みるが、竜馬の言葉で焚きつけられた者たちは、自分が死ぬか標的を殺すまで止まらない。

訃堂の言葉を信じ、囚人や看守たちが竜騎を始めとするゲッターチームやシユン、弦十郎たちを全力で殺しに向かう中、人類側の刺客とも言える者たちが密かにイマガワに来ていた。

「あがれえー！ この星の者共と一緒に奴らを始末するのだア!!」

刺客の数は大勢であり、刀剣類を持ってヴァルザガードに大挙して押し寄せる。橋まで一気に駆け上げれば、刺客の大群は待ち受ける謎の赤と黒のタイツを着た男と遭遇する。

その赤と黒のタイツの男、背中に二振りの日本刀を背負い、左右の腰には拳銃を収めたホルスターを吊るしている。この奇妙奇天烈な男を見た刺客集団の先頭の男は、直ぐに思ったことを叫んだ。

「変な奴がいるぞー！」

「変な奴って、俺ちゃん？」

変な奴がいる。

その言葉に反応した赤と黒のタイトスの男は両腰の拳銃を素早く抜き、自分を踏み潰さんと迫る刺客の集団を迎撃した。

「おいおい、せめて名前くらい紹介しろよ。俺ちゃんの初登場なんだから？」

まるでこちらに話し掛けているかのように語るその赤と黒のタイトスは、的確に刺客たちを射殺していく。弾が切れれば拳銃をホルスターに戻し、背中の二振りの日本刀を抜き、斬りかかる刺客たちを斬り殺していく。

一瞬にして橋の上は屍で溢れかえり、僅かに残った刺客は赤と黒のタイトス男に武器を構えながら何者かと問う。

「な、なんだ貴様は!？」

その刺客の問いに対し、赤と黒のタイトス男は二振りの日本刀を背中の鞘に戻してから腰を低くし、両手を前に出して動かしながら名乗り始める。

「俺ちゃんか。参戦が最後になった男、デッドプール!!」

この奇妙奇天烈な男の名はデッドプール! 不死身にして最強の傭兵! 赤と黒のタイトスの下に隠されているのは、不死身の代償として醜い素顔が隠されている!

「おい、ちゃんと俺ちゃんがデッドプールになっちゃった経緯も書けよ。たくつ、これだからアクセス数が伸びねえんだ。取り敢えず、残りはお前らだけだな? チミチャンガにしてやるぜ!」

腰を低くしての奇妙なポーズで名乗りを上げたデッドプールは再び日本刀を抜き、襲い掛かる残る刺客たちを切り伏せる。

一人の胸をバツを描くように切り裂き、次に襲い掛かって来た男の胸に二本を突き刺して素早く引き抜き、三人目の両腕を撥ねた後、残る一人に斬りかかる。

「クソっ! 脳みそ巻き散らしやがれ!!」

最後の一人は隠し持っていたピストルをデッドプールの頭部に向けて放つが、彼は何事も無かったように振舞う。

「な、なんで生きてる!?! 脳天を撃ち抜いたんだぞ!?!」

「おいおい、聞いてなかったのか? 俺ちゃん不死身だって言った

ろ？ あっ、こいつ等には聞こえてないのか」

頭を撃ち抜かれても生きているデッドプールに驚く刺客に対し、不死身のタイツ男は奇妙なことを言いながらピストルの二射目を放とうとする男の頭部に日本刀を叩き付け、息の根を止めた。

それから素早く引き抜き、二振りの日本刀の刀身に着いた血を振り払ってから背中に背負う鞆に戻す。

「さて、流行りの異世界転移をしちまったから、ここが何処だか調べねえとな」

また奇妙なことを口にしつつ、デッドプールはここが何処であるのか調べるべく、周囲の探索を始める。

「おいおい、ここは探索パートだろ!? なんで馬鹿でかいロボットが出てくんだよ!? 尺短すぎるだろ!?!」

だが、その暇もなくデッドプールに次なる刺客が訪れる。それは巨大なロボットであった。デッドプールを見るなり、踏み潰さんと巨大な足を振り下ろす。

それを躲し、何処からともなくロケットランチャーを出して撃つが、全く通じない。なればと思い、デッドプールは自分のロボットを召還する。

「だったら尺潰しだぜ！ 出て来るかどうか分からねえが…！ 出でよ、レオパルドン!!」

デッドプールが地面に右拳を突き刺せば、そこからレオパルドンと呼ばれる巨大なロボットが姿を現す。

「ご都合主義の如く出て来たな。直ぐに瞬殺してやるってばよー!」

頭部の頭頂部に居るデッドプールは直ぐに乗り込み、操縦桿を握って巨大ロボットの攻撃を躲しながら右手にソードビッカーと呼ばれる剣を召還する。

「畜生が。やたら動く上に、ソードビッカーはチャージが必要だなんて！ スパイダーバースの設定を盛り込みやがって！ おかげでチャージが溜まるまで動かしかねえじゃねえか!!」

訳の分からないことに文句を言いつつ、レオパルドンを駆るデッドプールは攻撃を躲しながらソードビッカーのエネルギーが溜まるま

で、敵の攻撃を躲し続けた。

巨大ロボットは躲すばかりのレオパルドンが少し距離を取ったところで、胸のハッチを解放してミサイルを雨あられと乱射する。これにデッドプールはレオパルドンの角を分離させ、ブーメランとして接近してくる多数のミサイルの迎撃に使う。

「アニメにしたら、CG班が大変そうだ！ アークターン!!」

そう言っただけで分離した角をブーメランとして放ち、ミサイルを全て迎撃した。返ってきた角を元の位置に戻せば、ソードビツカーのチャージは完了していた。

「よし、瞬殺タイムだ！ 行け、ソードビツカー!!」

チャージが完了すれば、デッドプールは目の前の敵の巨大ロボットに向け、レオパルドンにソードビツカーを投擲した。

投げられたソードビツカーは真っ直ぐと巨大ロボットに向けて飛んでいき、巨大ロボットの胸に突き刺さる。数秒後、巨大ロボットは大爆発を起こし、その衝撃でソードビツカーはレオパルドンの右手に戻って来る。

「へっ、相手は死ぬ。こいつはスパイダーバースの設定じゃないみたいだ」

相手を倒した後、デッドプールはまた意味の分からないことを言った。

これで役者は揃った。それを確認した惑星イマガワに降下し、姿を消したコーウエンとステインガーは現れる。

「役者は揃ったな。ステインガー君」

「うん、こちらも準備オーケーだよ。コーウエン君!」

「おいおい、役者が揃ったけど? どういう事だつてばよ」

いきなり姿を現したコーウエンとステインガーに対し、レオパルドンに乗っていたデッドプールは問う。これに聞こえていないはずのコーウエンとステインガーは答えるがの如く、自分たちの目的を語り始める。

「我々インベーターが更なる進化を極めるため、役者が揃うのを待っていた。既にカードは揃った。後は、行動あるのみ!」

「今がその時だ！　そして我らはイマガワと融合し、進化の為に貴様たちを喰らう！」

「進化！　進化!!」

「な、なんだってーっ!?　この展開は回りくどい上に流石に速過ぎるぞ！　いくら最終的に虚無るからってな!!」

その目標とは、役者が揃ったところでゲッター線で溢れかえる惑星イマガワと融合し、生き延びた竜騎たちを喰らって更なる進化を遂げると言う物であった。

この目的を聞いたデッドプールは驚きの声を上げ、直ぐに惑星イマガワから脱出を図る。コーウエンとステインガーの答えを聞いていた者たちも、急いで惑星イマガワから脱出するか、ヴァルザガード・セカンドに乗って脱出する。レッドマンも空を飛んで脱出していた。「あ、あれは…!?!」

やがて全員が宇宙へと出れば、惑星イマガワと融合したインベーターであるコーウエンとステインガーが姿を現す。その姿、まさしく異形に等しかった。

『我らだけでないぞ』

『さあ、出て来るが良い、キラァー・ザ・ブツチャー!!』

『ホッホッホッ！　愉快、愉快！　気持ち悪いと思っていたが、まさかインベーターとの融合がこんなにも気持ち良いとは!』

コーウエンとステインガーだけでなく、ブツチャーまでもインベーターと融合していた。

かくして、コーウエンとステインガーを始めとするインベーターのみならず、それに融合したブツチャーと、イマガワに呼び出された戦士たちとの決戦が始まろうとしていた！

決戦、インベーター!!

異世界から戦士を呼び寄せた惑星イマガワは、インベーターであるコーウエンとステインガーに融合された!

両名が融合した惑星イマガワはもはや原形を留めていない。胴体が昆虫や芋虫のような形となったコーウエンと額より、ステインガーの頭部が生えた悍ましい姿となっている。

これには一同も同様に隠せずにいる。あのガイゾックであるはずのブツチャーまでインベーターとなっているのだ。

「な、なんて馬鹿でかい…!?!」

「あの巨大なインベーターが、惑星イマガワです!」

シップ形態のヴァルザカード・セカンドの艦橋にて、イマガワと融合したコーウエンとステインガーを見た弦十郎が驚く中、スキアはあれがイマガワであると告げる。

『へっ、それがどうした? こつちとら、神様と戦ったことがあんだ! 今さら馬鹿でかい化け物が出て来たところで、特に驚くことはねえよ!』

『そういうこつた! 何が来ようが、ぶっ飛ばすまでよ!』

「まあ、俺も似たようなのと戦ったことがあつからな。みんな、そう対して驚いていないぜ?」

強大な敵に対し、驚かなぬ者たちが居た。

乱暴者の竜馬は神と戦ったことがあり、特に驚くことは無い。竜騎、レン、ドソクは初めてであるが、何が来ようが打ち倒す覚悟だ。シユンも同様で、その経験を経験を弦十郎に向けて言えば、彼もまた今まで戦ってきた敵の事を思い出す。

「そうだな。俺もお前たちと同様に神やなんやらと対峙したことがある」

瞳を閉じ、笑みを浮かべて言えば、ここに集いし戦士たちは巨大なインベーターに挑む。

「一番槍はこの甘寧がやらせてもらう! 行くぞツ!!」

自分の機体であるバイオンBBBに乗り込んだ甘寧は、ヴァルザ

カードのハンガーにあるカタパルトに両足を着け、射出の勢いを利用して出撃した。

「あれほど大きければ、斬り甲斐がありそうだ。ナハト、ゲシュペンストで出撃する！」

巨大なインベーダーを見たナハトは、斬り甲斐があると言ってゲシュペンストで出撃した。

「こいつは黒鉄の城と呼ばれたスーパーロボットだ！ ライトン・イエーガー、行くぜ!!」

自分が乗るマジンガーZが黒鉄の城と自負するライトンは、ホバーパイルダーに乗り込み、離陸させてマジンガーZの頭部にドツキング、パイルダー・オンして出撃した。

「なんだア？ 俺のゲッターが新ゲッターになっちまってるじゃねえか！」

「改良させて頂きました。他二名のパイロットも決まっております？」

「ご不満ですか？」

乱暴者の竜馬も出撃しようと格納庫へ駆け付けければ、自分のゲッターが分解され、元のゲットマシンであるイーグル号に戻されていた。他にもジャガー号とベアー号が、スキアの手によって復元されている。

これが不満だと問うスキアに対し、竜馬は笑みを浮かべて残る二機のゲットマシンのパイロットが誰かと問う。

「まあ、ゲッターは三人乗らねえと力が出ねえからな。でっ、ジャガー号とベアー号のパイロットは誰だ？」

「ジャガー号は電龍・フルアームズ・ステインガーさんで、ベアー号は嘉承さんです」

「大丈夫か、テメエら？」

スキアがジャガー号は電龍で、ベアー号は嘉承だと答えれば、パイロットスーツを身に着けて姿を現した両名に対し、竜馬は笑みを浮かべながら大丈夫なのかと問う。これに両名は笑みを浮かべて心配は無用と返す。

「木星阿片があれば、大丈夫だ」

「拙僧等の心配は無用。流殿は存分に暴れなされ」

「へっ、言ってくれるぜ。途中でぶっ倒れるんじやねえぞ！ 操縦桿を握っとけ！ それだけで良い!!」

「二応ッ!」

その返答を聞けば、竜馬たちはそれぞれのゲットマシンに飛び乗った。

「奴らの準備も出来ているようだな」

「向こうは先輩方だが、この世界のゲッターチームは俺たちだ！ 負けてられねえぜ!」

「奴らに遅れを取らんようにしねえとな。行くか!」

「二応よッ!!」

竜馬たち臨時ゲッターチームがゲットマシンに乗って出撃していく中、竜騎・レン・ドソクのゲッターカオスを駆るゲッターチームもそれぞれのゲットマシンに乗り込み、ヴァルザカードより出撃した。

「あれが悪の根源だな!? ルチャドールガンダム、GOッ!!」

ルチャドールガンダムに乗り込み、ファイティングスーツを身に纏ったルーチャスは、巨大なインベーターを悪の根源と決め付け、勢いよくスラスターを吹かせて出撃する。

「怪光線!!」

一番槍をしたい甘寧はギルバードの怪光線を発射し、自分らに向けて展開される多数のインベーターに向けて戦端を開いた。ギルバードが数体を倒して二射目を更に撃てば、後から来たライトンが駆るマジンガーZのブレストファイヤーが行われる。

『ブレストファイヤー!』

音声認識による叫びで、マジンガーZのブレストファイヤーが放たれ、効果範囲に居たインベーターは焼かれる。

『デイスキャリバーで高速攻撃だ!』

「うん! デイスキャリバー!!」

次に攻撃を行うのは有馬のシユロウガであり、アサキムの指示通りにデイスキャリバーを抜き、高速で動き回って多数のインベーターを排除する。その次は広域範囲攻撃であるエンブラス・ジ・インフェル

ノを行うように指示する。

『次はエンブラス・ジ・インフェルノで焼き払おう』

「了解！ エンブラス・ジ・インフェルノ!!」

その指示に従った有馬は、シユロウガより黒い炎を広範囲に放射させ、多数のインベーターを焼き払う。

メタルビーストを含む多数のインベーターが焼かれる中、更なる追いつ打ちが始まる。

「ルチャスター・ガトリングパンチ!!」

ルーチャスが乗るルチャドールガンダムの機関銃の如くの拳の嵐だ。それが多数のインベーターを排除した後、ルーチャスは更なる大技を仕掛ける。

ルチャスター・フラッシュ・スーパーノヴァだ!

「消え去れイ！ 雑魚共!! ルチャスター・フラッシュ・スーパーノヴァ!!」

高速で機体の胴体を回転させ、全身に気を纏ったルーチャスのルチャドールガンダムは高速回転しながら多数のインベーターを葬った。

更に攻撃は続く。今度はクガヤのHiールガンダムによる広範囲攻撃だ。フィンファンネルでは無く、本来のHiールガンダムに無いクガヤ専用機ならではの武装である。

「光の翼で一掃する!!」

そう言ってHiールガンダムの両翼よりビーム状の翼を発生させ、それを飛ばたかせながらインベーターの大群に突っ込み、多数のインベーターを一掃した。

『おのれ!』

『小癩な!』

『叩き潰してくれるわ!』

向かわせたインベーターを無双する戦士たちに対し、コーウエンとステインガー、ブッチャーは更なるインベーターを差し向ける。だが、戦士たちは以上に強く、向かわせたインベーターは幾ら大きからうが倒されるばかりだ。

「斬り甲斐があるね！ アハハツ!!」

ゲシュペンストを駆るナハトは機体の射撃兵装を全て使いながら多数のインベーターを倒し、レーザーブレードで大型のインベーターを何度も斬り、やがては真つ二つに切り裂く。

相変わらず笑っているが、その戦い方は冷静であった。次なる攻撃手はキングジョーに乗るペダン星人のボウンである。

「この敵の大群を見ても、ウルトラマンは怯むことなく平和を守るために挑むだろうな。私もウルトラマンでは無いが、今は仲間が居る！ やるぞ!!」

自分の憧れるウルトラマンならこのインベーターの大群に勇敢に挑むだろうと思い、ボウンはキングジョーの全兵装を使いながらインベーターを一掃する。それから右腕にペダニウムランチャーを装着し、後方に居るコーウエンとステインガー、ブツチャーに向けて放つ。

『グアアア！ 痛い！ 痛い!!』

『我らを直接攻撃するつもりか?』

『だが、その程度で我らは倒せぬ!』

放たれたペダニウムランチャーはブツチャーに命中したが、致命傷には至らなかった。だが、道は開かれたので、更にこじ開けようと、レッドマンがレッドサンダーを放って道を切り開く。

「レッドサンダー!」

これにより、コーウエンとステインガー、ブツチャーへの道は開かれた。予め人型形態に変形していたヴァルザカードは弓を構え、収束されていたエネルギーの矢を標的に向けて発射する。

「エクサノヴァシユート!!」

艦橋に居る弦十郎の叫びと共に放たれたエネルギーの矢は、コーウエンとステインガーに命中して突き刺さる。

『ぬアアア!!』

『ギアアアア!!』

エネルギーの矢で射られたコーウエンとステインガーが痛みで叫ぶ中、ソードビツカーのチャージが溜まったのか、レオパルドンに乗るデッドプールはそれをブツチャーに向けて投擲する。

「尺を稼いでくれたおかげで、ソードビツカーのチャージも完了だぜ！ オラっ！ 最終回に向けてソードビツカー投擲だ!!」

また訳の分からないことを口にしつつ、デッドプールはソードビツカーをブツチャーに向けて放ったが、全く効かなかった。

『なんだあ、今の攻撃は?』

「クソっ、修正しやがって！ まあ良い、原作より動くレオパルドンだ！ アームパンチ！」

あれほど強かったソードビツカーが通じないので、デッドプールは接近してくるメタルビーストに向け、レオパルドンのロケットパンチを見舞って一撃で破壊した。更に戻ってきたソードビツカーで、群がって来るメタルビーストやインベクターを次々と切り伏せる。

ブツチャーへの攻撃は、聖ゲッターロボに乗る流竜馬が担当した。

『ぬう、死ねい！ ゲッター!!』

「なれば、高速で貫く！ チェンジゲッター、ツウ!!」

ブツチャーの攻撃を躲した後、聖ゲッターを高速戦闘形態である2にチェンジさせた竜馬は、高速で移動しながら攻撃を始める。

「ドリルスプリットミサイル！」

『ぎよわっ!?!』

ドリルスプリットをミサイルのように発射させ、ブツチャーにダメージを与えた。背後から接近するメタルビーストに対しては右手のストライクアームで握り潰し、ブツチャーに追撃の攻撃を行う。

「チェーンクロスアタック！」

『ぐえっ!?!』

チェーンをブツチャーの身体中に巻き付けさせた後、縛り上げて動きを封じる。それからドリルを左手に戻せば、聖ゲッター2の必殺技であるスパイラルハリケーンアタックを決め込む。

「スパイラルハリケーンアタック!!」

『ぬアアア!!』

高速でドリルを回転させ、発生させたハリケーンでブツチャーを攻撃した。だが、ブツチャーはまだ息があり、反撃して来た。

『おのれ、良くも!!』

「しぶとい奴だ！ パワーで押し潰す！ チェンジゲッター、スリイ！！」

まだ息の根があるブッチャーに対し、竜馬はパワー形態である聖ゲッター3にチェンジし、とどめの一撃を刺そうとする。

「アームキャノン！ ギガントミサイルハリケーン！！」

アームキャノンによる攻撃を行ってからギガントミサイルハリケーンを行い、ブッチャーを痛め付けた後、アームパンチを行って聖ゲッター3の必殺技である大雪山おろしを行う。

「大雪山おろし！！」

『ぎばあああ！ ぬうう、まだ終わらん！ まだ終わらんとオオオ！！』
「全くしぶとい！」

これほどの攻撃にも関わらず、インベーターとなったブッチャーは倒れなかった。これに竜馬は聖ゲッター1にチェンジし、奥の手を使う。

「それなら、これだ！ シャインスパアアアウ！！」

『無駄なことを！ 貴様らは守るはずの人類に殺される運命なのだ！』

奴らはお前たちに感謝せぬぞ！ 絶対にその恩を必ず仇で返す！

フオハハ…のはああああ！！』

聖ゲッター1の両手に込めたゲッター線のエネルギー弾を撃ち込めば、ようやくブッチャーは倒れた。

だが、彼はシャインスパークに吞まれる直前、この世界の人類は恩を仇で返すと言い残し、断末魔の叫びを上げながら消滅した。それを聞いていた一同であるが、今は戦いに集中しなくてはならない。この現状を打破するのが優先だ。

「行くぞ、お前ら！ 歯あ食いしばれえ！！ チェンジゲッターアアアワニン！！」

復元されたイーグル号で出撃した乱暴者の竜馬は、残る二機のゲッターマシンに乗る電龍と嘉承に合体に集中するように命じれば、新ゲッター1に合体する。合体は三名が集中していたおかげで難なく成功し、竜馬は再び新ゲッター1を駆る事となった。

「全く懐かしい気分だぜ！ 試し斬りに、あの馬鹿でけえ芋虫を叩き

切ってやる！ ゲツタアアアトマホオオオク!!」

久方ぶりに新ゲツター1に乗って懐かしい気分を感じた竜馬は、ゲツタートマホークを取り出し、巨大なコーウエンとステインガーに斬りかかる。

『小癩な！ その程度の斧で!!』

『我々を倒せると思っっているのかア!?!』

「俺らの事、忘れてねえよな！」

『っ!?!』

ゲツタートマホークで斬りかかって来る新ゲツター1に対し、コーウエンとステインガーは無数の触手で迎撃に当たろうとするが、ここに来て竜騎、レン、ドソクのゲツターカオスが現れ、手にしているゲツタートマホークで触手を全て切断する。ここに来るまでに既に合体を済ませていたのだ。

『混沌のゲツターロボ!』

『ゲツターカオス!』

コーウエンとステインガーが驚きの声を上げる中、竜馬の新ゲツター1のゲツタートマホークがその巨体を切り裂いた。

『グアアア!!』

「ちっ、デカ過ぎて斬れねえ！」

『だったらもう一撃だ!』

『なアアア!?!』

標的が大き過ぎるため、ゲツタートマホークでは斬れなかったが、ゲツターカオスのトマホークの二撃目が炸裂し、コーウエンとステインガーは激痛の余り叫んだ。空かさずに反撃が来るが、そんな竜騎たちは相手の冷静さを奪おうと、インベーターに対する挑発的な言葉を掛ける。

「テメエら聞いた話によれば、ゲツター線に寄生してんだってな？」

自分からは何も出来ねえのかよ?」

『調べるにインベーターと言うのは寄生虫そのものだ。貴様たちは無価値だ』

『無学者の俺でも分かるぜ。テメエらインベーターはゲツター線が無

けりゃあ、何も出来ねえ寄生虫だってことはな』

この愚弄に対し、インベーターであるコーウエンとステインガーは怒り、星をも砕く光線を行う。

『この進化に値しない下等生物め！ 我らを愚弄するか!!』

『我らがゲッター線が無ければ何も出来ぬだ?! この世界の人類共々貴様らを絶滅してくれるわ!!』

怒りの叫びと共にその攻撃が放たれたが、それは聖ゲッター1のゲッターバリアによって防がれる。

『私を忘れてもらっては困るぞ!』

『ぬう、このゲッターロボは不味い!』

『最初は貴様だ！ 聖ゲッターロボ!!』

自身の渾身の攻撃が防がれたコーウエンとステインガーは先に斃すべきは聖ゲッターロボと判断するが、既に竜馬たちは敵を倒す準備を整えていた。

『三体のゲッターロボのゲッタービームで倒すのだ！ 行けるか?』

『三体同時にゲッタービームだな？ 任せとけ、別の俺!』

『木星阿片のおかげで安定している。いつでもOKだ!』

『その木星阿片とやらは無いが、拙僧はいつでもよろしいぞ』

『こつちも行けるぜ!』

『出力はそちらのゲッターロボから来ている。安定そのものだ!』

『速くこの気色悪い化け物をぶっ倒そうぜ!』

聖ゲッターの竜馬の問いに、二体のゲッターロボに乗る面々はいつでも行けると答えた。

『何を企んでいるか知らんが!』

『実行できると思っっているのか!?!』

何か企んでいると見抜いたコーウエンとステインガーは、それを阻止するためにインベーターやら職種による攻撃を三体のゲッターロボに向けて行う。

これを高機動で躲しつつ、三体のゲッターロボは一斉にゲッタービームをコーウエンとステインガーに向けて放つ。

『ゲッターアアビィイム!!』

七人の叫びと共に、三体のゲッターロボからゲッタービームが放たれた。そのゲッタービームは強大であり、これを見たコーウエンとステインガーはバリアを張って防ごうとしたが、収束した三つのゲッタービームはバリアを貫通するほどであった。やがて三つに収束したゲッタービームはコーウエンとステインガーを貫く。

『ぐああああ?! このゲッター線は、このゲッター線は吸収しきれぬううう!!』

『な、何というゲッター線の量!? も、もう持たないイイイ!!』

膨大なゲッター線を吸収しきれず、三つのゲッタービームを受けたコーウエンとステインガーの体内は暴走し始める。

『お前らの大好きなゲッター線だ。たつぷりと味わいな!』

その様子を見ていた新ゲッターに乗る竜馬は、好きなゲッター線を味わうように言う。

吸収しきれないゲッター線により、自壊し始めるコーウエンとステインガーは負け惜しみのような言葉を告げる。

『これで勝ったと思うなよおお!』

『我らインベーターは永遠なりいい!』

自壊しつつも、自分らインベーターは永遠であるとコーウエンとステインガーは言う。最期にコーウエンとステインガーは、ブッチャーと同じく人類に絶望するが良いと口にした。

『貴様らは、貴様らは守るべき人類に絶望するであろうツ!』

『絶望した貴様らの顔を見れぬのが残念だア! 存分に後悔するが良い!!』

『ムハハハツ! アツハツハツハ…!』

最期に二人同時に笑いながら、コーウエンとステインガーは消滅した。

「なんであの豚野郎と同じことを言うんだ?」

『さあな。負け惜しみじゃねえのか? あんな奴らの言うことを本気にするんじゃないよ』

ブッチャー、コーウエンとステインガーが最期に言った人類に絶望しろと言う言葉に、竜騎は気になっていたが、それに反応した竜馬は

それをただの負け惜しみと表した。

だが、そのインベーター等が最期に口にするこの世界の人類が戦士たちを攻撃してくると言う予言は、見事に的中する。戦士たちの後方より、多数のワープが確認されたのだ。

「後方より、多数のワープ反応！ 来ます!!」

「出迎え…いや、この布陣は…!?!」

「攻撃の陣形じゃねえか!」

ヴァルザカードの艦橋内にて、スキアの知らせで自分らの後方に多数のワープ反応の報告を受けた弦十郎とシユンは、攻撃の陣形であると見抜いた。

数秒後に人類の大艦隊が現れ、更にその後方から巨大な宇宙要塞もワープしてくる。人類の大部隊がワープして来た位置は攻撃の陣形であり、完全に戦士たちを攻撃する位置にあった。

「まさか、インベーターの言ったことは本当だったのか!?!」

「用済みってわけか! 畜生!!」

完全に戦士たちを攻撃する位置にワープした人類の大艦隊を見て、弦十郎はインベーターの言っていたことが本当であることに驚き、シユンは自分らにインベーターを排除させ、後は漁夫の利を得て排除しに來たと判断する。

その大艦隊と宇宙要塞を率いて戦士たちの抹殺に來た人物、風鳴訃堂はヴァルザカード・セカンドに直接映像通信で戦士たちに語り掛ける。

『久しいな、弦十郎。もつとも、お前は这个世界に來てそう月日は経っていないようだが』

「やはりこの世界に転生していたのか! 訃堂ッ! 貴様の悪行、しかと確かめさせてもらったぞッ!!」

『フン、それが生きていた父親に掛ける言葉か。全ては護国、銀河日ノ丸帝国の為にを行ったこと。発展と拡大の為の尊い犠牲よ。これを理解できぬとは、やはり貴様は防人を継ぐに値せぬ。わしの判断は政界であった。それに貴様には前世の恨みもある。その恨み、ここで晴らしてくれようぞ!』

映像通信に映る訃堂に対し、弦十郎はこの世界に行ってきた自分の父に対する怒りをぶつける。

これに訃堂は全ては護国の為と答え、挙句に前世では家督を継がさなかつたのは正解だと言い始め、更には前世の恨みを晴らすと言い始めた。

かくして、守るべきはずの人類、銀河日ノ丸帝国と戦士たちの最終決戦の火蓋が切って落とされた！

最終決戦！ 前編

『銀河日ノ丸帝国防人艦隊の全将兵に告ぐ！ 目前の者どもは我が護国を脅かす敵であるッ!! 護国の為、全力で敵を粉碎せよッ!!』

銀河日ノ丸帝国の最強艦隊と宇宙要塞「防人」の将兵等は、総司令官風鳴訃堂の指令の下、竜騎ら戦士たちに向け、護国の為に全力で攻撃を開始した。

巨大な宇宙戦艦より、次々と巨大なロボットが出撃していく。大きさは平均的に50mクラス！ そんな巨大ロボットの大群が、戦士たちに一斉に襲い掛かろうとしていた！

ゲッター系はゲッタードラゴン、ゲッターライガー、ゲッターポセイドンの三種！

黒いロボットであるブラックオックス！ 三種のゲッターロボに続いて戦士たちを倒さんと大挙して押し寄せる！

その中に量産型とは違うゲッター、ネオ・ゲッターの姿もあった！ 「フハハハ、見たか！ これがこの宇宙を支配する銀河日ノ丸帝国の戦力よ！ 貴様らはわしが影より守る護国の戦力で打ち倒される運命なのだ!!」

銀河日ノ丸帝国最強の戦力で倒される運命であると、訃堂は戦士たちに向けて告げた。

事実、戦士たちと銀河日ノ丸帝国の戦力は天と地の差。戦士たちはインベーターとの戦いで疲弊しており、圧倒的に有利なのは誰が見ても銀河日ノ丸帝国であった。

だが、この圧倒的な戦力差で尻尾を巻いて逃げる戦士たちでは無い！ 蛮勇にも挑もうとしていた！

「恩を仇で返すとは！ そんな恩知らずにやア、たつぷりと報いを受けさせてやるゼッ！ 行くぞお！ 電龍、嘉承!!」

『応ッ!!』

『俺ちゃんも新ゲッター版流竜馬に同意よ。見てろよ、今川の量産ゲッターに量産ブラックオックス軍団！ 前回では修正くらったレオパルドンで無双してやんよ!』

先陣を切ったのは、新ゲッター1に乗る流竜馬と電龍、嘉承、レオパルドンに乗るデッドプールであった。

「バトルウィング！ ゲッターア、トマホオオオク!!」

無数のゲッタードラゴンに対し、新ゲッター1はバトルウィングを展開して高速で接近してからゲッタートマホークを展開、そのままゲッタートマホークで斬りかかるドラゴン二体を切り裂く。

「オラアアア!!」

向かって来るゲッタードラゴンを切り裂きながら、敵の本陣を目指そうとする。

次に無数のゲッターライガーを相手にするのは、デッドプールのレオパルドンであった。

「畜生、ゴ都合主義の如くソードビッカーが投げられねえじゃねえか！ ならば前回と同じように振り回して角ブーメランで暴れまわらせ！」

まだソードビッカーのチャージが溜まっていないので、デッドプー
ルはまた訳の分からないことを言いながらソードビッカーを振るつ
て無数のライガーを切り裂き、そこから左手で角を外し、それをブー
メランのように投げ、更に撃破数を稼ぐ。

これに触発されてか、竜騎、レン、ドソクが乗るゲッターカオス、マ
ジンガーZのライトンも銀河日ノ丸帝国のゲッター軍団やブラック
オックス軍団との交戦を始める。

「俺たちも行くぜ！」

『応よッ！』

『ライトン・イエーガー、マジンガーZ、行くぜ!!』

ゲッターカオス1がゲッタートマホークでゲッタードラゴンを切
り裂いて撃破すれば、ライトンのマジンガーZはロケットパンチをブ
ラックオックスに向けて撃ちだす。

「ロケットパンチ!!」

その叫びと共に放たれたロケットパンチはブラックオックスの腹
を貫通し、物の見事に撃破した。

さらに続けて光子カビームを発射して迫りくる多数のブラック

オックスを撃破し続ければ、ゲッターカオス1はゲッターライガーのドリル攻撃を躲す為にゲットマシンに分裂する。

『オープンゲット!』

「チェンジ、カオス2! ドリルアーム!!」

分離すれば直ぐにゲッターカオス2にチェンジし、高速移動しながらドリルで追撃を仕掛けるゲッタードラゴンを次々と撃破していく。

「ドリルハリケーン!」

それから動きを止めた後、ドリルハリケーンを繰り出し、一気に多数のゲッターライガーを撃破した。

多数の友軍機を撃破したゲッターカオス2に対して、多数のゲッターポセイドンは背中にあるストロングミサイルを投げ付ける。この大量のストロングミサイルにレンは合体を解除して躲す。

『オープンゲット!』

「チェンジ、カオス3イ!!」

パワー型のポセイドンに対する対抗手段は、同じパワー型であるゲッターカオス3だ。

「ゲッターミサイル!!」

カオス3に合体すれば、優先操縦権を得たドソクはゲッターミサイルを発射し、複数のポセイドンを撃破する。そこから手近なポセイドンに近付き、首根つこを掴んで振り回し始める。

「グレート、アバランチ!!」

掴んだポセイドンを技名を叫びながら振り回し、周辺のポセイドンを次々と撃破していく。あつと言う間に数十機のポセイドンがスクラップになった後、ズタズタになったポセイドンを敵戦艦に向けて投擲!

見事に狙ったその戦艦を轟沈せしめた。

『オープンゲット!』

「チェンジ、カオス1」

そこから複数のゲッタードラゴンのゲッタービームの一斉射を躲して再びゲッターカオス1に戻り、手近なドラゴンをパンチで破壊し、そこから真下のドラゴンにかかと落しを喰らわして破壊する。

この竜馬や竜騎、ライトン達の活躍に触発され、他の戦士たちも加勢して銀河日ノ丸帝国の最強の戦力である防人艦隊と交戦を始める。「ロボット軍団、当ヴァルザカード・セカンドに接近中！ 迎撃します！」

「よし、瀬戸は温存しておいた鉄人28号で出撃を！」

「それはあんたの方が良いんじゃないやねえのか？ 俺は他のを使う」

ヴァルザカード・セカンドの艦橋内でスキアは接近してくる敵部隊の迎撃を行う中、弦十郎はシュンに鉄人28号に乗るように指示を出す。彼はそれを断り、弦十郎に乗るように指示する。

自分は指揮官の立場なので、ここは離れられないと弦十郎は告げるが、シュンはその必要は無いと返す。

「俺はここで指揮を執らねばならん！ 俺がいなければ……」

「これ見て必要か？ 勝手にやらせた方が効率が良さそうだ。あんたも暴れたいんだろ？」

「確かに。各々の好きにやらせておくだけで、敵を圧倒している……」
「だろ。ここは好きに、暴れようぜ！」

「フン。全て平らげても、文句は言うなよ！」

このシュンの返しに、弦十郎はここで指揮を執る必要が無いと答え、鉄人28号へと走った。

これに続いてシュンも、ヴァルザカード・セカンドの格納庫にあるヴァルホークに飛び乗り、鉄人28号に乗って出撃する弦十郎の後へ続いた。

「行くぞ、鉄人28号！ ハンマーパンチ！ フライイング、キックツツ！！」

激戦区へと飛び込んだ弦十郎の鉄人28号は迎え撃とうとしてくるブラックオックスをハンマーパンチで破壊し、そこから離れてジャンプポーズを取り、敵艦に向けてフライイングキックを決め込んで轟沈させた。

轟沈した戦艦の大爆発が巻き起こる中、腕を伸ばし、きりもみ状に回転しながら多数のブラックオックスに体当たりする。その技なのはローリングアタック！

「ぬおおお！ ローリングアタック!!」

弦十郎が叫びながらローリングアタックを行えば、多数のブラックオックスは胴体を引き裂かれて次々と爆発していく。

「初めてにしてはやるじゃねえか！ こっちも、初めてだけどな！」

ヴァルホークに乗るシユンは、ビームショットランチャーを撃ちながらゲッターライガーを撃破しつつ、ゲッターポセイドンにランチャーを突き刺してゼロ距離射撃を決めた。

そこから引き抜き、ゲッタートマホークで斬りかかるゲッタードラゴンに向け、脚部から出した剣の柄よりビームブレードを形成して斬りかかったドラゴンを切り裂いた。そこからさらにポセイドン、ドラゴンと次々と切り裂いて撃破していく。

圧倒的な敵の数に対し、戦士たちの戦意は挫けていかなかった。だが、圧倒していたのは最初だけであり、そこから数の暴力で圧倒される。

「レッドオオオ……」

多数のゲッターロボやブラックオックス相手に無類の強さを見せていたレッドマンであるが、多数のゲッタードラゴンによるゲッタービームの掃射を受けて苦しむ。

「クソっ、どれだけ落としても切りが無い！ わっ!?!」

クガヤのヒーリングダムは接近してくる多数のゲッタードラゴンをフィンファンネルやビームライフルで撃墜するも、撃墜できずに接近を許してドリルで装甲を抉られる。

「このハリケーンは強大過ぎる！ ぬわああ!!」

バイオンBBBに乗る甘寧は、ルストハリケーンを放つが、多数のゲッターポセイドンのゲッターサイクロンに圧倒されて吹き飛ばされる。

ライトンのマジンガーZは多数のブラックオックスにタコ殴りにされ、デッドプールが乗るレオパルドンは多数のブラックオックスの猛攻に耐え切れず、撃破されてしまった。

「ギャアアア！ 俺ちゃんだけ酷い扱いイイイ!!」

音の聞こえぬ暗くて冷たい宇宙で、デッドプールは聞こえぬ叫びを

上げながらそのまま宇宙へと飛ばされて行つた。

数々の戦士たちが圧倒的物量の前に苦戦する中、竜騎、レン、ドック等が駆るゲッターカオス1は、ネオ・ゲッターに圧倒されていた！

「野郎！ グアアア!!」

ネオ・ゲッター1に挑む竜騎であるが、シオルダーミサイルを受けて吹き飛ばされ、チエーンナツクルの追撃を受ける。更にネオ・ゲッター1のプラズマサンダーまで受けてしまう。

『プラズマ、サンダー!!』

「ぐあああ!!」

『合体を解け！ やられるぞ!!』

「ぐう…オープンゲット!!」

プラズマサンダーを受けて高圧電流を感じ、叫び声を上げる中、レンの指示で合体を解いてカオス2に再合体する。だが、向こうもチェンジが可能だ。ネオ・ゲッター1も合体を解除し、高速戦闘型であるネオ・ゲッター2に再合体する。

『向こうもチェンジしたぞ?!』

「あちらも高速戦闘型か！ なればスピード対決だ!!」

向こうも高速戦闘型であると分かれば、レンはネオ・ゲッター2とのスピード対決を始める。凄まじい高速戦闘であり、互いのドリルをぶつけ合うが、この勝負はネオ・ゲッター2のパイロットに分があった。右手で刀を抜き、それでゲッターカオス2を切り刻む。

「ぬわあああ!!」

『仕込み刀だ?!』

「くつ、オープンゲット!」

切り刻まれたゲッターカオス2は、直ぐに合体を解除する。そこからネオ・ゲッター2の追撃を受けそうになるが、咄嗟の判断でゲッターカオス3の合体に成功した。

向こうもまたパワー型で挑むと判断し、合体を解いてパワー型であるネオ・ゲッター3に再合体する。これを見たドックは右拳を開いた左手にぶつけ、自分らを真似たことに腹を立てる。

「野郎、俺たちの真似をしやがって！ 死ねっ、ゲッターミサイル!!」

腹を立てたドソクはゲッターミサイルを放つが、ネオ・ゲッター3は首周りのフィンからゲッタートルネードを繰り出し、ミサイルを全て破壊した。その突風をカオス3にぶつけて怯ませる。

「臆するか！ 死にやがれ！ グレートアバランチ!!」

何とかこの突風を耐えれば、一気にネオ・ゲッター3に接近して自身の必殺技であるグレートアバランチを繰り出すが、ネオ・ゲッター3のパイロットは両足をキヤタピラ走行に切り替え、キヤタピラの力でカオス3を引き剥がした。

「足がキヤタピラだと?!」

引き剥がされたドソクが驚きの声を上げる中、ネオ・ゲッター3は背中よりプラズマ砲、プラズマブレイクを発射して竜騎たちゲッターカオスに更なるダメージを与える。

「「うわああ!!」」

プラズマブレイクを受け、竜騎たちは叫び声を上げる。

戦士たちが自身の最強の軍によって圧倒されるその姿を見て、風鳴訃堂は高笑いする。

「フハハハ、アツハツハツハツ！ 見たか!? これが正義の鉄槌なりッ！ 貴様たちは世界を守護するわしの軍によって粉碎されるのだッ!!」

戦士たちが相手にするのは、この世界その物であり、彼らは訃堂と銀河日ノ丸帝国から見れば悪であった。それを理解している訃堂は圧倒的物量で押される戦士たちに向け、貴様たちは滅ぼされる悪であると告げる。

「うるせえクソ爺…！ 例え俺たちが滅ぼされなきゃならねえ悪だつてな、はい、そうですねと言ったただ滅ぼされてたまっかよ!!」

だが、自分らが悪であろうと、ただ滅ぼされるのを待つのは嫌だと叫び、新ゲッターに乗る竜馬は向かって来る敵機をトマホークで斬り続ける。

「そうだぜえ！ いきなり滅ぼさなきゃならねえ悪だと言われて、黙って死ぬと思ってるのか！ テメエらはよお!! トラウマを刻むくらいに、死ぬまで抵抗してやるッ!!」

同じく圧倒的な物量に押されているシュンも、例え悪であろうがただ殺されるよりも、抵抗することを選び、向かって来る敵機を斬り続ける。

この二人の言葉に、諦めかけていた戦士たちも目覚め、向かって来る銀河日ノ丸帝国の最高戦力に抗い始める。

「俺たちが倒してきた者たちは、こうして必死に生きようと抵抗して来たのか…！俺はその立場になってようやく理解した。立花響の想いを!!」

対抗する手段を持つ少女の背中を見て来た手段を持たなかった弦十郎は、その少女の想いを理解し、鉄人28号の操縦桿を動かして群がって来るブラックオックスを破壊し続ける。

無駄だと分かっても抗って来る戦士たちに業を煮やした訃堂は怒り、機動宇宙要塞「防人」の主砲である国防砲を発射するように指示を出す。

「おのれ、悪足掻きを！ならば一思いに消し去ってくれようぞ！」

国防砲を発射せよ!!」

『直ちに、射線上に居る友軍部隊を…』

「構わん、今すぐ放て！」

『ですが…』

「代わりなど幾らでもおる。とにかく撃つのだ！」

『はっ!』

この指示に対し、通信映像に映る部下は射線上に居る味方を下からせるまで撃たないつもりであったが、訃堂の催促に渋々従い、発射体制を取った。

宇宙要塞「防人」より砲門が開かれ、砲口にエネルギーを溜め込んでいるのを見た鉄人28号に乗る弦十郎は、邪魔なブラックオックスを殴り倒してから味方ごと自分たちを消し去ろうとしていると判断する。

「味方ごと俺たちを消すつもりか!? 風鳴訃堂ツ!!」

護国の人であれば、護国の為に戦う者も守るべきだと思っている弦十郎であるが、訃堂の多数の味方を巻き込んででも敵を排するやり方

に怒りを覚え、叫び声を上げる。

『エネルギー充填、完了です!』

『照準固定、完了!』

「直接わしの手で前世の恨みを晴らしてやりたかったが、今は護国の為、ここは敢えてこの気持ちを抑えよう。撃てい!」

エネルギー充填完了と照準が固定したとの報告に、訃堂は自分の手で前世の恨みを晴らしたかった気持ちを護国の為に抑え、主砲である国防砲の発射を命じた。

『敵機動要塞より高エネルギー砲、こちらに向けて発射されます!』

『やれやれ、味方ごと僕たちを焼き払うと言う魂胆か』

『そんな! 味方までやるなんて!? 異常だよ、あのおじいさんは!!』

スキアから要塞「防人」の主砲が発射される直前だと言う報告に、シコロウガのAIであるアサキムは訃堂の考えを読んで理解する中、有馬は味方ごと自分たちをやらうとする訃堂に怒りを覚える。

放たれるまで秒単位となった瞬間、謎の攻撃が防人を襲い、主砲である国防砲を破壊した!

「な、何事だ!?!」

『攻撃です! 九時方向より強力な火砲による攻撃であります!!』

「何だどつ!?!」

要塞内が攻撃によって揺れる中、訃堂は何者かの攻撃であるかと問えば、直ぐに部下は横から来た攻撃であると報告する。

その攻撃を放った方向に居たのは、一隻の宇宙戦艦と宇宙要塞「防人」を攻撃した正体、マスターガンダムが両腕を組み、宇宙戦艦の艦首の上に立っていた!

「フン。全くだらしない! あの程度で疲弊するとは、鍛錬不足にも程があるツ!!」

宇宙戦艦の艦首の上に立つマスターガンダムに乗る人物は、知る者も知る東方不敗マスターアジアであった!

要塞「防人」を攻撃したのは、流派東方不敗の最終奥義「石破天驚拳」

せきはてんきようけん

! 自身の気を極限まで高め、強力な気功弾を放つ技である!

『なんだ爺さん!? いきなり来てだらしが無いだのと説教を垂れやがって!!』

「言い返す余裕があるなら、迫りくる敵と戦わんか! 貴様らの体たらく、見ておれぬから加勢しに来たまでよ! もっとも、最初から加勢するつもりで行く者共に、ついて来ただけなのだがな」

いきなり来て自分たちにだらしが無いと説教を垂れる東方不敗にいち早く反応したのは、新ゲッターの流竜馬であった。東方不敗は見られないから加勢したと答えたが、最初から戦士たちの援軍として駆け付けた者たちと共に来る気持ちを隠していた。

『何奴だ! 貴様ら!?』

「わしは東方不敗マスターアジア! 護国を語り、侵略行為を正当化する貴様ら銀河日ノ丸帝国を成敗しに来た者の一人よ!!」

『なに、成敗するだと? 片腹痛いわ! 我ら銀河日ノ丸帝国は常に発展し続けているのだ! その発展を妨げる貴様らは我が護国の敵! よって成敗されるのは貴様らぞ!!』

訃堂に問われた東方不敗は直ぐに名乗り、侵略行為を護国の為と謡って正当化する銀河日ノ丸帝国を成敗しに来たと告げる。これに怒りを覚えた訃堂は東方不敗らに国家の発展を妨げる敵であると、怒り心頭に返した。

「哀れよ! 護国の志はあると言えど、己が侵略者と成り果てている事に気付かず、防人を名乗るなど愚の骨頂! 重い腰を上げぬ怠け者の神に代わり、この東方不敗が風鳴訃堂、貴様に引導を渡してくれようぞ!!」

『好き放題ほざきよって! 二度とその不愉快な口、開けぬようにしてくれろッ!!』

「侵略者に身を落とした貴様などに、この東方不敗、負けはせぬわ!」その訃堂の怒りに東方不敗は宣戦布告を行い、宇宙戦艦の艦首を蹴って高く飛び、宇宙要塞「防人」を指して突き進む。その後には続き、宇宙戦艦に搭載されていた戦士たちの増援も続々と出撃した。

『死ねえ! 東方不敗マスターアジア!!』

「フン、雑兵共が!」

東方不敗を打ち取らんと、迫るゲッタードラゴンにライガー、ポセイドン、ブラックオックスに対し、マスターガンダムに乗る老練の武闘家はその四体のロボに乗るパイロットを雑兵と表し、四体を一気に撃破する技を仕掛けた。

「酔舞・湖再現江湖さいげんこうこデッドリーウェイブ！」

叫ばれた技名と共にマスターガンダムは高速で動き、更に四体に触れてその背後に立つ。そこからポーズを取り、東方不敗はある言葉を発する。

「爆発！」

『グワアアア!!』

東方不敗が叫べば、彼を打ち取らんと向かった四体のロボットは爆発した。触れた際に掛け声と共に爆発する気を四体のロボに流していたのだ！

「だらしが無いぞ！ それでも黒鉄の城、マジンガーZに乗る者か!」

『あ、あんたはあしゆら男爵!? それになんだそのマジンガーZは!』

一方、ライトンのマジンガーZをタコ殴りにしていたブラックオックスの集団を撃破したのは、マジンガーZを知る者なら知る右半身が女、左半身は男のあしゆら男爵！

だが、あしゆら男爵が乗っているのは不気味な出で立ちのマジンガーZであった！ ライトンはあしゆら男爵に助けられたことに驚きながらも、あしゆら男爵が乗るそのマジンガーZを見たことにも驚きの声を上げる。

「驚いている暇は無い！ 今は目前の敵を倒すのみ!!」

そう驚くばかりのライトンに敵に集中するように言いつつ、光子力ビームを放って迎撃に来た複数のブラックオックスを撃墜する。

東方不敗やあしゆら男爵らを始めとした援軍を得たことで形勢は逆転。戦士たちは防人艦隊を倒しながら一気に宇宙要塞「防人」へと迫る！

「艦長、船を一隻借りるぞ」

「何をする気かね、ケンシロウ君？」

援軍にやって来た宇宙戦艦の艦橋内にて、袖なしの肩パット付き上

下にレザージャケットとパンツを愛着する北斗神拳を知る者なら知る北斗神拳伝承者のケンシロウは、宇宙戦艦の艦長に搭載艦の一隻を借りれないかと尋ねた。

これに何をする気なのかと問えば、ケンシロウは真剣な眼差しで宇宙要塞「防人」へと突入すると答える。

「あの宇宙要塞に乗り込む！　そして、風鳴訃堂を討ち取る！」

「な、何と無茶な……！　だが、北斗神拳伝承者である君なら出来そうだし……！　許可しよう！」

「必ず、貴方の期待に応える……！」

単身で宇宙要塞に突っ込み、そこに居る風鳴訃堂を討つと答えたケンシロウに艦長は驚愕するが、彼は北斗神拳の伝承者である！

不可能を可能にすると信じ、ケンシロウに搭載艦の使用を許可した。これにケンシロウは笑みを浮かべて感謝し、搭載艦に乗り込んで宇宙要塞「防人」へと突入した。

これより風鳴訃堂との最終決戦の幕が開かれる……！

最終決戦！ 後編

遂に風鳴訃堂との最終決戦の幕が開かれた！

！
戦士たちは迫りくる敵を倒しながら宇宙要塞「防人」へと突入する

「俺が先にあのジジイをぶっ殺してやるぜツ！ ゲッターアアア
ビィイム!!」

先陣を切ったのは、新ゲッター1に乗る流竜馬であった。ゲッター
ビームを放って進路上に居るロボット軍団を排除した後、宇宙要塞
「防人」へと突撃を行う。

「さらに広げる！ 月光蝶ツ!!」

単身で突っ込んでいく竜馬の後に続き、Hiールガンダムに乗るク
ガヤはまたも機体の装備に無い別世界のガンダムの装備である月光
蝶を使い、更に開いた敵陣の穴を広げる。

この蝶のような羽のエネルギーに当てられた敵機と敵艦は、一瞬に
して砂のように崩れ去る。月光蝶は文明を砂に変え、一つの世界を崩
壊させた兵器なのだ！

「あの要塞内に入って、斬りまくろう!!」

頬を赤らめたナハトは、自身が駆るゲシユペンストで周りの敵機を
ブレードで切り裂き、キャノンで吹き飛ばしながら要塞内部への突入
を目指す。

「敵艦を捕捉！ 接近戦で轟沈させます!!」

手近な敵艦を捕捉したスキアは、人型形態のヴァルザカード・セカ
ンドの右手に剣を召還させ、その剣で敵艦を切り裂いて轟沈させる。

「破壊光線！ 電撃！ キング連射砲！ ペダニウムランサー！」

キングジョーを駆るボウンは、機体の素手でゲッタードラゴンを撃
破し、破壊光線でポセイドンを撃破。続けて電撃でライガーを撃破し
て更にはキング連射砲でライガーを二機撃破する。ペダニウムラン
サーでポセイドンを串刺しにした後、右腕に装備したペダニウムラン
サーで敵艦を一隻轟沈せしめる。

そこから三体に分離し、迫りくるドラゴンの大群に波状攻撃を仕掛

け、更に撃破数を稼いだ。

「よし、行くぞ！」

『トリプル・ルストハリケーン!!』

バイオンBBBを駆る甘寧は、ライトンのマジンガーZとあしゆら男爵のあしゆらマジンガーZと共にルストハリケーンを同時に放ち、多数の敵機と複数の敵艦を強風で撃破する。

『出し惜しみは無しだ！ レイ・バスターで決めろッ!!』

「うん、一気に切り込む！ レイ・バスターッ!!」

『シクロウガよ…闇を抱き、光を砕け!』

出し惜しみはしないと言うアサキムの指示に応じ、シクロウガ最大の技である有馬はレイ・バスターを起動した。

空間に魔法陣を描き、そこに突撃して機体を鳥型形態、変形もとい転神する。それから敵の集団に突撃し、虚数空間に多数の敵を引きずり込んだ。

その空間に引きずり込んだ敵を、トラジック・ジエノサイダーを放って全体攻撃を行い、多数を撃破する。この間、アサキムの記憶らしき光景が虚数空間に広がっていた。

「このまま一気に……!」

『罪魂を欲し、貪り! そして自らの魂も喰い尽くせ!!』

アサキムの過去の記憶が空間内に映し出される中、デイスキャリバーを抜いて敵を切り裂き続ける。

『フツ、落ちて見れば、心地良い物だよ』

やがて自分の過去が映像が消え、元の空間へと戻れば、虚数空間に引きずり込まれた全ての敵はバラバラに切り裂かれて爆発した。

敵を切り裂いたシクロウガは敵を切り裂いたデイスキャリバーを振り払い、そのまま次の敵へと向かう。

「ぬおオオオー! ルチャスター・パンチ! ルチャスター・エルボー!

ルチャスター・キック!!」

ルチャドールガンダムに乗るルーチャスは次々とブラックオックスを撃破した後、敵艦に向けて最大の必殺技であるルチャスター・フラッシュ・スーパードヴァを繰り出し、一気に二隻も轟沈させる。

「ほう、わしの超級霸王電影弾ちようきゆうはおうでんいだんに似ておるな！ なれば、本物を見せ
てくれようぞ！ 超級霸王電影弾!!」

ルーチャスのルチャスター・フラッシュ・スーパーノヴァを見た東
方不敗は自分の技と似ていると口にし、それに対抗する形でマスター
ガンダムガンダムの胴体を高速回転させ、全身に気を纏い、一気に敵陣に突っ
込んで多数を撃破する。

「まだまだ終わらぬぞ！ ダークネス、フィンガアア!!」

そこから右手に邪悪な気を溜め込み、それを敵にぶつけて粉碎する
大技「ダークネスフィンガー」を繰り出して敵艦を撃沈した。

「全員、やるな。俺も負けてられん！ ゲッターアアアチェンジアタツ
クウウウ!!」

活躍する者たちの活躍に触発され、聖ゲッターロボに乗る流竜馬は
ゲッターチェンジアタツクを行う。

それは、聖ゲッター1でゲッタービームを撃ちだした後、ゲッター
トマホークブーメランを行い、多数の敵機を撃破する。

「チェンジ、ゲッターツウ！ ドリルアタツク!!」

聖ゲッター2に素早く変形し、ドリルアタツクを行って複数の戦艦
を貫通して轟沈させる。それからさらに追い打ちを掛け、スパイラル
ハリケーンアタツクで更に撃墜数を稼ぐ。

「チェンジ、ゲッタースライ！ ゲッタービームキャノン！ ギガン
トミサイルハリケーン！ 大雪山おろし!!」

無論、これで終わりではない。次は聖ゲッター3にチェンジし、
ビームキャノンを乱射し、それからギガントミサイルを雨あられに発
射。そこで敵戦艦に大雪山おろしを行って撃沈する。

「チェンジゲッターアアア、ワンシン！ シャイン、スパアアアク!!」

最後は聖ゲッター1にチェンジし、決め技であるシャインスパーク
を放つて更なる損害を防人艦隊に与えた。

『お前ら、何もたついんだ？ 全部喰っちまうぞ!』

「へっ、これから付けるのよ！ 行くぞお前らあ!!」

『応ッ!!』

ネオ・ゲッターロボと交戦中のゲッターカオスに乗る竜騎、レン、ド

ソクの三名に新ゲッターの竜馬が催促すれば、竜騎は直ぐに終わらせると言つてネオ・ゲッター1に突っ込む。

強力な援軍と勝機を得た竜騎たちのゲッターカオス1は今、手練れが乗るネオ・ゲッター1を圧倒していた。顔を殴られたネオ・ゲッター1はそのまま吹き飛ぶも、シオルダーミサイルとチエーンナツクルで空かさず反撃するが、カオス1はそれを機動力で躲し、一気に懐へ接近して更なる追撃のパンチを見舞う。

「さっきは好き勝手やってくれたな！　これがお返しなの、ゲッターパンチだアアア!!」

その拳には三名の三つの心が合わさり、ゲッター線が籠っていた。ネオ・ゲッターにやられてばかりだった三人の怒りが、ゲッターカオスの内に眠るゲッター線呼び起こしたのだろう。怒りのゲッターパンチはネオ・ゲッター1の胴体に炸裂し、一気に背中まで貫通した。「これで、貸し借りは無しだ!」

ゲッターカオス1がその拳を引き抜けば、ネオ・ゲッター1は爆発する。

「レッドアロー!」

ケンシロウが乗る高速宇宙船を撃沈しようと、ブラックオックスが襲い掛かろうとしたが、レッドマンが投擲したレッドアローで串刺しにされて撃破される。

その高速船には宇宙に放り出されて氷漬けになったはずのデッドプールが掴まっており、ケンシロウと共に宇宙要塞「防人」へと突入する。この後より竜馬、電龍、嘉承が乗る新ゲッター1とシユンが乗るヴァルホークが続き、要塞のハンガーを攻撃してハッチに穴を開ける。

「ちっ、限界だな!」

殿を務めていたヴァルホークを駆るシユンは、ドラゴンやライガー、ポセイダンの猛攻を受けて機体が限界と悟り、閉じようとするハンガー内へとスラストを吹かせて要塞内へと侵入した。

「さあ、テメエら!　出番だぜ!!」

「きやあああ!!」

「タァーッ!!」

待ち伏せていた迎撃隊をゲッタートマホークで一掃した後、竜馬は新ゲッター1より電龍、嘉承が飛び降り、ライフルを持つ警備兵らを素手で殺害していく。

「北斗百方斬!」
ほくとひやっほうざん

経路秘孔を突き、内部から敵を破壊する一子相伝の暗殺拳、北斗神拳伝承者であるケンシロウは、待ち受けていた百人の警備兵の秘孔を流れるように突いていき、一気に百人同時に殺害する。

『ひでぶっ!!』

一気に百人の警備兵を爆殺したケンシロウは巨大な武者の警備兵に対し、飛び上がったから素早い蹴りを見舞う。

「北斗百裂脚!」
ひやくれつきゃく

「おごっ!? おがああ!!」

高速で放たれた百発の蹴りは正確に秘孔を突いており、巨大武者は内部爆発を起こして爆死する。

「退けえい!!」

『ギニャアアア!!』

ヴアルホークより脱出したシユンは背中の大剣であるスレイブを素早く抜き、力強く振るって数人を一気に惨殺した。

「俺ちゃん復活! からの、無双ガンカタ!!」

要塞内へと入ったことで完全復活したデッドプールは左右の腰にあるホルスターより拳銃を引き抜き、いわゆるガンカタと呼ばれるポーズを取りながら周囲の警備兵らを射殺していく。

『よし、俺も! ちっ、お前らがやられたら次は俺だぞ!!』

新ゲッター1に乗る竜馬も、要塞内部へ突入して訃堂の抹殺に向かう集団に続こうとしたが、多数のゲッタードラゴンに阻まれ、抗戦を余儀なくされる。

「僕も暴れさせておくれよ…!」

『切り裂き女か! テメエも来てたとは、仕事が捗りそうだぜ!』

単独で戦闘を余儀なくされると思っていた竜馬だが、ゲシユペンストで要塞内部にまで侵入していたナハトが救援に駆け付けたことで、

自分らを包囲する敵の掃討が滞りなく進むと思い、彼女のゲシユペンスト共に襲い掛かる敵を切り裂き続ける。

『侵入者四名、風鳴さまの方へ向かっております!』

「おのれえ…… 逆賊共め! ならばこちらも、奥の手を使うまでよ!」

一気に形勢を逆転され、拳句に自分の牙城である防人まで侵入された事に怒りを覚えた訃堂は、奥の手を使うことを決め、ある薬を自身の袖をまくった左腕に注入した。それから腰を下ろしている椅子の近くにあるスイッチを押し、ある人物に出撃を命じる。

「聞こえるか、弦十郎よ。鉄人82号で出撃し、逆賊共を討つのだ!!」
『フン、ようやく出番か! 久しぶりに暴れてやるとするか!!』

その通信映像に映る訃堂が出撃を命じた人物は、弦十郎であった! だが、似ているのは外見だけであり、性格はとても弦十郎ではない。全くの別人と言って良い。この世界の弦十郎が乗る鉄人82号は、開いたハッチより豪快に出撃して戦士たちの前に姿を見せる!

弦十郎が乗る鉄人82号が出撃した後、ある薬を自身に注入した訃堂は徐々に若返っていた……!

「な、なんだこいつは!」

『これは、鉄人28号……だとっ!』

要塞付近まで達した竜騎や弦十郎たちの前に現れたのは、先に述べたこの世界の弦十郎が駆る鉄人82号だ。その姿を見た一同は驚きの声を上げる。

大きさは別世界の弦十郎が乗る鉄人28号よりやや大きく、背中には二門のキャノン砲を備え、両腕にはガトリング砲が搭載されている。姿は鉄人28号に似ているが、戦闘を目的として開発されたロボットであると確認できる。

『フッフ、逆賊共。この俺が乗る鉄人82号を見るのは初めてか? だが、今日が貴様たちの最後だ。たっぷりと見ておくが良い!』

「あれに乗っているのは、俺……だとっ!」

映し出された鉄人82号に乗る人物、この世界の自分を見た弦十郎

は更に驚く。だが、性格が自分と全く違うことは良く分かる。そんな弦十郎が乗る鉄人82号に対し、戦士たちは何だと言わんばかりに挑みかかる。

「そんな物が何だ!? 俺の正義の鉄拳を受けて見ろ! ルチャスター・ファイヤー・パンチ!!」

先に攻撃を仕掛けたのは、ルチャドールガンダムに乗るルーチャスであった。拳に気を纏わせ、炎の拳を鉄人82号に繰り出した。

「これで終わりにしてやる! ルストハリケーンI!!」

バイオンBBに乗る甘寧は、鉄風拳を使ったルストハリケーンIでルーチャスの炎の拳に続ける。この二つの強力な攻撃は、確実に鉄人82号を破壊できると思われたが、当の鉄人82号は無傷であった。

『な、何ッ!?!』

「その程度か? ならば、一気に殲滅する! フルバースト!!」

派手な攻撃でも自分が乗る鉄人82号に傷一つ付けられないルーチャスと甘寧に対し、邪悪な弦十郎は鉄人82号の全火力を駆使したフルバースト攻撃を行い、戦士たちの大半を戦闘不能に追いやった。

「うわああ!!」

『くっ、シユロウガがもう…!』

「なんて、圧倒的な火力!」

先に攻撃したルーチャスや甘寧を始め、ボウン、有馬を立て続けに戦闘不能に追いやった。

「フィンファンネル…!?!」

『遅いぜっ!!』

「ぬわああ!!」

攻撃を防ぎ切ったヒーレガンダムに乗るクガヤは直ぐにフィンファンネルを展開しようとするが、鉄人82号はあの凶体に対して素早く、一瞬で懐に飛び込んで強力な蹴りを入れ込み、彼のガンダムを戦闘不能に追いやった。続けざまに聖ゲッターの流竜馬も、拳のラツシュを打ち込んで戦闘不能に追いやる。

『ぐわああ!!』

「な、なんて野郎だ！ あれほど強い聖ゲッターも!？」

『今度は貴様だ!!』

「っ?! グアアア!!」

聖ゲッターがやられたことで浮足立ったところを、一気に鉄人82号に付け込まれ、ゲッターカオスはパンチで吹き飛ばされた。弦十郎が乗る鉄人28号も吹き飛ばされ、ライトンのマジンガーZ、あしゅら男爵のあしゅらマジンガーZも立て続けに倒される。

「この敵は危険！ 直ぐに排除を…」

『隙だらけだ!』

「グっ…! 被害甚大…!!」

戦士たちを次々と倒した鉄人82号はスキアが乗るヴァルザカード・セカンドにまで迫り、大量のミサイルを撃ち込み、それを囷に接近してヴァルザカードを大破寸前にまで陥れる。

「とどめだ!」

『馬鹿者が！ このわしが残っておるわ！ じゆうにおうほうばいだいしゃへい 十二王方牌大車併!!』

ヴァルザカードを沈めんとする鉄人82号に対し、残っているマスターガンダムを駆る東方不敗は拳を前面に押し出し、大きく円を描きながら梵字を出現させ、それから気で自分の小さな分身を多数作り出し、それで対象を攻撃した。

だが、その全てはことごとく叩き潰され、鉄人82号からの反撃を受けて吹き飛ばされた。

『ぬアアア!?!』

「フハハハ！ 全く、物足りんな！ これでは俺が出なくとも、この戦は勝つていただろうに!!」

圧倒的に力を持つ弦十郎と鉄人82号の前に、戦士たちは倒されたかに見えた。

だが、倒れたはずの鉄人28号は動き出し、鉄人82号に無線連絡を行って弦十郎はあることをこの世界の自分に聞く。

「少し聞くぞ、別の世界の俺よ!」

『なんだ、異世界の俺？ 遺言でも言いたいのか?』

「そう捉えても構わない。一つだけだ。この世界の俺はどんな映画が

好きなんだ？」

その問いは、落ち着いた際に思い付いた何気ない質問だった。風鳴弦十郎は映画が好きなのだ。あのような性格なのは見ている映画の影響だと思い、弦十郎はその勘に従って別世界の自分に映画が好きかどうかを問う。

別世界の自分より返ってきた答えは、弦十郎にとって怒りを覚えるどころか、殺意を覚えさせるものであった！

「フン、俺はそんな下らん物など見ない。俺の最大の楽しみは、貴様ら逆賊共を絶望に徹底的に叩き付け、罫り殺すことだ！」

とても弦十郎とは思えない返答に、別世界の自分に怒りと殺意を覚え、鉄人28号の太陽エネルギーの力を覚醒させる。

「お前はッ！ お前は一番言ってはならないことを言ったッ！！ この俺の前で映画を侮辱することは！ 例え俺であつても許されないことだッ！！」

『ほざけッ！ そのような物に現を抜かす貴様は最初から負け犬なのだッ！！ この俺に絶望し、無様に死ぬのが貴様の運命だア！！』

その弦十郎の怒りに、この世界の弦十郎は嘲笑うように鉄人82号の巨大な拳を鉄人28号にぶつける。それに触発されてか、ライトンのマジンガーZは何処からともなく現れた百発のロケットパンチを鉄人82号にぶつける！

『な、なんだこのロケットパンチの数は!?!』

「風鳴さん、あんたに同意だ！ 例え別のあんたでも、それは許されない！ だから俺は、あんたを一〇一回殴るッ!!」

『何を怒っているか知らんが、我らの拳を合わせて一〇三回だ！ ダブルロケットパンチッ!!』

自身向けて飛んでくる百発以上ものロケットパンチに驚く鉄人82号の弦十郎に対し、ライトンは鉄人28号に乗る弦十郎の気持ちに賛同して、自分のマジンガーZを巨大なロケットパンチに変形させて突っ込む。

やられてばかりだったあしゆら男爵も、弦十郎とライトンの怒りの気持ちは分からなかったが、自分らも負けずにとまだある両手で口

ケットパンチを行い、百発を一〇三発にした。

「クソっ！ こんなふざけた技に、この俺が！ この俺が負けるはずなど無いのだッ!!」

飛んでくる百発以上のロケットパンチに、両手のラツシュで全て迎撃しようとするが、巨大なロケットパンチに変形したライトンのマジンガーZの攻撃は防ぎ切れなかった。

「うおおお!!」

『な、なんだこの巨大なロケットパンチは!?!』

「俺はライトン・イエーガー！ これは俺のロケットパンチだアアア!!」

巨大な拳を受け止められず、弦十郎の鉄人82号は巨大なロケットパンチとなったライトンのマジンガーZに殴られる。

『グアアア!?!』

巨大な拳に殴られた鉄人82号が吹き飛ぶ中、更なる追撃が行われる。それは、動力源である太陽エネルギーを解放させ、全身に纏った鉄人28号による特攻であった！

「お前は、お前だけは絶対に倒すッ！ 例えこの身が犠牲になろうともッ!!」

全身に太陽エネルギーを帯びた鉄人28号に乗る弦十郎は、己の命を燃やす勢いで操縦桿を強く押し込み、全力で鉄人82号に突っ込む。この特攻を鉄人82号は避け切れず、鉄人28号の特攻を受けた。

「馬鹿なッ!?! こんなところで、こんなところでこの風鳴弦十郎が敗れるなどトッ！ あり得ん！ あり得んのだアアア!!」

鉄人28号の特攻を受け、太陽エネルギーに焼かれる弦十郎は、自分が死にゆくことを理解できず、そのまま要塞に衝突して機体と共に消滅した。

この世界の弦十郎が駆る鉄人82号と戦士たちとの決戦が行われている頃、要塞内へと突入したシュン、嘉承、電龍、デッドプール、ケンシロウの五名は討堂がいる間への突入に成功した。

扉を守っていた護衛共々吹き飛ばして終点の間にやって来たデッドプールはそこで待っている訃堂に、剣先を向けながら宣言する。

「よし、次は貴様だ。ジジイ…？ あれ、誰ですか？」

扉を破壊し、門番を殺害した太刀で訃堂を討つ気満々で居たデッドプールであるが、そこには訃堂の姿は無く、年齢三十ほどの青色の長髪の武人の如くの男であった。

誰かと問えば、男は答えることなく腰にある護国挺身刀・群蜘蛛を引き抜き、離れた距離に居たはずのデッドプールを抜いた瞬間に振るった斬撃で真つ二つに切り裂いた。

「あらあつ!? もしかして、風鳴訃堂さんですかアーツ!」

「左様、わしは風鳴訃堂。護国の科学力で、全盛期の頃に若返った!」
「ジジイの若返りとか! これ、女性向けじゃねえから!」

自分を切り裂いた男にデッドプールは訃堂なのかと問えば、その男はそうであると告げ、護国の科学力で若返ったと答える。これにデッドプールは地面に落ちた際に、訳の分からないことを叫んだ。

デッドプールが驚きの声を上げる武人は、紛うことなきこと無き風鳴訃堂であった!

白髪に染まり果てた長髪は若き頃の青いものとなり、鋭い二つの眼光を輝かせ、顔には一切のしわが無い。真正正銘、武人の顔立ちだ。老いた身体は嘘のように消え、弦十郎の如き筋力を見せる。護国の武人とも言うべき姿である。

その気迫、紛うことなく風鳴訃堂本人だ。

「テメエ、どうやら訃堂のクソジジイらしいな!」

「妖術を使い、若返りを果たしたのか」

「若返ったところで、俺たちに勝てる保証は無いぞ」

デッドプールがやられてから入って来たシユン、嘉承、電龍、ケンシロウは若返った訃堂の姿を見て、殺気と気迫で直ぐに本人だと分かる。

「このわしが、貴様らに勝てる保証が無い? フツ、それはこちらの台詞ぞ。この若返った身体、貴様らが束になって掛かろうとこのわしが負けるという保証はない!」

向こうは勝てないと言う四名に対し、力が有り余る訃堂はそちらが勝てないと啖呵を切り、愛刀で斬りかかる。その速さ、まさに疾風の如く！

『っ!?!』

恐ろしいその速さに一同は驚き、先の考えを撤回した。

シユンはスレイブで斬撃を防いだが、両肩と両足が切れてそこから血が噴き出す。嘉承は左肩に斬撃でも当たったのか、血を噴き出していた。ケンシロウは右肩の肩パットが斬撃で吹き飛び、電龍は脇腹を斬られた。

「こいつ、ヤバいぜ！」

「若返った分、速さもパワーも上がっている！」

「拙僧等も、本気でやる他ないようだ」

「俺ちゃんも本気出したいです」

若返った訃堂は危険と判断した一同は、本気で挑む他無いと決意する。電龍は木星阿片を摂取し、痛覚を遮断して目前の訃堂に集中する。

各々が本気の姿勢を見せる中、訃堂はそれを敢えて見逃す。目前の四名が本気になって掛かって来たところで、全員を倒せる自信があるのだ。

「そうでなくてはな。今の状態では張り合いが無さ過ぎる。例え束になって本気で掛かって来ても、このわしに勝てる保証は無いと思うがな」

「言ってくれませ。後悔すんなよ！」

「例え99パーセント勝てなくとも、勝つ確率が1パーセントでもあれば挑むのが北斗神拳伝承者だ！」

例え本気になって束になろうとも、自分には勝てないと豪語する訃堂に対し、シユンはベルトのスイッチを押して自分最大の装備を起動させる。それは瞬く間にシユンの大きな体を覆い尽くし、狼のような甲冑となる。

嘉承もお経を唱えて念力を全身に纏わせ、最大の状態へと移行する。ケンシロウは北斗神拳の本気で使用する呼吸法を発動した。そ

の瞬間にケンシロウのジャケットは身体より発せられる闘気で吹き飛び、上半身が裸となり、北斗七星の如く刻まれた胸の七つの傷が露わとなる。

「転龍呼吸法！てんりゅうこきゅうほう 静から動へと転じる時に、転龍呼吸法の奥義はある。この奥義を見た者には死あるのみ。そして貴様は必ず俺が倒す……！」

「小賢しい！ その程度になっただけで、この護国の鬼たるわしに勝てると思うなッ!!」

ケンシロウの勝利宣言が癪に障ったのか、怒りを覚えた訃堂は全力で群蜘蛛を振るい、大きな斬撃を飛ばす。これを戦士らは高速で躲し切り、反撃に転じる。

先に反撃したのは、嘉承であった。念力と尋常ではない身体能力を誇る僧である彼は、床を蹴って高く飛翔し、右腕に念力を溜め込み、それを床に立つ訃堂に向けて一気に放出する。

「つぁーっ!!」

叫びと共に放たれた念力のビームは訃堂に命中するが、彼はそれを耐え切り、斬撃による反撃を行う。

「何のこれしきー！」

「ぬうん！」

放たれた斬撃を両腕に込めた念力で防ぐ嘉承。追撃を仕掛けるはサイボーグである電龍だ。老人でも危険なのに若返り、更に危険度が増した訃堂を早期に倒さねばならぬと判断した電龍は、自身最大の技であるエレクトニック寸勁を叩き込もうとする。

「エレクトニック寸勁！」

「甘いわー！」

だが、既に訃堂に見切られており、真つ二つに切断されてしまう。上半身と下半身に別れた電龍であるが、サイボーグであるためにまだ活動していた。次なる敵の攻撃に備えている訃堂はこれに気付かず、北斗神拳の技で攻撃してくるケンシロウの迎撃に向かう。

「北斗飛衛拳！ひえいけん！」

「とぁーっ！」

飛び蹴りを放つケンシロウに対し、訃堂は同じく飛んで群蜘蛛を振るう。互いにすれ違い、同時に地面に着地すれば、ケンシロウの右肩が切れて血が吹き出す。

「フン……なっ!？」

相手に致命傷を与えたと思っていたが、秘孔を突かれており、すれ違いざまに振るった右肩が爆発して血が噴き出た。

痛み思わず声を上げる中、全身に狼の鎧を纏い、恐ろしい速さで迫るシユンのスレイブによる斬撃が訃堂を襲う!

これを痛みに耐えながら群蜘蛛で防ぐが、一撃だけでなく、二撃、三撃と大剣とは思えない速度で振るわれてくる。流石の訃堂と言えど、鎧を纏うシユンの剣の前には防戦一方であった。

「隙ありイーツー!」

シユンが相手の注意を引き付ける中、嘉承はその背後より念力の光線を放つが、気付いた訃堂はわずかに生じた隙を突いて吹き飛ばし、それを躲して念力による攻撃を行う僧に高速で接近する。

「っ!？」

瞬きする間に接近してくる訃堂に対し嘉承は空かさず反撃するが、既に目の前の剣士は大太刀を振るった後であり、次に気付いた時は自分の左腕が飛んでいた。

左腕を斬り飛ばされた嘉承は痛みに声を上げず、残った右手に念力を込めて殴ろうとするが、訃堂は二撃を振るって胴体を切り裂く。血が噴き出て嘉承が倒れる中、ケンシロウとシユンが恐るべき速さで接近し、攻撃してくる。

この同時攻撃に訃堂は若さで戻った並外れた反射神経で避けて群蜘蛛で反撃するが、その斬撃はシユンのスレイブで防がれた。そこへケンシロウの直接接触れず、闘気で秘孔を突ける技を繰り返す。

「何イツ!？」

「天破活殺!」
てんはかつさつ

「グっ、グあああ……!」

放たれた闘気で腹の秘孔を突かれ、訃堂の腹が爆発する中、死んだと思っていたデッドプールと電龍の追撃が迫る!

「俺ちゃんが喋らなかつたのは、この時の為だよ斬りッ!!」

先に仕掛けたのはデッドプールであった。背中の上の二本の太刀で討堂の身体を斬り付け、更に突き刺して傷を抉る。そこへ上半身だけで動く電龍のエレクトリック寸勁が炸裂する!

「エレクトリック寸勁!!」

「ぬああああ!!」

電撃の寸勁を受けた討堂は吹き飛び、壁に激突する。

「おのれエ……!」

「まだ終わらぬぞ!!」

「なっ!? ごうッ!!」

直ぐに起き上がる討堂であるが、己の斬り落とされた左腕を念力で浮かし、弾丸の如く飛ばした嘉承の追撃を受けた。飛ばされた左腕は討堂の首を掴み、首を絞めつけ始める。

それを即座に左手で振り払うが、既にケンシロウが接近しており、既に奥義を発動している後であった。その名は北斗百裂拳! 北斗神拳奥義の一つであり、相手の身体に連続で拳を叩き込み、複数の秘孔を指突する。繰り返す拳の速さ、三秒間に五十発以上!

「北斗百裂拳! あたまたーっ!!」

その連続の拳を受けた討堂の身体は浮かび上がり、めり込んでいた壁を突き破る。それでもケンシロウの拳は止まらない!

「あたたーっ! オワッターっ!!」

「グアアア!! お、おのれえ……! 死ぬい!!」

最後の拳を打ち込まれ、吹き飛んだ討堂は直ぐに立ち上がり、左手で懐に入っているモーゼルC96自動拳銃を抜くが、連続で秘孔を突かれており、引き金に指を掛けられずにいた。

「ゆ、指が動かん!? な、なんだこれは!?!」

指を引き金に掛けられず、動揺する討堂に向け、ケンシロウは秘孔を突いているので引けないと答え、更に拳銃を抜いた時点で負けていると宣告する。

「それは秘孔を突いたからだ。剣ではなく、拳銃に頼った時点で貴様の負けだ。だが、貴様は北斗神拳では殺さん。剣士としての貴様の名

誉にかけ、剣士の剣で死ぬが良い」

剣士としての名誉として、剣士の剣で死ぬと言うケンシロウの宣告の後、スレイブを振るわんとするシユンが目前に現れ、秘孔を突かれて動けずにいる訃堂の胸を切り裂いた。

「馬鹿な…!?! この若返ったわしが、敗北するなど…!」

「風鳴訃堂、あんたは手を汚し過ぎたよ。だが、剣士としては最高だったよ」

それと同時に鉄人28号に乗る弦十郎が、この世界の鉄人82号に乗る自分に太陽エネルギーを使つて特攻していた。そのまま要塞へと衝突し、その衝撃で要塞内は揺れる。

動力源にまで達しており、要塞内の各区画で爆発が巻き起こっていた。ここでも爆発が起こる中、シユンは護国の為に手を汚した訃堂に向け、剣士としては最高だったと告げる。これを訃堂は侮辱と捉え、シユンを睨み付ける。シユンの一撃が瀕死の物であったのか、訃堂は元の老人へと戻りつつあった。

「ぶ、侮辱か…! このわしを、このわしを憐れんでいるつもりか…!?!」

「侮辱ね。これが侮辱に聞こえるとあ、あんたも落ちたもんだ。剣士としてのあんたは、俺が羨むくらいの腕前だったよ」

「フッフ、その言葉、誉め言葉として受け取っておこう…! だが、わしは恨むぞ…! わしを討ち、護国を踏み荒らさんとする貴様らを…!!」

剣士としては羨むくらいだったと言うシユンに対し、訃堂は笑みを浮かべたが、最期まで護国の鬼としての自分を貫き、シユンたちを恨みながら息絶えた。

こうして、訃堂と彼が率いる銀河日ノ丸帝国の最強戦力との決戦は幕を閉じた。

終わりになき戦いへ

この世界の弦十郎も別世界の弦十郎に敗れ、宇宙要塞「防人」へと突入した戦士たちによって風鳴訃堂も討たれた中、防人は弦十郎の鉄人28号の太陽エネルギーを使った特攻で動力源をやられ、内部爆発を起こしていた。

直ぐに脱出する戦士たちは、増援の宇宙戦艦が送り込んだ搭載艇に回収され、何とか脱出に成功した。

「これでようやく…!」

『ああ、俺たちも戦いもこれで終わりだ』

『全く、何度死にかけたことが…!』

ゲッターカオスに乗る竜騎、レン、ドソクの三名はようやく戦いが終わったことに安堵したが、戦いはこれで終わりでは無かった!

「な、なんだっ!?!」

安堵した戦士たちが乗る機体と艦艇のレーダーに、異常な反応を知らせる警報が鳴り響く。

そのレーダーが示す方向へと一斉に視線を向ければ、何もない宇宙空間が歪み始め、そこから太陽の明かりだけが照らし、空気も酸素も無い宇宙では聞こえぬはずのドワオと言う轟音が鳴り響いた後、そこに奇妙で奇天烈な空間が現れた。

歪んだ形で現れた空間より、シユンが知る人物の顔が浮かび上がる。その人物は、遥か大昔に自分が倒したはずの男であった!

「て、テメエは…! ガイドルフ・マツカサー!?!」

空間より顔を覗かせる人物を見たシユンは、思わずその名を口にす

る。シユンが名を口にした後、空間より顔を覗かせる浅黒い肌で金髪の男であるガイドルフは、笑みを浮かべながら語り掛けて来る。通信機越しではない、直接脳内のガイドルフの声が聞こえてくるのだ。

「言ったであろう、光ある限り影は不滅である。故に我は何度でも蘇るのだ。そして光と影の戦いは未来永劫続く。再開は必然であるのだ」

光ある限り影は生まれ続ける。

そう語るガイドルフに対し、戦士たちは戦おうとしたが、インベーターとの決戦に続いて銀河日ノ丸帝国との二度の決戦を立て続けに行い、増援を得てもその消耗は甚大なる物であった。

新たに現れたガイドルフと言う脅威に、戦士たちはもはや太刀打ちできない、否、太刀打ちできる者はわずかに居た！

「ここからは俺だけで十分だ。奴と今度こそ決着をつけてやる！」

それはシュンであった。彼は全身にまだ鎧を纏った状態であり、その鎧は宇宙空間でも活動出来る程の性能を有していた。

ガイドルフと太刀打ちできるのは自分一人だけだと思っているシュンは、直ぐに宇宙戦艦より飛び出し、疲弊しきったところへ現れた脅威に一人挑んだ。

もう一人、否、四名がガイドルフに太刀打ちできた。その名は今川竜騎、レン・クー、マ・ドソクを始めとしたゲッターカオスのゲッターチームと、新ゲッターロボに乗る流竜馬だ。

「みんなは駄目なようだが、俺たちは行けるぜ！」

『ああ、もうこの世界に悔いはない！ もはや俺たちは後戻りはできない！ 行ける所まで行くだけだ!!』

『奇遇だな。俺もだぜ！ このロボットに選ばれちゃった俺たちは、どうせ帰る場所もねえ奴らばかりだ！ この地獄、とことんつき合うぜ!!』

『もう俺も帰れねえ身だ！ 今さらのこのこ出て来た野郎なんぞ、俺が叩き殺してやる！ 行くぜツ!!』

もはやその四人の男たちに帰る場所はない。この世界に居る竜騎とレン、ドソクは全てを失ったのだ。別の世界から来た竜馬も、全てを捨ててゲッター線との戦いを選んだ。先に向かったシュンは取り残された身であり、もう誰にも覚えられていない。

帰る場所も無ければ、待つ者も居ない五人の男たちは終わりの見えぬ戦いに挑めるのだ。

「無茶だ！ あんた等五人で戦うなんて!!」

勝てるかどうか、勝っても帰ってこれるかどうか分からないガイ

ドルフとの戦いに挑む五人の男を、ライトンは呼び止めようとするが、彼らは止まらない。

そのライトンに対し、宇宙戦艦の艦橋内に居る切断された左腕の治療を受けている嘉承は、戦う事しか残されていない彼らを止めるのは不可能と告げる。

「ブラウナー殿、拙僧等はそこへ至れない。帰るところも無く、待つ者も居ない彼らには戦う他に道は無い」

『俺たちは二度の激戦を行っている！ 奴らも同じなはずだ！ 戻るんだ！ 無茶過ぎるぞ!!』

この嘉承の止めるのは不可能と言う言葉に、ライトンは無理だと分かって呼び止めるが、彼らは止まらずにガイドルフが待つ空間へと向かっていく。

そんなライトン等に対し、勝つかどうかも、終わるかも分からない戦いに挑む五人は笑みを浮かべて別れを告げる。

「短い間だったが、楽しかったぜ。ライトンの兄ちゃんよ。だがな、俺たちは何も残っちゃいないんだ。待つてる奴も居ない。この道しか残って無いのさ。お前らも俺たちのようになるんじゃないやねえぞ」

笑みを受かべながら別れを告げ、自分らのように何もかも失うなど言う竜騎に続き、レンがその理由を告げる。

「竜騎の言う通り、俺にも帰る場所もない。仲間は今全て死に、奴と同様だ。それにこの世界に悔いも無い。こんな世界でも守る価値があるか確かめに行くだけさ。俺のようなテロリストは、直ぐに忘れるのが一番だ」

レンもまた何も残されていない人間だった。こんな世界でも、命を掛ける価値があるかどうか確かめるために向かうのだと、ライトンに終わりなき戦いに挑む理由を告げた。

この次にドソクが照れ臭そうな顔を浮かべ、頭をかきながら戦いに挑む理由は同じであり、ライトン等には来ないように告げる。

「俺もこいつ等と同じなんだがよ、何も残って無いのさ。だがな、お前らには俺たちには無い物がまだ残っているはずだ。例えば、家族や仲間恋人とか。帰る家だってあるはずだ。お前らは、そこを守るた

めに残れ。絶対に俺たちのようにはなるなよ！」

同時に自分らと同じようになると告げれば、三人が乗るゲッターカオスロボはガイドルフへと向かっていった。新ゲッターロボの竜馬も別れの言葉を告げる。

「こいつを含め、俺にとつては二回目の別れよ。なに、お前らが足手纏いって言ってるわけじゃねえ。テメエらは残してあるもんがある。俺もドソクのおっさんと似たような理由さ。俺が言いたいのはな、俺たちについてきたいからって、その残してあるもんを捨てんじやねえぞ！ そんな時は俺がぶつ殺してやる！ あばよ!!」

仲間たちとの別れは、その竜馬にとつては二回目であった。まだ残っている者を捨ててまで来るようなら殺すと笑顔を浮かべながら告げ、ガイドルフの元へ続くゲッターカオスに続いた。

最後にシユンが振り返り、短い間であるが、共に戦ってきた戦友たちに告げる。

「畜生、俺の言いたいことを言ってきやがって。なに、先に行ったあいつ等と同じ理由さ。言えることとすれば、お前らに残ってる物の所へ帰って事だ。勢い付いてついてこられりや、こつちが迷惑なんだな。そいつ等を守るためにお前らは帰れ。別に嫌って言ってるわけじゃないんだぜ？ お前らはお前らと戦いをしろ。待つてる奴らや、助けを必要としている奴らの為に戦うんだ」

残っている者たちの為に戦え。

そう言って区切った後、シユンは遂に別れの言葉を告げる。

「短い間だったが、楽しかったぜ。あばよ、戦友たち。また何処かで会おう！」

その別れの言葉を告げた後、シユンたちはガイドルフが待つ空間へと消えていった。

「行っちゃまった…」

損傷が激しく、ほぼ動けないマジンガーZの頭部に着いたパイルダーのコクピット内で、ライトンは消えていく空間に手を伸ばしながら茫然とした。

「ちっ、俺ちやんがせっかく出たって言うのに、殆ど活躍してねえ上に

綺麗に打ち切りエンドを決めてんじやねえよ！ まあ、俺ちゃんも待ってるのが居るけどさー！」

宇宙戦艦の艦橋内で同じく居るデッドプールは、この結末に不満であったようだ。シユンが最後に言った待っている者や助けを必要としている者たちの為に戦えと言う言葉に、デッドプールは同意しつつ付近の席に座る乗員の押し退け、その席へと座る。

だが、歪んだ空間が消えた瞬間、この世界に連れて来られた戦士たちは次々と消え始める。

「友軍機……！ は、反応喪失していきますー！」

「なんだと!？」

『き、機体が消えていく……!? 俺もだ!?!』

レーダー手からの報告に、艦長は驚きの声を上げる。どうやら役目を終えたらしく、元の世界へ自動的に返されるようだ。

艦橋内に居る戦士たちも消えていくが、嘉承や東方不敗、ケンシロウは消えていない。出撃しているあしゅら男爵も同様だ。この世界の者も消えていなかった。

「嘘だろ!?! こんな打ち切りの仕方あるか!? 俺ちゃんこれからこの世界に八つ当たりすんのに!! ヤダーツッ! バツ!!」

デッドプールは訳の分からない言葉を叫びながら、この艦より消えた。元の世界へと戻ったのだらう。弦十郎もそのはずだ。

元の世界に返されていない戦士たちは、自分らが残ったことで、やるべきことを理解する。それを悟ったように、怪獣ハンターレッドマンは何処かへと飛んで行く。どうやら、付近に怪獣を感知したようだ。

「我々がこの世界に残った理由、分かる気がするな」

『ああ、どうやら我々がこの世界を正さねばならぬようだ』

『そうなるも、もっと戦士が必要になろう。この世界で抗う者たちを、集結させねば……!』

『必ずいるー! この支配に抵抗する者たちが……!』

自分らがやらねばならぬことを理解した戦士たちは、この世界を支配する大国家、銀河日ノ丸帝国と戦うべく、現宙域を離れた。

彼らもまた、終わりが見えぬ戦いにその身を投じたのだった。

「気を付けろ、お前たち。力に溺れ、蛮行を働く俺と戦うことになるかもしれない」

一足先に自分の世界へと帰った風鳴弦十郎は、本職である国連の特異災害対策チームSONGの司令官に戻り、別の世界へと向かおうとする少女たちに、別世界の自分と交戦する可能性があるかと注意していた。

これに別世界へと赴く少女たちは笑う中、実際に力に溺れた自分と交戦したことがある弦十郎は喝を飛ばす。

「笑い事じゃない！俺は確かにその世界で俺と戦った。奴は俺の映画を侮辱し、下らん娯楽と吐き捨てた！そんな奴と戦うことになれば、幾度となく世界を救ってきたお前たちでも危険だ！十分に気を引き締めていくんだ!!」

この弦十郎の喝に五人の少女と成人女性一人は気を引き締め、この世界の危険を取り除くべく、異世界へと向かった！

「ライトン・イエーガー、参上！悪党どもよ！このライトンと黒鉄の城、マジンガーZが相手だ!!」

元の世界へと帰ったライトン・ブラウナーは、自身の駆るマジンガーZと共に破壊を行う悪のロボット軍団の前に姿を現し、名乗り拳げて単独で挑む。

「ロケットパンチ!!」

迎え撃ちに来た悪路のロボット軍団を拳や蹴りで何機か撃破した後、ロケットパンチを放った。そのロケットパンチは一気に二機を貫き、マジンガーZの右腕に戻る。

「オラオラ！やられなくとも当たる！八つ当たりだ!!」

同じく自分の世界へと戻っていたデッドプールはイマガワでの戦いの鬱憤を晴らすため、何処かのテロ組織のアジトを仲間を使って割り出し、そこに単身乗り込んで暴れ回っていた。

「二つ！二つ！三つ！四つ！もうめんどくせえ！テメエら全員チミチャンガだ！デッドハリケーン!!」

複数のテロリストらを二丁拳銃で射殺していく中、面倒になって来たのか、デッドプールは背中への振り回しの刀を抜き、必殺技を叫び、回転しながらテロリストを切り裂いた。

「レッドファイト！」

元の世界に留まっている赤い怪獣ハンター、レッドマンはある惑星の荒野で四体の怪獣を発見次第、掛け声を上げて挑む。数は多いが、レッドマンには関係ない事だ。

「レッドアロー！」

右手にレッドアローを召還し、それを投擲して一体の怪獣を串刺しにした後、更にもう一本レッドアローを召還して、更に二体目を串刺しにした。

「レッドナイフ！ レッドキック！」

次にレッドナイフを召還し、突っ込んでくる怪獣に飛び蹴りをかまして転倒させれば、馬乗りとなってレッドナイフで滅多刺しにする。

最後の四体目を少し手こずりながらも瀕死状態にすれば、まだ息のある怪獣を高台へと引きずりながら上がっていく。頂上まで上げれば、瀕死の怪獣を頭上高く持ち上げ、そこから怪獣を落とした。

「レッドフォール！」

技名と共に投げ落とされた怪獣は地面に叩き付けられ、爆発した。その爆発を確認したレッドマンは空を高く見上げ、空に向かって右手を翳した。赤いあいつレッドマンの勝利のポーズである。

一方で他の戦士たちは、それぞれの世界でシユンが言った自分らの戦いをしよとの言葉に従い、自分たちの戦いに身を投じていた。

クガヤ・アルファはヒーレガンダムを駆り、平和のために戦っている。終わる気配は無いが、彼は諦めることは無いだろう。

ナハトは愛機であるACゲシユペンを駆って、荒野の真ただ中で敵ACとの死闘を繰り返している。押され気味だが、ナハトは笑みを浮かべながら操縦桿とペダルを巧みに動かし、ギリギリの戦闘を楽しんでいる。

ヴァルザカード・セカンドの管理者、スキアは罪なき人々やその人々を守るため、常に目を光らせていた。

キングジョーに乗るペダン星人のボウンは、自身の憧れの宇宙を守る正義の戦士ウルトラマンとの共闘が叶い、広い宇宙を駆け巡っていた。

一番槍の甘寧は国際警察機構に戻り、いち早く現場に駆け付け、任務に勤しんでいる。時にはパイオンBBBに乗って、敵のロボットと交戦することもあるようだ。

有馬鞠也ありままりやはシュロウガと共に元の世界へと戻ったが、何かとの戦いはしていない。が、彼も自分の戦いをしている。料理大会に出場し、有馬の料理を口にした審査員たちは過激なオーバーリアクションを取っていた。

電龍・フルアームズ・ステインガーは遂に宇宙船を見付け、心酔した組長の元へと帰り、自分の戦いに身を投じようとしていた。

ルーチャス・ハルパニアは母国ネオメキシコに戻り、何故かガンダムファイターに返り咲いて、第十四回ガンダムファイトに愛機ルチャドールガンダムに乗って出場していた。戦争では無いが、これはれっきとしたルーチャスの戦いだ。

聖ゲッターロボに乗る流竜馬は、まだ進化の途中であるため、別の宇宙で進化を続けている。究極の進化形態、ゲッターエンペラーとなるべく…！

残された東方不敗、ケンシロウ、あしゆら男爵、嘉承らを始めとした戦士たちは、銀河日ノ丸帝国の支配に抵抗するレジスタンスたちを纏め、日夜戦いを繰り返していた。

そして、勝てるかどうか、終わるかどうかも分からぬガイドルフに挑んだシユン、竜騎、レン、ドソク、流竜馬の五人は、暗い世界の中で戦い続けていた！

「オラアアア！ 死ねえ!!」

全身に狼の鎧を纏った瀬戸シユンは、雄叫びを上げながら大剣スレイブを振るい、群がって来る影の兵士たちを纏めて叩き切る。

次々と来る敵兵らを切り倒していく中、黒い甲冑を全身に身に纏った騎士、その名も黒騎士が現れ、暴れ回るシユンに両手剣を振り下ろすが、彼も気付いており、直ぐにスレイブで防いで鏖迫り合いを始め

る。

「ゲッタービィィム!!」

新ゲッターロボに一人で乗っている流竜馬はゲッタービームである程度一掃した後、ゲッタートマホークを取り出して襲い掛かる影の巨人たちを次々と切り倒し、前に進んでいく。

「ゲッタートマホオオオク! うおおお!!」

そのままゲッタートマホークを振るいながら雄叫びを上げ、待ち受けるガイドルフの元へシュンと共に向かう。

「ゲッターミサイル!」

マ・ドソクのゲッターカオス3は多数の敵機をゲッターミサイルで一掃した後、更に巨大な敵を大きな両腕に掴み、背中のスラスタを吹かせてから空中高く飛翔し、多数の敵の集団に叩き付け、一気に多数の敵を撃破する。

「グレートアバランチ!!」

技を決めれば、そこから合体を解除してゲッターカオス2にチェンジし、レン・クーに操縦を譲る。

「ゲッタークロー!」

合体した瞬間に襲い掛かる影の巨人を右手のクローを振るって抉り倒した後、左腕のゲッタードリルを回転させ、もう一体目を貫き殺し、更に高速移動して多数の敵をドリルで貫く。

「ゲッタードリルハリケーン!!」

多数の敵機を倒した後に、ゲッタードリルハリケーンを行ってさらに多くの敵を倒した。背後からの攻撃が来れば、即座に合体を解除し、ゲッターカオス1へとチェンジして今川竜騎に操縦の権利を譲る。

「行くぜ! ゲッタートマホーク!!」

自分の出番となった竜騎はゲッタートマホークを取り出し、背後から襲い掛かった影の巨人を切り裂いた後、更に二体目を切り倒して三体目を両断する。そこから敵の集団に向け、ゲッタービームを発射する。

「ゲッターアアビィィム!!」

周囲の敵の巨人集団を一掃すれば、再びゲッタートマホークを振るって更に敵を掃討した。それから三人の力を合わせ、ゲッターカオスロボ最大の武器を使う。

「俺たちは絶対に負けねえ！」

『例え相手がどんな奴であろうと！』

『俺たちは絶対に諦めねえ！』

三人の心を一つにしたゲッターカオス1は両手の中でエネルギー弾を収束し、それを敵に向かって投擲した。

『ゲッターカオスパーク!!』

結束した三名が叫びと共に放たれたゲッターカオスロボの必殺技の名は、ゲッターカオスパーク。ゲッターロボの完成体、真ゲッターロボの必殺技であるストナーサンシャインと同じく、両腕にゲッターエネルギーを収束してそれを前に両手の中で収束し、エネルギー弾を生成。これを敵に投げ付ける必殺技だ。

その威力は絶大であり、おそらくは真ゲッターロボのストナーサンシャインを上回る事だろう。それを受けた多数の敵は吹き飛び、壊滅状態に陥ったが、まだガイドルフが残っていた！

『混沌のゲッターめ、遂にここまで進化したか！　だが、これ以上は進化させぬ！　貴様ら三名とゲッターの進化もこれまでだ!!』

必殺技まで使えるようになったゲッターカオスロボを脅威と見なしたガイドルフは、自身の黒騎士のような外見を持つ巨大なロボットを召還し、それに乗り込んでゲッターカオスを潰しに掛かった。

対するゲッターカオスもゲッタートマホークの刃を大鎌にするゲッターサイトに切り替え、ガイドルフが駆る巨大ロボットに挑む。その後を自分に挑んだ黒騎士を倒したシユンと竜馬の新ゲッターロボが続いた。

この戦いの終幕に至るまでは、途方もない月日が掛かる事だろう。だが、彼らは戦い続ける。例え、終わりなき戦いであろうとも…。